

本山町埋蔵文化財調査報告書第6集

松ノ木遺跡Ⅲ

(高知県長岡郡本山町)

1993. 3

本山町教育委員会

松ノ木遺跡Ⅲ

本山町埋蔵文化財調査報告書第6集

1993.3

本山町教育委員会

巻頭カラー 1

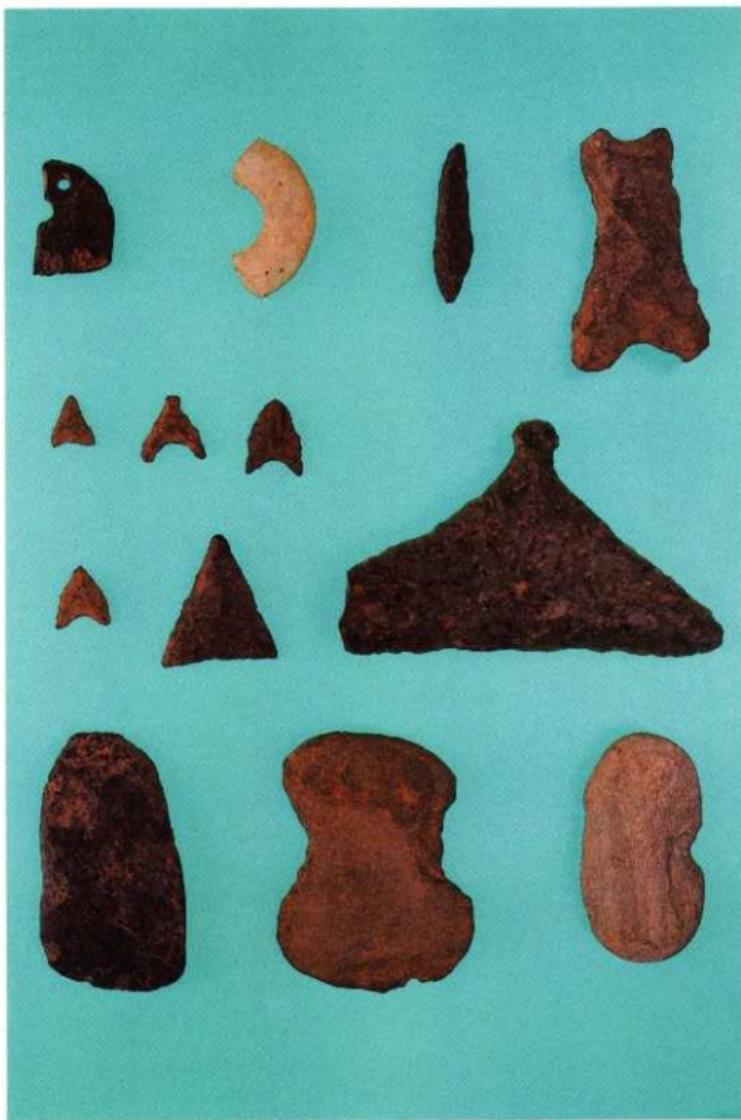


全 景



ST 4

巻頭カラー 2



石器類

序

本山町教育委員会始まって以来の大事業となりました松ノ木遺跡の発掘調査は、本年で3年目を迎えることになりました。

これまで、この地は長徳寺遺跡では縄文・弥生時代の遺物や多宝塔の根石群が発見され、いうなれば期待の土地でありました。松ノ木遺跡は西日本屈指といわれる遺物、住居跡、祭祀遺構などが発見され、長期にわたる遺跡であることが判明しました。

遺物の量においても高知県下で出土した縄文時代の全ての量以上の土器等が、僅か60m²の狭き所で一度に発掘され、県民、研究者から注目を浴びたものです。また、從来、高知県下の縄文時代の遺跡は県西部の幡多地方に片寄りがみられていたものの、吉野川上流域の山間部の松ノ木遺跡では住居跡の発見などが相次ぎ、郷土の歴史をひもとくためにも学術的価値の高さを感じるところでもあります。

この調査に御協力いただきました高知県、関係者の皆様に深く感謝申し上げますとともに、今後この報告書が考古学上貴重な参考資料として活用され、埋蔵文化財に対する人々の認識が深まるように念じます。

平成5年3月

高知県長岡郡本山町教育委員会

教育長 和田 勝

例　　言

1. 本書は高知県長岡郡本山村教育委員会が国庫補助を受け、平成4年度に実施した本山村寺家に所在する「松ノ木遺跡」の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は550m²について実施し、1次調査を平成4年10月13日～同年12月23日、2次調査を平成5年3月1日～同年3月19日の2回に分けて行った。
3. 本発掘調査は本山村教育委員会が実施し、1次発掘調査を(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター調査員前田光雄、2次発掘調査を同・吉成承三が担当した。遺構実測等を同・主任調査員門脇隆、同・調査員寺川綱が協力を得た。また日本考古学协会会员木村剛朗氏には発掘調査等の指導を仰いだ。動物遺存体は早稲田大学の金子浩昌先生に鑑定して頂いた。事務全般は本山村教育委員会松葉孝史が担当した。
4. 本書の編集は本山村教育委員会が行った。執筆は「第Ⅱ章 第4節 2次調査の調査結果」を吉成が、特に執筆者名を記していないものについては前田が行った。
5. 発掘作業及び整理作業で、下記の方々の協力を得た。
発掘作業—秋山清稔、石川真一郎、伊藤佐代子、今西和秀、川村貞子、近藤花子、坂本信彦、竹田瑞男、田上佐恵子、中澤俊雄、中野内愛子、樋口佳伯、宮村清郎、村山志賀野、山中安キ
整理作業—《遺物洗浄・注記・接合・補填》門田美知子、矢野雅、田村美鈴、橋田美紀
《遺物拓本・実測》浜田雅代、門田美知子、川村亜矢、竹村延子
《遺構・遺物トレース》浜田雅代、川村亜矢、山中美代子、宮地佐枝
6. 発掘及び報告書作成に当たり下記の諸氏、諸機関から助言・教示を賜った。
阿部芳郎、犬飼徹夫、金子浩昌、木村剛朗、下條信行、出原忠三、中野良一、丹羽佑一、平井勝、山本悦世、文化庁、高知県教育委員会、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
(敬称略)

凡　　例

1. 採図中のドット記号は特に指定のない限り、以下の通りである。

| | | | |
|-----|--------------|-------------|-------------|
| 土器類 | ○一分類不明 | ×—I群（縄文早期） | □—II群（縄文前期） |
| | ■—III群（縄文中期） | ●—IV群（縄文後期） | △—V群（縄文晚期） |
| | ▲—VI群（弥生～古墳） | ★—土製品 | |
| 石器類 | ◇—石器・剝片類 | ☆—石製品 | |

2. 遺物実測図の縮尺は $\frac{1}{50}$ を基本とし、小型品は $\frac{1}{20}$ 、大型品は $\frac{1}{10}$ である。

報告書要約

1. 遺跡名 松ノ木遺跡 遺跡番号 250042 遺跡地図No. 9-9
2. 所在地 高知県長岡郡本山町寺家松ノ木・落合
3. 立地 古野川左岸の低位段丘 標高248m
4. 種類 繩文時代、弥生時代、古墳時代、平安時代、中近世
5. 調査主体 本山町教育委員会
6. 調査契機 学術調査
7. 調査期間 1次調査-平成4年10月13日～同年12月23日
2次調査-平成5年3月1日～同年3月19日
8. 調査面積 1次調査-450m²
2次調査-100m²
9. 検出遺構・出土遺物 検出遺構-縄文時代後期前半堅穴住居跡、同・土器捨て場、S X (性格不明遺構) 4基、S K (土坑) 7基、ピット約50基。
出土遺物-縄文時代早期～晚期土器、ミニチュア土器、石錘、石匙、玦状耳飾り、弥生時代前期～後期土器等。
10. 内容要約 松ノ木遺跡は平成2年に発見されて以来、今回の調査で3度目の調査となる。平成2年度に縄文時代後期前半の一括性の高い土器群が多量に出上し、高知県下においては未命名の一群であることから「松ノ木式」と型式名を付与した。松ノ木式は宿毛式に後続し、また宿毛式の流れの上に成り立つものと考えられる。高知県下に於いて、中央山間部では縄文時代の遺跡は少なく、松ノ木遺跡の存在理由は大きく、平成3年には国庫補助を受け学術調査を実施した。その結果、縄文時代ばかりではなく弥生時代、古墳時代の住居跡も検出され、複合遺跡であることが判明し、更に注目される遺跡となっている。
平成4年度の3回目の調査は引き続き国庫補助の対象として、継続調査を実施した結果、松ノ木式の前段階である宿毛式期の住居跡が僅か1棟ではあるが検出された。また、住居跡外からも宿毛式土器が出上していることから、宿毛式→松ノ木式への変遷の蓋然性は高くなった。それ以外に土器としては、縄文時代早期から晩期、その中でも今回の調査では前期に纏まりが認められ、また弥生時代前期のものが出土し、山間部では珍しく松ノ木遺跡は継続性のある立地条件を有した遺跡であることは注目される。

本文目次

巻頭カラー 1, 2

序

例言・凡例・報告書要約

目次（本文目次／挿図目次／表目次／写真図版目次）

| | |
|---|-----|
| 第Ⅰ章 調査経過 | 1 |
| 第1節 調査に至る経過 | 1 |
| 第2節 発掘経過 | 1 |
| 第Ⅱ章 遺構と遺物 | 9 |
| 第1節 遺構 | 9 |
| (1) C 4 グリッド遺物集中地点, (2) S T 4, (3) 土器捨て場, (4) S X 5, (5) S X 6, (6) S K 6, (7) S K 8, (8) S K 9, (9) S K 11, (10) B 9 P 1, (11) C 9 P 1, (12) G 10 P 1, (13) S X 4, (14) S X 3, (15) S K 7, (16) S K 10, (17) S K 12, (18) 近世の遺構 | |
| 第2節 遺構内出土遺物 | 35 |
| (1) C 4 グリッド遺物集中地点, (2) S T 4, (3) 土器捨て場, (4) S X 5, (5) S X 6, (6) S K 6, (7) S K 8, (8) S K 9, (9) S K 11, (10) B 9 P 1, (11) C 9 P 1, (12) G 10 P 1, (13) S X 4, (14) S D 2, 遺物観察表 | |
| 第3節 遺構外出土遺物 | 53 |
| (1) 縄文土器 1) 縄文土器の分類・2) 縄文土器の所属時期, (2) 弥生土器, 遺物観察表, (3) 石器 1) 石器の分類・2) 石器の所属時期, (4) 土製品, 遺物観察表 | |
| 第4節 2次調査の調査結果 | 90 |
| (1) 2次調査の概要, (2) 各トレンチの内容, (3) 出土遺物, (4) 2次調査の結果, 遺物観察表 | |
| 第Ⅲ章 まとめ | 103 |
| 参考文献 | |
| 写真図版 | |

挿図目次

| | | | |
|-------------------|----|-----------------------|-----|
| 第1図 本山町位置図 | 1 | 第32図 造構内出土遺物（2） | 42 |
| 第2図 松ノ木遺跡位置図 | 2 | 第33図 造構内出土遺物（3） | 43 |
| 第3図 松ノ木遺跡周辺図 | 2 | 第34図 造構内出土遺物（4） | 44 |
| 第4図 調査区配置図 | 3 | 第35図 造構内出土遺物（5） | 45 |
| 第5図 松ノ木遺跡造構全体配置図 | 4 | 第36図 造構内出土遺物（6） | 46 |
| 第6図 平成4年度造構全体配置図 | 5 | 第37図 造構内出土遺物（7） | 47 |
| 第7図 遺物出土全体図 | 7 | 第38図 造構内出土遺物（8） | 48 |
| 第8図 C 4グリッド遺物集中地点 | 10 | 第39図 造構外出土遺物（1） | 62 |
| 第9図 S T 4 | 11 | 第40図 造構外出土遺物（2） | 63 |
| 第10図 土器捨て場 | 14 | 第41図 造構外出土遺物（3） | 64 |
| 第11図 S X 5 | 15 | 第42図 造構外出土遺物（4） | 65 |
| 第12図 S X 6 | 16 | 第43図 造構外出土遺物（5） | 66 |
| 第13図 S K 6 | 17 | 第44図 造構外出土遺物（6） | 67 |
| 第14図 S K 8 | 18 | 第45図 造構外出土遺物（7） | 68 |
| 第15図 S K 9 | 19 | 第46図 造構外出土遺物（8） | 69 |
| 第16図 S K 11 | 21 | 第47図 造構外出土遺物（9） | 81 |
| 第17図 B 9 P 1 | 22 | 第48図 造構外出土遺物（10） | 82 |
| 第18図 C 9 P 1 | 23 | 第49図 造構外出土遺物（11） | 83 |
| 第19図 G 10 P 1 | 24 | 第50図 造構外出土遺物（12） | 84 |
| 第20図 S X 4 | 25 | 第51図 造構外出土遺物（13） | 85 |
| 第21図 S X 3 | 26 | 第52図 造構外出土遺物（14） | 86 |
| 第22図 S K 7 | 27 | 第53図 2次調査トレント配置図 | 91 |
| 第23図 S K 10 | 28 | 第54図 2次調査トレントセクション（1） | 93 |
| 第24図 S K 12 | 29 | 第55図 2次調査トレントセクション（2） | 95 |
| 第25図 近世造構全体配置図 | 31 | 第56図 2次調査トレントセクション（3） | 96 |
| 第26図 水田跡 | 32 | 第57図 2次調査出土遺物（1） | 98 |
| 第27図 S D 2 | 33 | 第58図 2次調査出土遺物（2） | 99 |
| 第28図 F P 2 | 34 | 第59図 松ノ木遺跡時期別造構配置図 | 104 |
| 第29図 F P 3 | 34 | | |
| 第30図 F P 4 | 34 | | |
| 第31図 造構内出土遺物（1） | 41 | | |

表 目 次

| | | | |
|---------------------|----|----------------------|-----|
| 第1表 造構内出土土器観察表 1 | 49 | 第12表 造構外出土弥生土器観察表 1 | 76 |
| 第2表 造構内出土土器観察表 2 | 50 | 第13表 石器分類別造構内出土一覧表 | 77 |
| 第3表 造構内出土土器観察表 3 | 51 | 第14表 石錐 I・II群分類一覧表 | 79 |
| 第4表 造構内出土石器観察表 1 | 51 | 第15表 石錐 I・II群分類別分布表 | 79 |
| 第5表 造構内出土石器観察表 2 | 52 | 第16表 造構外出土石器観察表 1 | 87 |
| 第6表 造構外出土縄文土器観察表 1 | 70 | 第17表 造構外出土石器観察表 2 | 88 |
| 第7表 造構外出土縄文土器観察表 2 | 71 | 第18表 造構外出土石器観察表 3 | 89 |
| 第8表 造構外出土縄文土器観察表 3 | 72 | 第19表 2次調査出土土器観察表 | 102 |
| 第9表 造構外出土縄文土器観察表 4 | 73 | 第20表 2次調査出土石器・石製品観察表 | |
| 第10表 造構外出土縄文土器観察表 5 | 74 | | 102 |
| 第11表 造構外出土縄文土器観察表 6 | 75 | 第21表 縄文時代造構時期別一覧表 | 103 |

写真図版目次

| | |
|--|---|
| 写真1 造跡遺景、遺跡全景 | 写真13 2次調査A区、2次調査B区南、2次調査B区北 |
| 写真2 遺跡近景 TR 1, C 4 グリッド遺物集中地点(1) | 写真14 TR 3, TR 4, TR 4 遺物出土状況、TR 5, TR 6, TR 9, TR 10, TR 10サブトレ |
| 写真3 C 4 グリッド遺物集中地点(2)、土器捨て場(1) | 写真15 TR 11, TR 12, TR 12, TR 17, TR 17, TR 18 |
| 写真4 土器捨て場(2)、ST 4 (1) | 写真16 遺物写真 |
| 写真5 ST 4 (2); 確認状況、セクション、遺物出土状況、中央部炭化材 | 写真17 遺物写真 |
| 写真6 SX 5, SX 5セクション | 写真18 遺物写真 |
| 写真7 SX 6, SX 6 | 写真19 遺物写真 |
| 写真8 SK 9, SK 11, SK 11セクション | 写真20 遺物写真 |
| 写真9 B 9 P 1, SX 4, G 10 P 1 | 写真21 遺物写真 |
| 写真10 SX 3, SX 3 | 写真22 遺物写真 |
| 写真11 SK 7, SK 10, SK 12 | 写真23 遺物写真 |
| 写真12 SX 6・水田・SG 1・SG 2, B 9 ~10グリッド遺物出土出土状況、No.172出土状況、No.98出土状況、ミニチュア土器出土状況、SX 3周辺調査風景、ST 4周辺調査風景、土壤ふるい掛け | 写真24 遺物写真 |
| | 写真25 遺物写真 |
| | 写真26 遺物写真 |

第Ⅰ章 調査経過

第1節 調査に至る経過

平成2年3月に高知県長岡郡本山町寺家に於いて実施されていた第Ⅲ期山村振興農林漁業対策事業小規模土地改良（農道）事業の工事の際、寺家字松ノ木・落合の農道拡幅工事中に松ノ木遺跡が発見された。発見された遺物は縄文時代後期に含まれるもので、高知県下では該期の土器群は認識されることなく、また吉野川流域に於ける縄文時代の集落は少なく、考古学的にも重要遺跡であることが認識され、平成3年度には国庫補助を受け、松ノ木遺跡の発掘調査を本山町が実施した（第1図）。平成3年度の調査は平成2年度に発見された土器捨て場の北側部分の確認調査を行い、新たに弥生時代、古墳時代の堅穴住居跡を計3棟を検出し、本遺跡は縄文時代ばかりではなく、他の時代も含む複合遺跡であることが判明し、山間部に於ける遺跡のありようとしては注目される。しかし、当初の目的であった縄文時代の集落の把握については、S X 1基、S K 2基を確認したに留まり、集落の展開の把握までには至らなかった。

平成4年度は再度、縄文時代の集落を把握する為に平成3年度に引き続き、新たに南側部分の水田・畑地を調査対象とした（第4図）。



第1図 本山町位置図

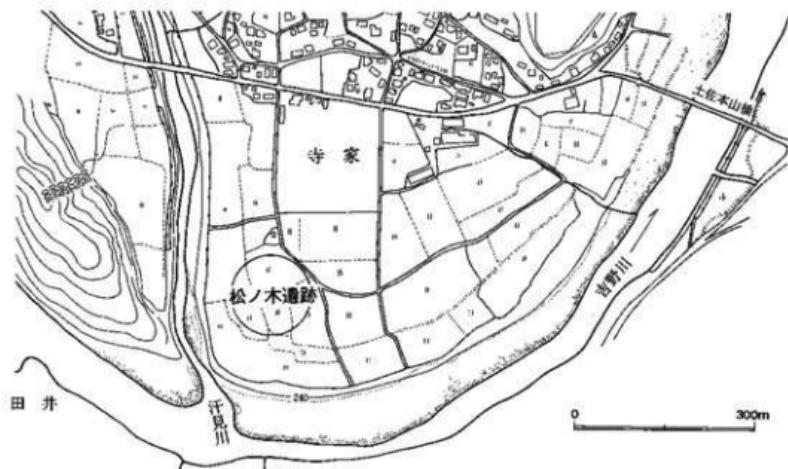
第2節 発掘経過

本年度は1・2次調査の2回に分けて発掘調査を実施した。1次調査は平成4年10月13日から同年12月23日までの44日間、2次調査を平成5年3月1日から同年3月19日の14日間の調査を行った（第4図）。

1次調査は平成3年度と同一平坦面の南側縁辺部に調査区を設け、TR 1は西端に南北31m×東西6m、TR 2を南端に東西20m×南北13mのトレンチを設定し、平成3年度の測量基準を使用し、便宜的に東西軸をA～Gのアルファベット、南北軸を1～11の数字でそれぞれグリッド名を付した。検出遺構については平成2年度の続きと考えられるA 3グリッドの落ち込みは土器捨て場とし、堅穴住居跡S Tは平成3年度からの続き番号を付しS T 4とし、またS X、

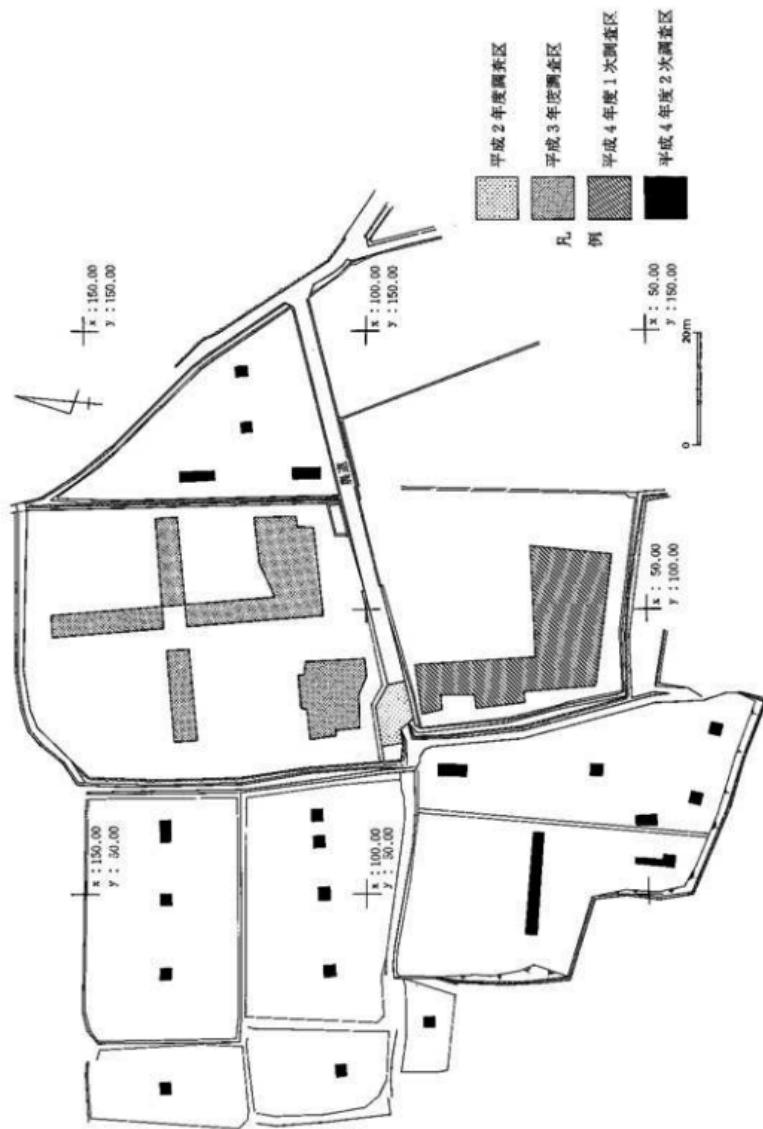


第2図 松ノ木遺跡位置図 (2万5千分の1)



第3図 松ノ木遺跡周辺図

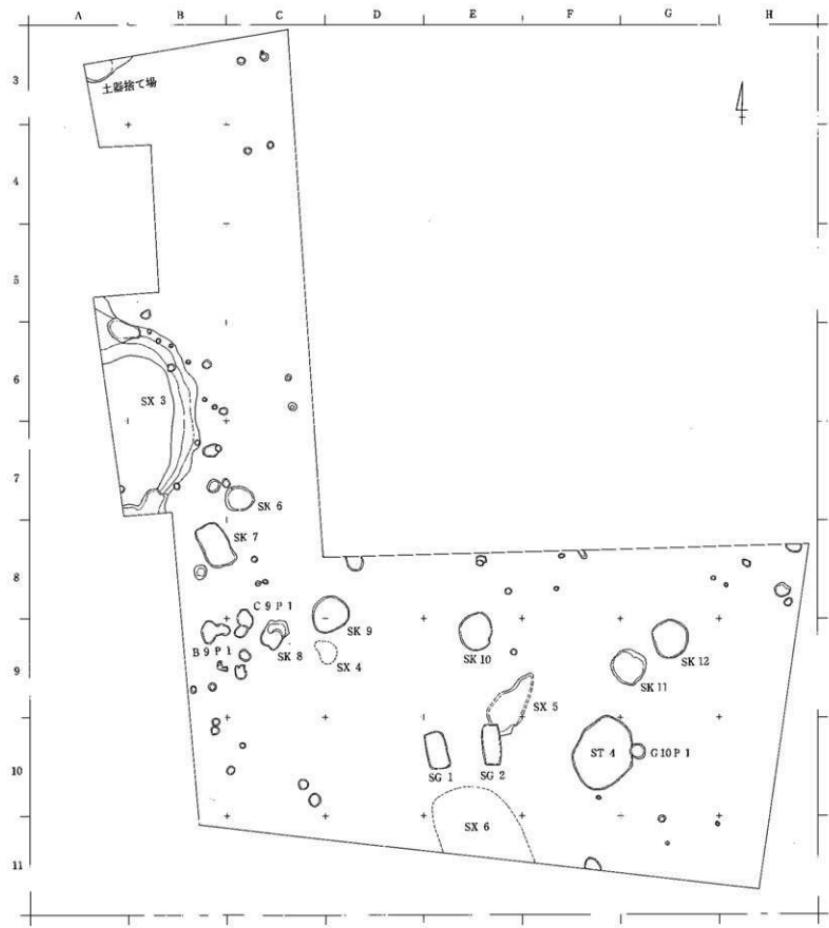
第4図 検査区配置図



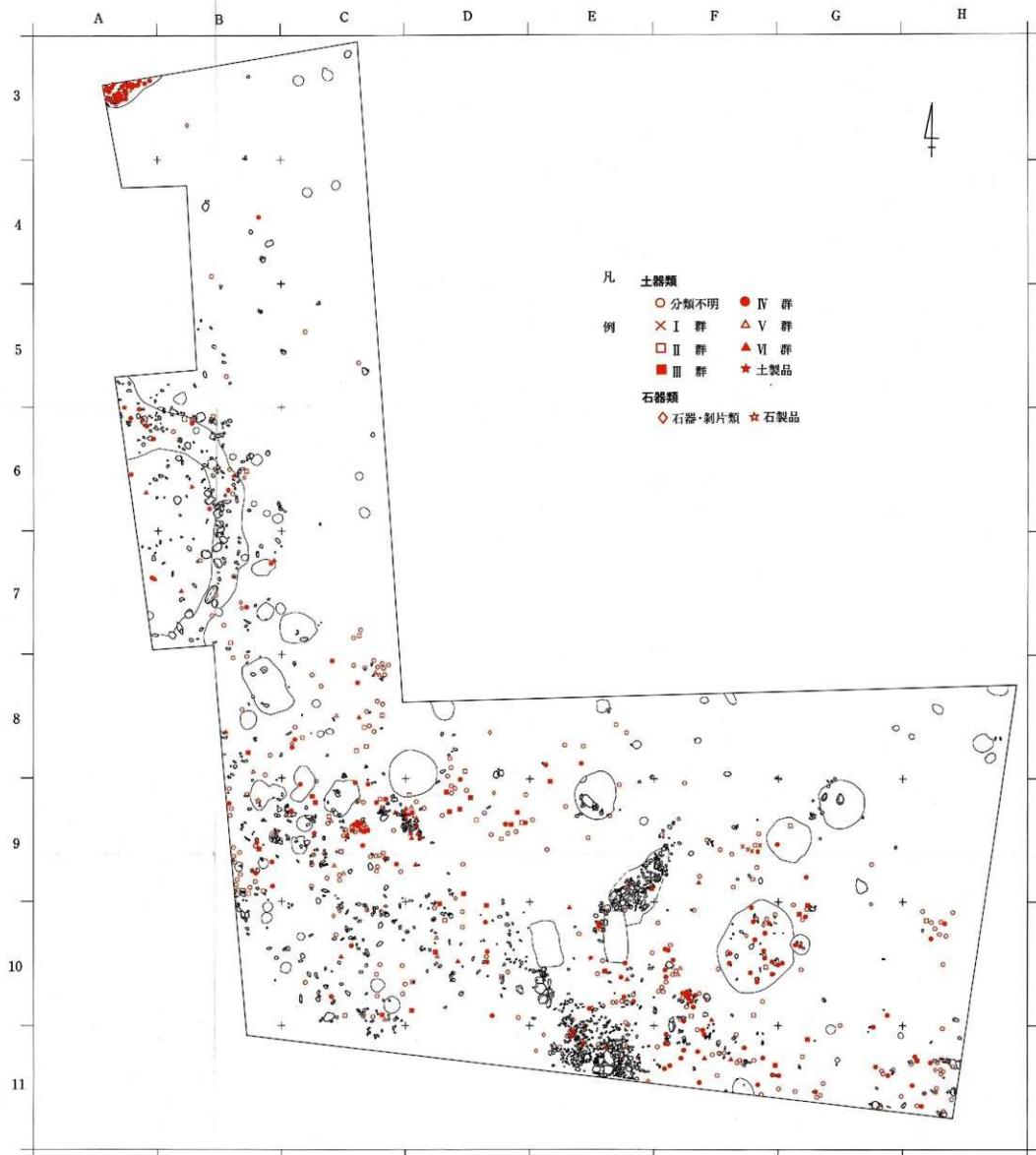
SKも同様にSX3～6、SK6～12と遺構名を付した。ピットについては各グリッド単位でB9P1と言ふ具合にグリッド名を冠し遺構名を順次付した。遺物については遺構外出土遺物はグリッド単位で順次番号を付し、採り上げを行った。検出した遺構は縄文時代後期前半・宿毛式期の堅穴住居跡1棟、SX4基、SK7基、及びピットであった。縄文時代の住居跡については住居跡の建築資材と考えられる炭化材が多量に出土した為、完掘は行わず、平面図等を作成後に埋め戻しを行った。また他の遺構については完掘し、遺物の採り上げも行った後に住居跡と同様に埋め戻しを行い保存の対策を講じた。



第5図 松ノ木遺跡遺構全体配置図
(※ピット等は省略してある)



第6図 平成4年度遺構全体配置図



第7図 遺物出土全体図

第Ⅱ章 遺構と遺物

第1節 遺構

1次調査に於いて検出した主な遺構は堅穴住居跡（S T 4）1棟、S Xは4基、S Kは7基、ピットを約50基検出した。またA 3グリッドでは平成2年度に調査を行った土器捨て場の続きを検出している（第5図）。なお、S Kについては現場では各グリッド単位で遺構名を付したもの、報告書掲載に際しては平成3年度からの通し番号に変更した。C 7 S K 1→S K 6、C 8 S K 1→S K 7、C 9 S K 1→S K 8、D 9 S K 1→S K 9、E 9 S K 1→S K 10、G 9 S K 1→S K 11、G 9 S K 2→S K 12。

(1) C 4グリッド遺物集中地点（第8図、第31図）

C 4グリッドで深掘調査を行い、標高246mから247mの深さ、層位にして第Va～Vla層のシルト層で礫を主体とした遺物集中地点を検出した。平面的には径2mの範囲内に集中が認められ、チャート製の剝片及び10~20gの小型の石錐が5点出土している。石錐は短軸部分の側縁に打ち欠きが認められるものである。礫は約50点程出土しており、接合関係が2組認められ、比高差約30cmのものが接合関係にあった。出土した礫には被熱痕等は認められなかった。上器は出土していないものの、層位からして縄文時代早期の所産と考えられる。

(2) S T 4（第9図、第31図）

F 10、G 10グリッドにまたがり、水田耕作土除去後に検出した。東側部分をG 10 P 1に切られるものの、平面形は2.8×2.5mの小判形を呈するやや小型の住居跡である。長軸方向はN-20°-Eである。深さは上部が耕作により削平されており、残存部は10~15cmと浅い。床面はほぼ平らで、壁は緩やかに立ち上がる。住居跡内全面に径5~10cmの炭化材が出土しており、炭化材の保存を講じた為、柱穴及び掘り方の検出はしなかった。覆土は4層に分層でき、暗褐色土の第2層を主体としている。第3層の褐色土以外の層には炭化物が多量に含まれていた。

出土遺物は炭化材が多量に出土しており、中央よりやや南側部分に径約10cmの炭化材が立ったままの状態で出土しており、中心柱としての機能が考えられる。壁際からは放射状に径約5cmの炭化材が中心柱と考えられる炭化材方向に収斂する傾向にある。床面には径15~20cmの円礫が9点出土している。土器は20点程と少ないものの大部分が縄文時代後期前半に含まれるもので、その中で宿毛式と考えられるものが3点出土している。土器としては他に縄文時代前期後半に含まれるものも2点出土しているが混入と考えられる。石器はサヌカイト製の石錐4点及び剝片・碎片が約20点程出土している。また獸骨の白色骨片が微量出土しているものの、細片

247.5m
A

247

246.5

246

245.5m

凡 標
例 石鉈
刺片

247.5m
A'

247

246.5

246

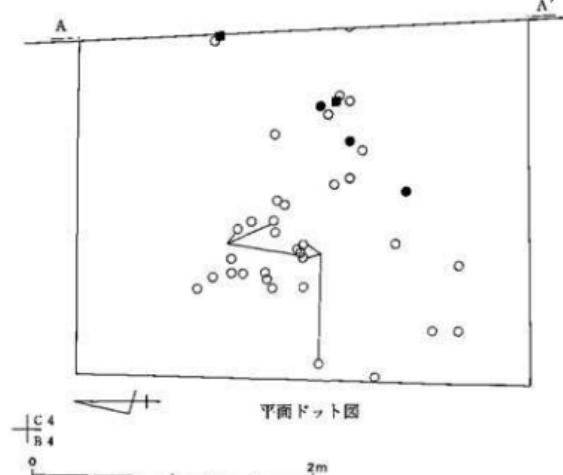
245.5m



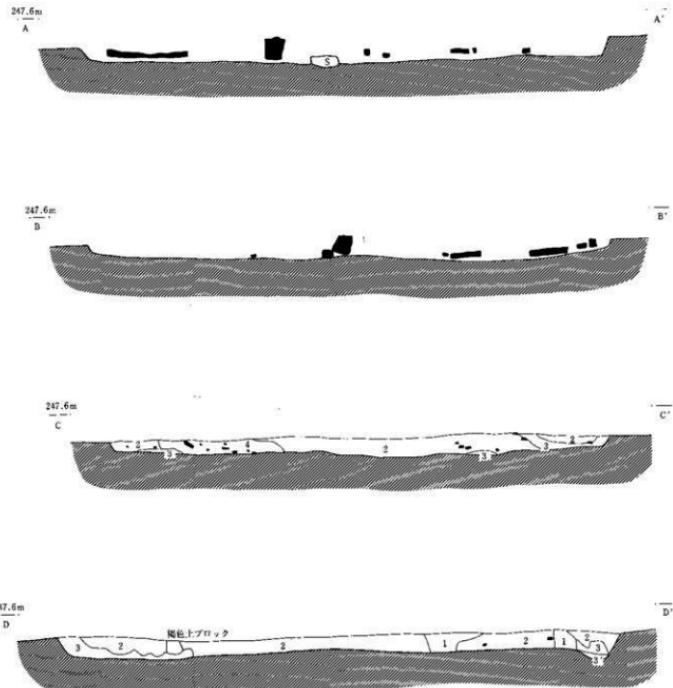
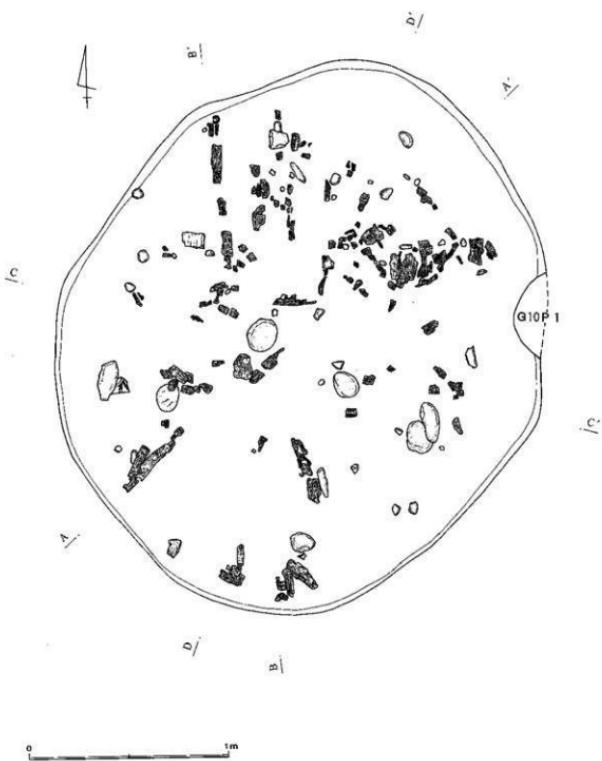
垂直分布図

(土層説明)

1. 背灰褐色粘土 : 水田耕作土。
下は、赤褐色シルト層；鐵分多い。しまり有。
バニス含む。
 - b. * : a層より鐵分少なく、
明るい。バニス含む。
 - V a. 黄褐色シルト層 : 上部はやや鐵分多い。
バニス含む。
 - b. * : 鐵分少なく、明るい。
バニス含む
- II a. 黄褐色シルト層；しまり有。バニス含む。
b. 黄褐色シルト層；しまり有。バニス含む。
III. 淡褐色砂質層 : あらこまかいい砂質土。
バニス混入。
下部は砂質土が僅くな
る。



第8図 C 4 グリッド遺物集中地点



(土層説明)

1. 黄褐色土：黄色ブロック含む。炭化物微量。しまりにやや欠ける。
2. “ ”；しまり、粘性有。炭化物多量に含む。
3. 暗色土：しまり、粘性有。炭化物は含まない。
4. 黑褐色土：しまり、粘性有。炭化物多量に含む。

第9図 ST 4

の為、同定できない。

本住居跡は出土遺物からして縄文時代後期前半・宿毛式期の所産と考えられる。

(3) 土器捨て場（第10図、第31～35図）

平成2年度に検出した部分の南側罐の肩に相当する部分を本年度調査区のA3グリッドで、自然堆積土層第IIIb層除去後に検出した。平成2年度の調査では部分発掘の為、集落内での本遺構の性格付は判然としなかった為、遺構名は付していない（出原忠三 1992）。しかし、微地形的判断及び遺物の出土状況からして、所謂「土器捨て場」として取り扱うのが妥当と判断した為、本報告書では「土器捨て場」として取り扱う。

調査区内での規模は1.9×0.8m、深さ0.9mを測り、南から北側方向へ落ち込む。調査区外へと広がり、平成2年度部分と繋がるものと考えられる。底面は自然堆積土層第IIId層の暗黄褐色土層である。覆土は3層に分層でき、第1層は暗黄褐色土ではなく水平堆積を見せ、第2層は暗褐色土で炭化物及び縄文土器等を多量に含む。またイノシシカシカの歯骨片と考えられる白色骨片を微量含んでいる。第3層は褐色土で縄文土器を少量含んでいた。第2、3層はレンズ状堆積を見せている。

遺物は縄文時代後期前半を主体とし、第1層には縄文時代前期後半の土器5点が含まれるもの、流入の可能性が強い。礫及び土器が重なるように雜まつて出土しており、第2層は特に出土量は多かった。出土土器は大型破片が多いものの、完形に近いものは少ない。石器は土器に比して少なく、サヌカイト製尖頭状石錐、小型の抉入石器、石錐2点が出土している。

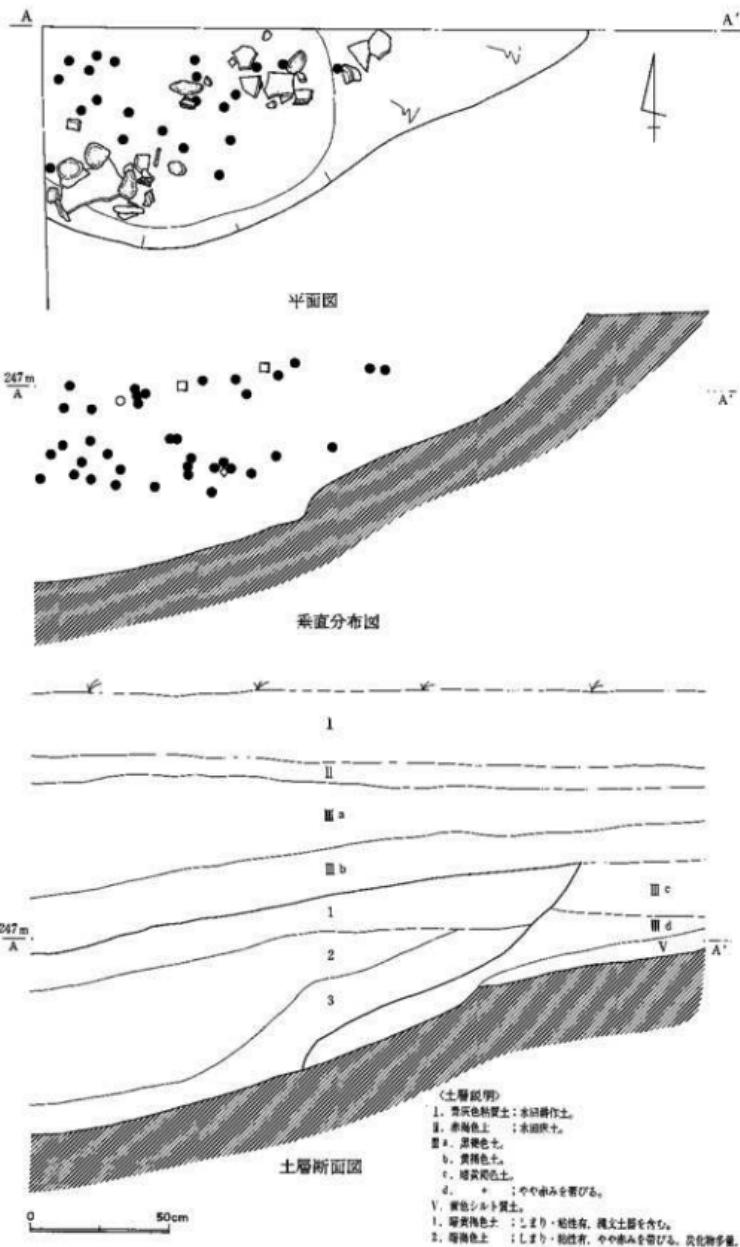
本上器捨て場は出土遺物からして、縄文時代後期前半・松ノ木式期の所産と考えられる。

(4) S X 5（第11図、第36図）

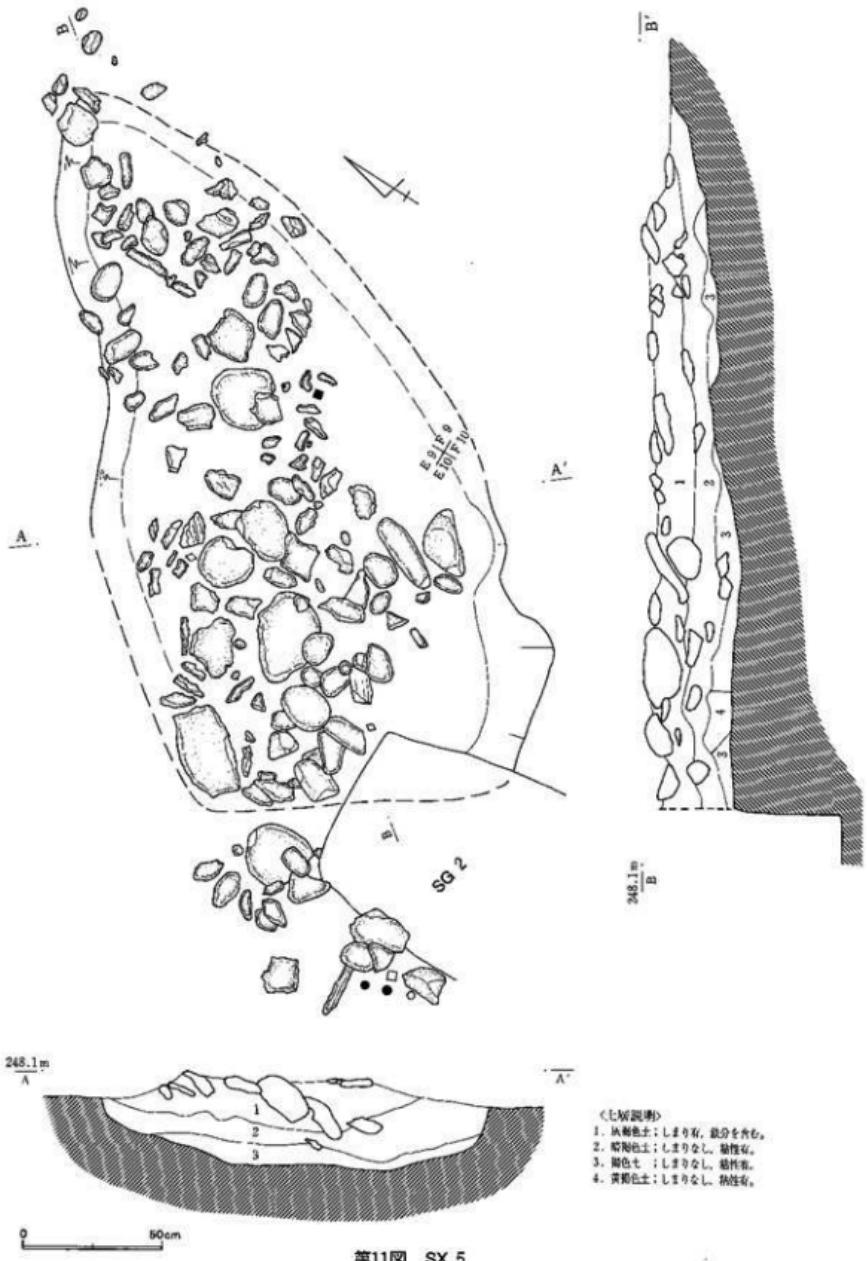
E9・10、F9グリッドを中心とする水田耕作土除去後に検出した。遺構を4分割し、北西部と南東部の対角部分の調査を行い、他の2分割部分は現状保存を講じた。南側部分は近世墓により擾乱されているものの、平面形は北側部分がすばる長楕円形に近い形態を呈している。土坑内には疊の集積が見られ、規模は残存長2.7×1.4m、深さ35cmを測る。長軸方向はN-30°-Eである。底面は僅かに起伏があるもののほぼ平坦で、壁はなだらかに立ち上がる。覆土は4層に分層でき、第1～3層が主体でレンズ状堆積を見せている。第1層に疊が多量に含まれており、上部層の水田耕作土の影響で灰色を帯びる。第2層の暗褐色土中にも疊は含まれる。

遺物は自然の円疊が100点以上出土しており、南側部分に比較的大型疊が集中する。完形疊で占められ、破損疊は少なく、また被熱痕等は認められなかった。土器としては細片が多いものの大部分が縄文時代後期前半に含まれ、石斧が第1層疊間中より、チャート製石錐が第3層中より各々1点、石錐3点が出土している。

本S Xの性格は不明であるが、縄文時代後期前半宿毛式から松ノ木式期にかけての所産か。



第10図 土器捨て場



第11図 SX 5



第12図 SX 6

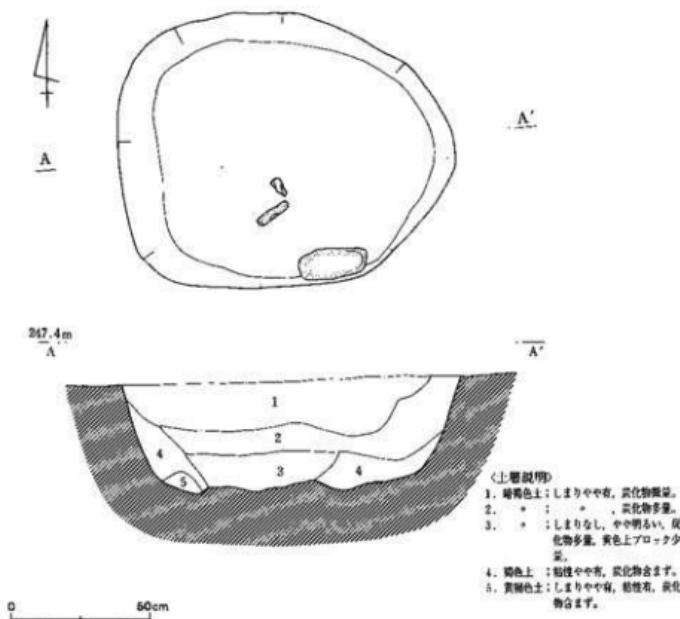
(5) S X 6 (第12図、第36図)

E 11グリッドの現代の水田除去後に検出した。部分的に近世の水田によって切られている。南側部分は調査区外に広がり、調査区内では径約3mの半円を呈し、多量の礫の集積を検出した。中央部分には50cm余りの大型礫を配し、回りを多量の中小礫が取り囲む。大部分が自然礫で赤化礫は認められなかった。

出土遺物は礫に混じって9点の石錐が出土しており、また磨製石斧、磨石が各1点、土器の量は少なく縄文時代前期及び後期に含まれるもののが数点出土している。本S Xの性格は不明であるが、所属時期は縄文時代後期前半に含まれる可能性が強い。

(6) S K 6 (第13図、第37図)

C 7グリッドの水田耕作土除去後に検出した。南側にはS K 7が所在する。平面形は椭円形を呈し、規模は1.2×0.97m、深さ約35cmを測る。長軸方向はN-88°-Eでは東に向く。

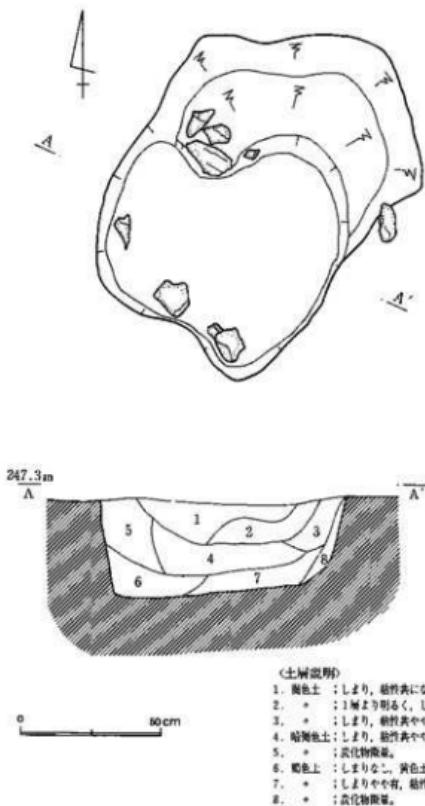


第13図 SK 6

底面はやや起伏があり、壁は僅かに傾斜を持って立ち上がる。覆土は5層に分層でき、第1～4層の暗褐色土及び褐色土が主体となっている。第1～3層はレンズ状堆積を見せ、第2、3層中には炭化物が多量に含まれていた。第4層は再堆積上で炭化物は含まれていない。

出土遺物は少なく、縄文時代後期に含まれる粗製の地文が条痕の土器片が出土しているものの、図示できなかった。石器はチャート製スクレイパーが1点、サスカイト製網片5点が出土している。他に底面から大型礫、小礫が各々1点ずつ出土しているのみである。

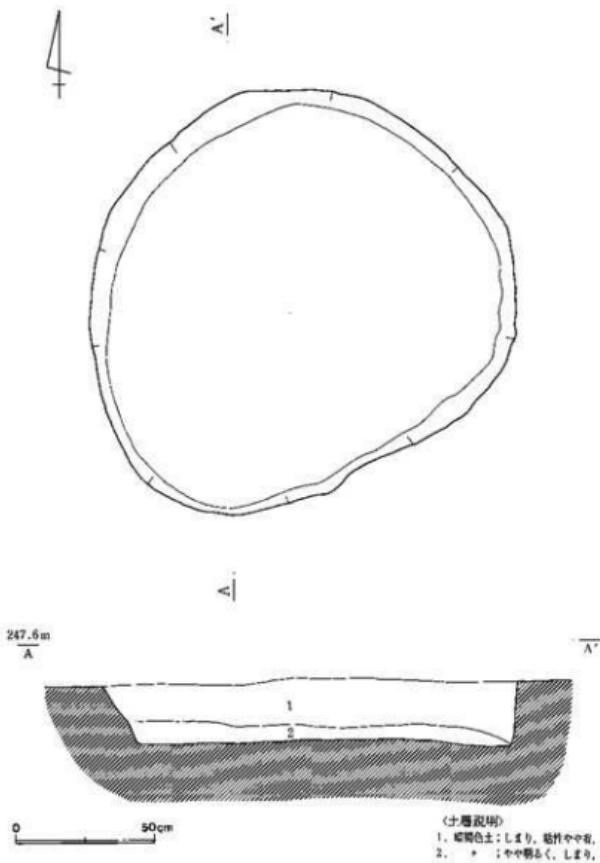
本SKの所属時期は判然としないものの、縄文時代後期の可能性がある。



第14図 SK 8

(7) SK 8 (第14図, 第37図)

C 9 グリッドの第III層中で緩傾斜地に検出した。平面形は不整長方形を呈する。北側部分で一旦テラス状に緩やかに傾斜する段を形成した後、底面を形成する。テラスと底面の比高差は25cm弱を測る。規模は 1.2×0.85 m, 深さ33cmを測る。長軸方向はN-38°-Eである。底面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は8層に分層でき、レンズ状にやや入り組んだ状態の堆積を見せてている。第4, 5層が暗褐色土で、他の層は褐色土である。第5, 8層に炭



第15図 SK 9

化物が微量含まれ、第6層に黄色土が混入する。

出土遺物は少なく、縄文時代後期末と考えられる鉢片1点とサヌカイト製の石鏃2点、礫数点が出土している。またシカの中足と考えられる白色骨片が1点出土している。

本SKは出土遺物からして、縄文時代後期後半から末の所産と考えられる。

(8) SK9 (第15図、第37図)

C・D-8・9グリッドに位置し、水田耕作土除去後に検出した。平面形は直径約1.5mを測るほぼ円形の土坑である。深さは約20cmを測り、底面はほぼ平坦である。壁はやや傾斜を持って直線的に立ち上がる。覆土は2層に分層でき、共に暗褐色土で第1層に炭化物を微量含む。第1、2層共に水平堆積を見せていている。

出土遺物は微細遺物が多く、篩選別によりサヌカイト製石鏃が6点、黒曜石製剝片1点、サヌカイト製剝片2点が出土している。土器は少なく、縄文土器が3点出土したのみで、前期の彦崎ZII式、後期の松ノ木式が1点ずつ出土している。またシカ・イノシシの歯骨の白色骨片微量と、マダイの基後頭骨、環椎（第1腹椎）、腹椎（第6か7）の3点が出土している。

本SKの所属時期は石鏃の形態及び土器からして、縄文時代前期後半の可能性がある。

(9) SK11 (第16図、第37図)

G9グリッドで水田耕作土除去後に検出した。平面形はほぼ円形を呈し、直径1.4m、深さ25cmを測る。底面は起伏が激しく、壁はなだらかに立ち上がる。覆土は8層に分層できるものの、第7、8層の暗褐色土を主体とし、南北セクションで見ると南から北方向に土層の傾きが認められ、プロックの混入が目立つ。炭化物は主体の第7層中に少量含まれる。

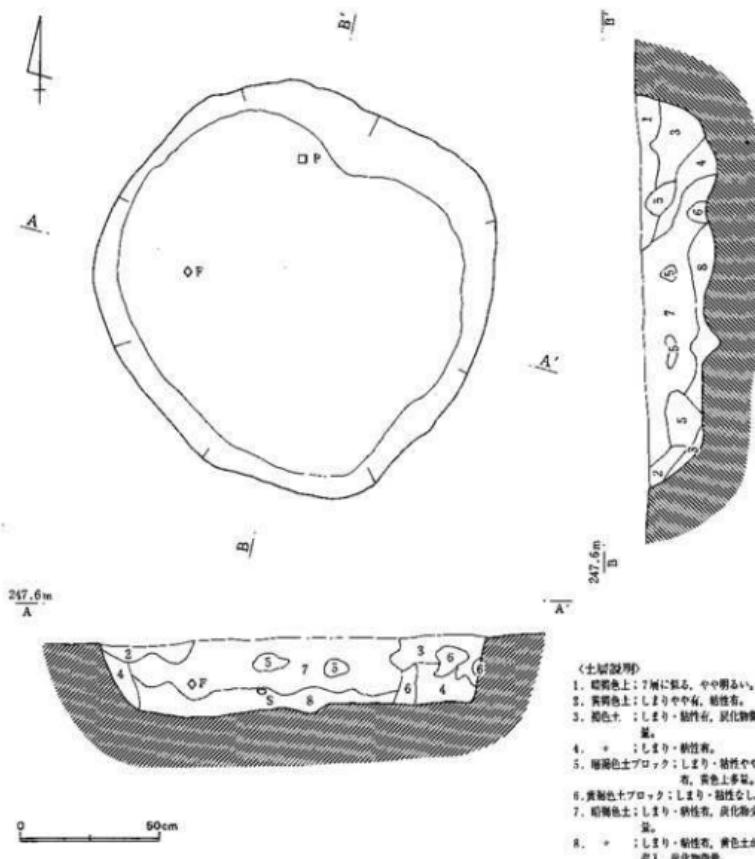
出土遺物は縄文時代前期後半の土器1点、サヌカイト製石鏃及び剝片が各1点、小礫が数点出土している。また鹿角片と考えられる白色骨片が1点出土している。

本SKは出土遺物からして縄文時代前期後半の可能性が強い。

(10) B9P1 (第17図、第37図)

B9グリッドの緩傾斜地の第III層中で検出した。周辺には比較的ピットが集中しており、また各時代の遺物、礫が纏まって出土している。当初B9P1とB9P2は別個のピットとして平面確認したもの、完掘状態では繋がったものとなっている。切り合ひ関係があったものか、本来同一遺構であったのかは不明のままである。ここでは一応個別の遺構として取り扱う。平面形は長楕円形を呈し、規模は0.95×0.6m、深さ12cmを測り、底面はほぼ平坦で皿状に立ち上がる。長軸方向はほぼ真北を指す。覆土は2層に分層でき第1層は暗褐色土、第2層は褐色土である。混入物等は認められない。尚、B9P2の深さ42cmを測る深いピットである。

遺物は泥質片岩製の块状耳飾りが1点出土している。他に棒状の石錐1点と小礫が数点含ま

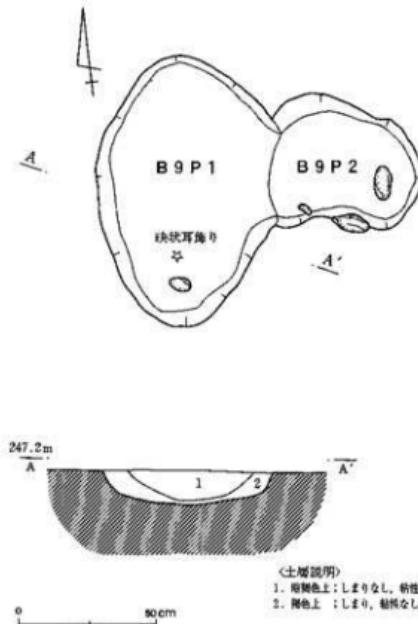


第16図 SK 11

れるのみで土器は出土していない。時期は判然としないものの、縄文時代前期の可能性が考えられる。

(11) C 9 P 1 (第18図、第37図)

C 9 グリッドの緩傾斜地の第Ⅲ層中で検出した。掘り方ではC 9 P 1と繋がっているが、切り合ひ関係にあったものかそれとも同一の遺構であったかは判然としていない。平面形は梢円形を呈し、 0.82×0.65 m、深さ26cmを測る。壁はなだらかに立ち上がり、覆土は3層に分層で



第17図 B9P1

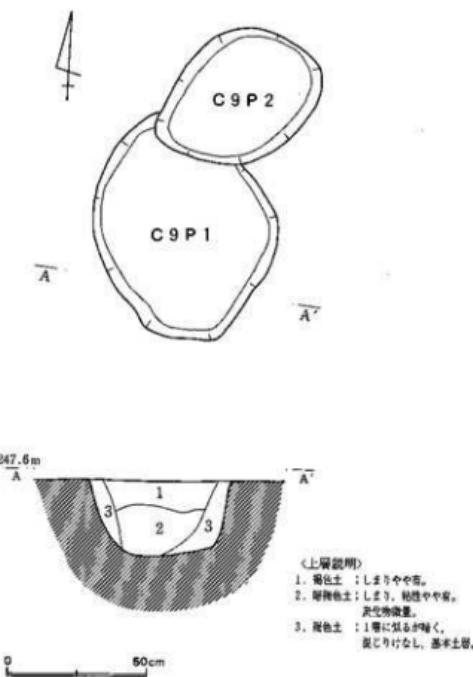
きるもの、第3層は基本土層の可能性が強い。第2層に僅かに炭化物が微量含むのみである。出土遺物は縄文時代前期に含まれる土器片が1点のみ出土したに留まる。

(12) G10P1 (第19図、第37図)

G9グリッドの水田耕作土除去後に検出した。S T 4の東側部分を切って構築されている。直径0.6mの円形のピットで、底面は皿状を呈し深さ10cmと浅い。覆土は2層に分層でき、第1層黒褐色土、第3層黄褐色土と共に混入物は認められない。第2層は根根乱と考えられる。出土遺物は縄文後期前半から中葉と考えられる土器片4点、小礫が出土している。縄文時代前半期のS T 4を切っているものの、本ピットも時期的にそれ程隔たりはなく、縄文時代後期前半から中葉に含まれるものと考えられる。

(13) S X 4 (第20図、第38図)

C・D-9グリッドにまたがり、縄類斜地の第III層中で検出した。1.2×0.7mの範囲内で遺



第18図 C9P1

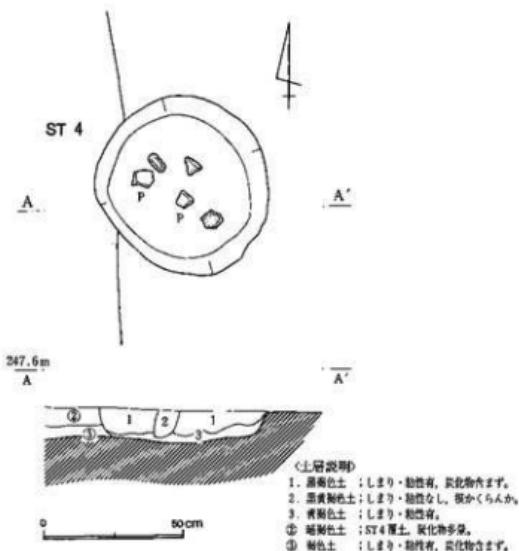
物の集中が認められた。下部には土坑等の付帯施設は持たず、平面的に遺物の集積が認められた。長軸方向はN-38°-Wである。

遺物総点数51点で内訳は縄35点、弥生土器12点、繩文土器3点、砥石1点である。中心部よりやや南寄りに長さ38cmの縦状の大型窪、その回りに10cm前後の中小窪が集中し、土器は北側部分に纏まり出土し、砥石は西南端で出土している。繩文土器は北東部に離れて出土しており、本来本遺構に伴うものではないと考えられる。

本SXの所属時期は出土遺物からして弥生時代中期の所産と考えられる。

(14) SX3 (第21図)

A・B-6・7グリッドを中心にして第Ⅲ層で確認した。調査区内での規模は9×3.5mで平面形はほぼ円形を呈するものと思われる。浅い溝が巡り、ピット数基がその回りを囲繞している。溝の規模は幅1~1.5mで南側及び北側部分は更に広がり、落ち込むように深くなる。西側部分は10~20cmと浅くなだらかに立ち上がる。南側は30~40cmと深い。溝の内径部分には大型の



第19図 G10P1

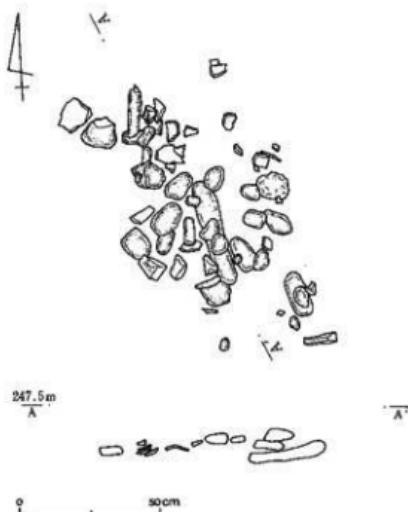
50点余りの円碟が貼り付くように出土している。溝の回りを囲繞するピットは径15~20cmの小型のものと、30~50cmの大型のものが見られ、小型のピットは溝際に穿たれているものが多い。しかし、ピットが本SXに付帯するものかどうかは不明である。

出土遺物は溝内からは縄文後期及び前期の土器が出土しているものの、纏まつたものは認められず。本造構に伴うかどうかは不明である。溝内側部分には弥生時代前期の壺片(第46図243)、および弥生時代後期から古墳時代と考えられる高坏(第46図252)が出土している。他に石錘が周辺から数点出土している。

本SXの性格・時期については特定不可能である。

(15) SK7 (第22図)

C8グリッドで第Ⅲ層中で検出した。平面形は長方形を呈し、規模は1.85×1.15m、深さ約50cmを測る。長軸方向はN-24°-Wである。底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は5層に分層でき第1~4層はレンズ状堆積を見せ、第4層に炭化物が微量認められるのみで、全体的に混入物は少ない。



第20図 SX 4

出土遺物は殆どなく、底面に炭化物と礫が4点出土したのみである。
本SKの所属時期は不明である。

(16) SK10 (第23図)

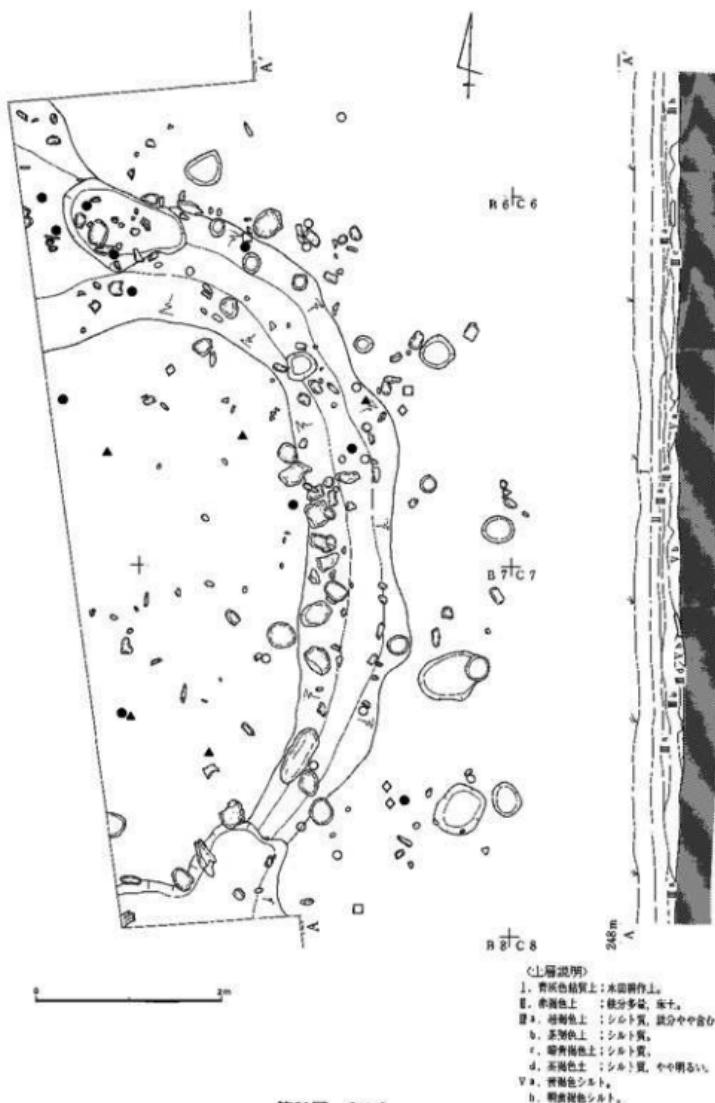
E 9グリッドの水田耕作土除去後に検出した。平面形は不整円形を呈し、規模は直径約1.5m、深さは12cmと浅い。底面はやや起伏を持ち、壁はやや傾斜を持って直線的に立ち上がる。覆土は4層に分層できるものの、主体は第2層の炭化物を微量含む褐色土と第4層の黄褐色土である。第1、3層はブラック層である。

出土遺物は礫以外に時期不明の土器細片1点のみである。礫は南側部分に片寄り、梢円形の径50cmの大型礫を中心中小礫が13点出土している。

本SKの所属時期等については不明である。

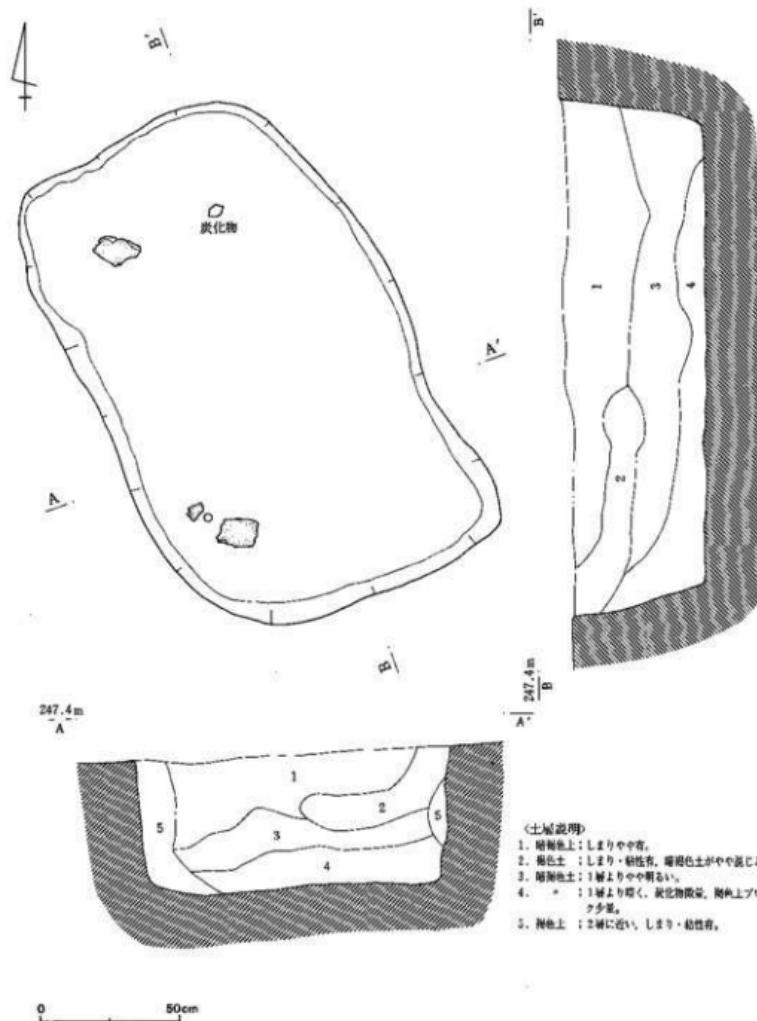
(17) SK12 (第24図)

G 9グリッドで水田耕作土除去後に検出した。SK11と隣接して所在する。平面形はほぼ円形を呈し、直径1.5m、深さ20cmを測る。底面はやや起伏があり、垂直気味に立ち上がる。規模等もSK11に近い形態である。覆土は6層に分層でき、主体は第1層の暗褐色土と第5層の

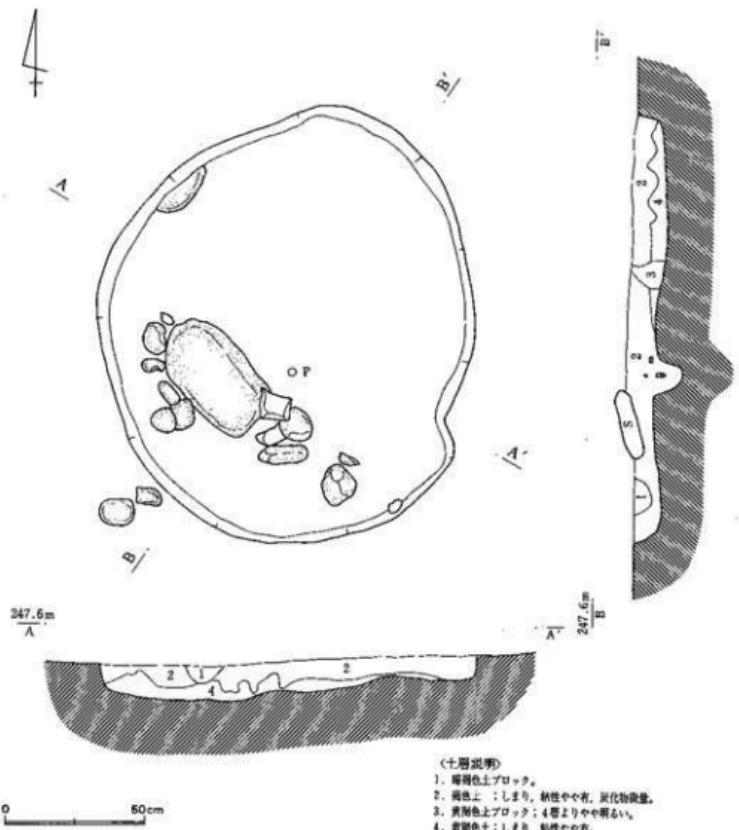


第21図 SX 3

- (上層説明)
1. 青緑色斜葉岩上：木田耕作土。
 2. 赤褐色上：根分多量、赤土。
 3. 灰褐色上：シルト質、試分やや含む。
 4. 灰褐色上：シルト質。
 5. 黄褐色上：シルト質、やや明るい。
 6. 赤褐色シルト。
 7. 明る褐色シルト。



第22図 SK 7



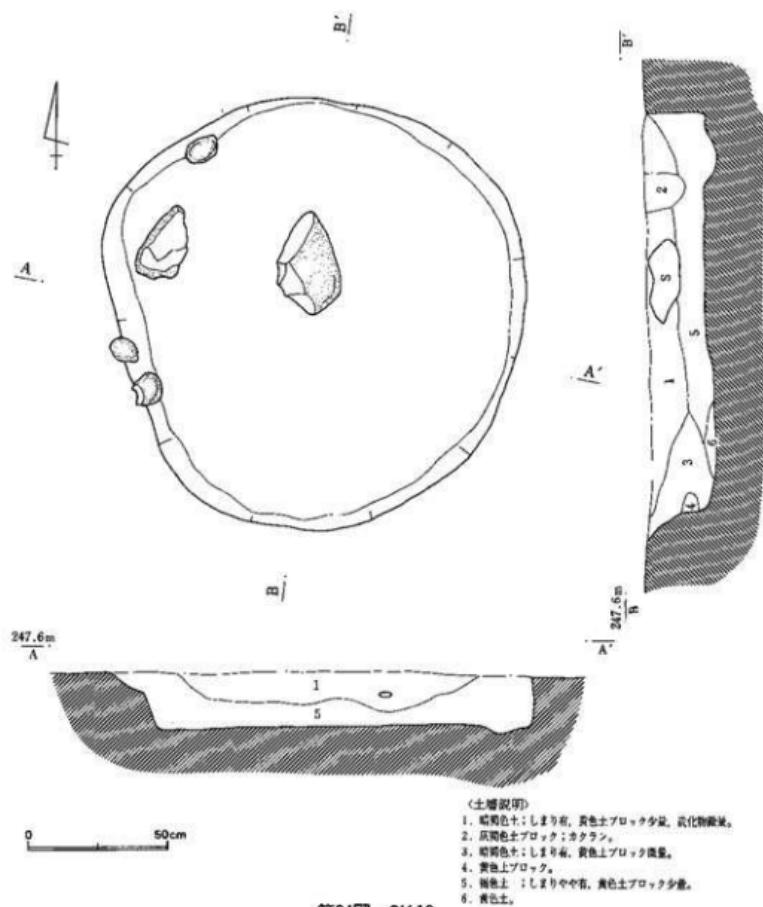
第23図 SK 10

褐色土である。全体的に黃色土ブロックを多く含んでいる。

出土遺物は復土上層で大型甕2点が出土しているだけで、時期判断ができる土器等は出土していない為、所属時期等については不明である。

(18) 近世の遺構（第25図）

近世のものと考えられる遺構は水田、溝（SD 2）、炉跡4基（FP 1-4）、近世墓2基（SG 1, 2）を検出しており、一括してそれぞれの概略を記す。



第24図 SK 12

1) 水田跡（第26図）

調査区の南西隅のB-D-8~9グリッドで現代の水田除去後に検出した。調査区内での現存長は南北約9m、東西約9.6mを測り、西側部分のS X 6を部分的に破壊している。自然地形が南北方向に急傾斜している為、盛土により水平にして水田を構築する。底面は基本土層第Ⅲ層で、南側で段状になる。

2) SD 2 (第27図)

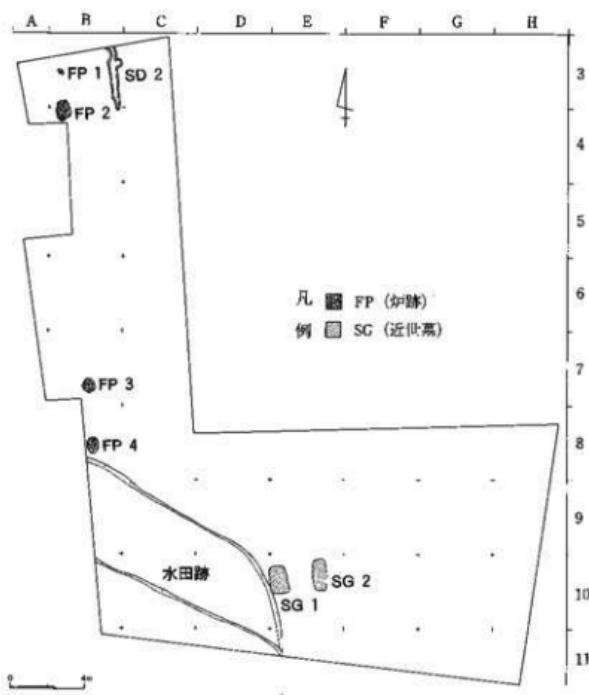
調査区北端のB 3 グリッドの現在の水田耕作土除去後に検出した。調査区内での長さは3.4m, 幅約0.4m, 深さ10~20cmを測り, 僅かに蛇行する。遺物は北壁の覆土中から陶器片が1点出土しただけである。また周辺でピットを数基検出しているものの、本SDに伴うものか、同時期のものであるかは不明である。

3) FP 1~4 (第28~30図)

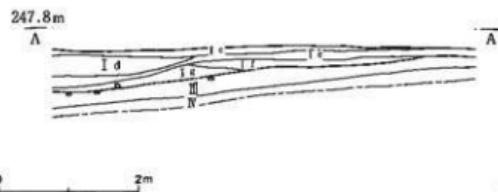
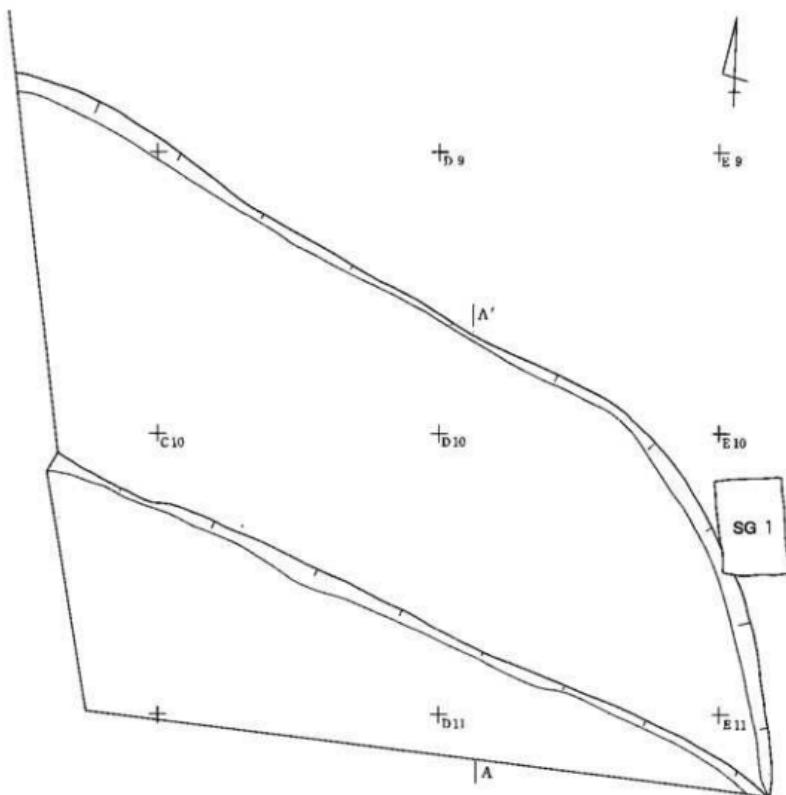
調査区の西側部分に片寄り、炉跡と考えられる遺構を検出した。掘り方を有し、灰、小炭化材を多量に含むものの、焼土は検出されなかった。FP 1は小型のもので、FP 2は長楕円形を呈し、長径1m弱、深さ約10cmを測る。FP 3はほぼ円形を呈し、径70cmを測り、緩やかに落ち込む。FP 4は楕円形を呈し、長径85cm、深さ5cmを測る。遺物は4基共に出土しておらず、構築時期は特定できないものの、現在水田除去後の基本土壙第Ⅲ層に掘り込まれており、中世以降の所産と考えられる。

4) SG 1, 2

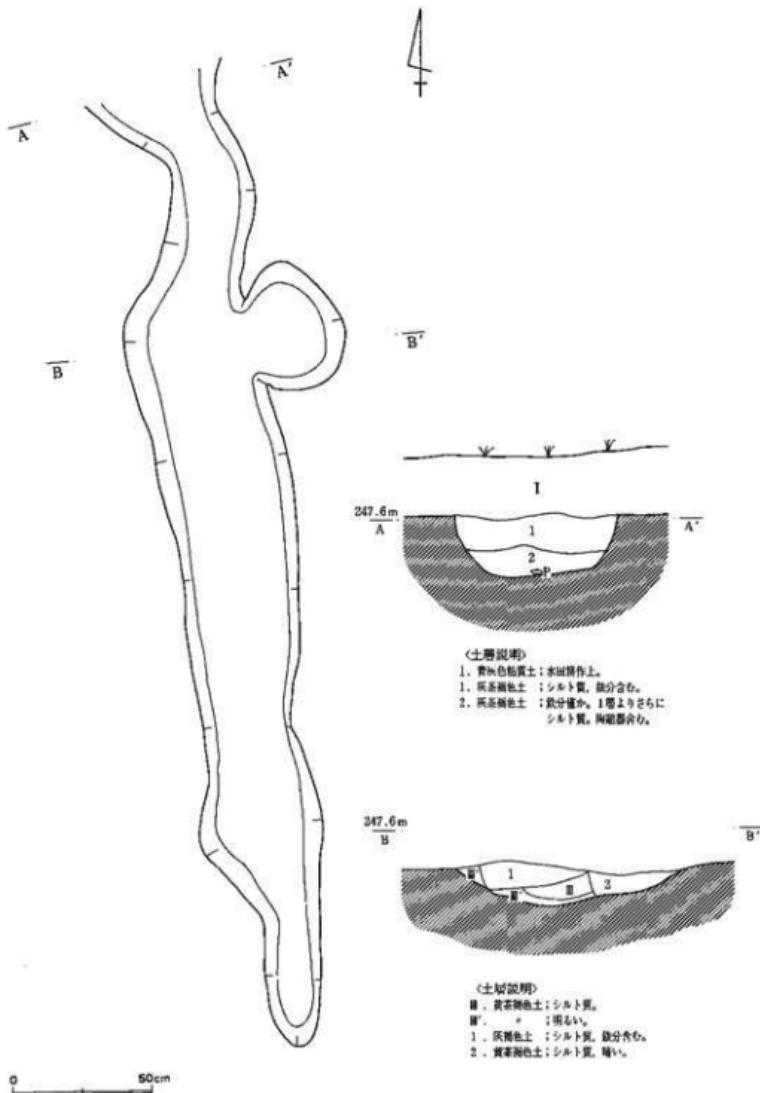
E 10グリッド内で近世墓と考えられる土坑を2基検出した。2基とも長方形を呈し、縦1.5m、横0.7~0.8m、深さ0.5mをほぼ測り、2基共に長軸がほぼ北向き、1.5m隔て並んでいる。SG 2はSX 5を切って構築されている。既に2基とも改葬されており、壁際に和釘が数点出土したのみである。



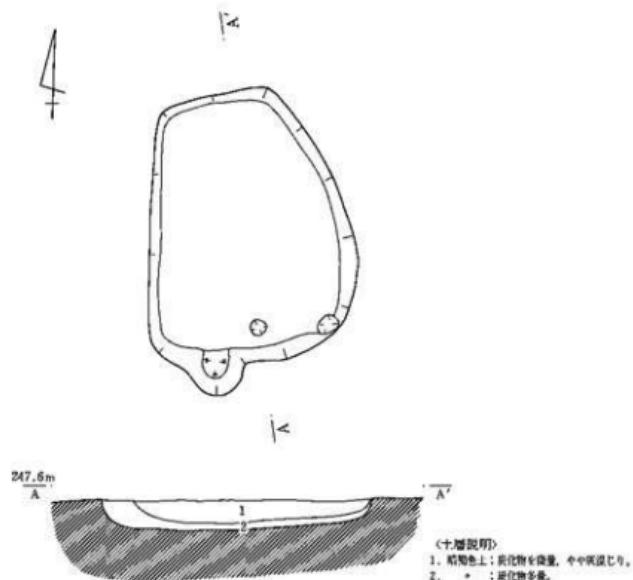
第25図 近世遺構全体配置図



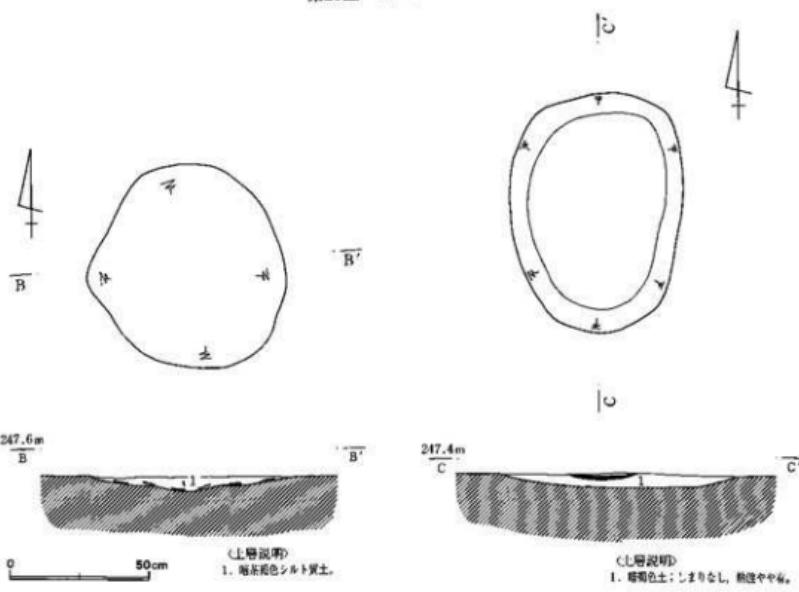
第26図 水田跡



第27図 SD 2



第28図 FP 2



第29図 FP 3

第30図 FP 4

第2節 遺構内出土遺物

(1) C 4 グリッド遺物集中地点 (第31図No. 1~8)

石器 (No. 1~8)

1~6の6点は石錐である。6以外は短軸側縁に抉入部を敲打により作出し、4, 5は短軸の一側縁のみに抉入部を作出している。6は長軸及び短軸にも僅かに敲打痕が認められる。長楕円形の扁平な自然礫で遺跡周辺域で採集できる緑色片岩、泥質片岩を素材としている。1は12.6gと軽量で、6は45.8gを計るやや重いもので、石錐I群B 3類に含まれる。他のものについては石錐I群B 2類である。

7, 8はチャート製の剥片である。7は平坦な打面を作出した後、剥離しており、外弯気味の直線的な一側縁に細かな剥離痕が認められ、スクレイパーと考えられる。8は上端を調整した後、打点の方向を僅かに変え剥離する。2次調整痕は認められない。

(2) S T 4 (第31図No. 9~18)

縄文土器 (No. 9~12)

9~11は磨消繩文に含まれるもので、9は曲線的な2本沈線による磨消繩文で鉢状に聞くものと思われる。縄文原体は細かく整ったR Lである。器面は丁寧な磨きを施す。10は口唇を僅かに肥厚させ上端に沈線を施らせ、口唇外にも沈線1条を施させる。器形は9と同様に鉢形のもので直立する。共にIV群C 1類に含まれ、西南四国の宿毛式に相当する。11は口唇を内側に拡張し、口唇上端及び外に沈線を1条施らせ、原体R Lの縄文を施す。口縁は波状を呈するものと思われる。IV群C 3類に含まれ、宿毛式に相当する。12は胴部破片で、地文はL Rの縄文で内面には僅かに指痕が見られ、縄文前期の可能性が強く、II群D 3類に含まれ、混入と考えられる。

石器 (No. 13~18)

13~16は全てサヌカイト製の石錐である。13, 14は刃縁部が直線的で刃角が鋭いものである。14は0.65gでやや大きなものの分類に含まれる。15は刃縁が短いものである。16は基部抉りが浅く、先端部が欠損する。

17, 18は共にサヌカイト製の剥片である。17は縦長で表面には數カ所の調整剥離が見られ、裏面上端に打点が見られる。2次調整痕等は認められない。18は薄い剥片で、表面に數カ所の調整剥離痕が見られるが、2次調整痕等は認められない。

(3) 土器捨て場 (第31~35図No. 19~50)

縄文土器 (No. 19~46)

19-22は縄文地に浮線を貼付するもので、19は浮線上に何も施さない素文のもの、20は浮線上に縄文を施すもの、21は浮線上を半截竹管状工具により押し引きを施し、口縁は内面に折り返し、外面と同様に縄文を施す。22は断面三角形の浮線上に連続爪形文を施すものである。23は縄文地に沈線を施したものである。これらは縄文時代前期後半に含まれるものと考えられ、19、20はⅡ群D 2類、21はⅡ群D 3類、22はⅡ群E 3類、23はⅡ群E 4類にそれぞれ含まれる。

24-46は全て縄文時代後期前半に含まれるものである。24はⅣ群C 1類に含まれ、鉢状の器形を呈し、2本沈線による磨消縄文である。25-29は深鉢で口唇を内側に拡張するもので、沈線を1条巡らせ短沈線の刻みを施す。25、26は更に縄文を施すものである。29は短沈線は施さず、沈線2条が巡るものである。頸部は無文帯を形成し、28は3本の沈線を頸部に垂下させる。口縁は波状を呈し、波頂部に耳状把手、瘤状の貼付を付加する。Ⅳ群D 1類に含まれる。30は口唇を拡張せず、僅かに内側に突出させるもので、口頸部は無文で、胴部との境に沈線を1条巡らせ、ややくびれる。胴部文様は2本沈線による逆「L」字状文である。Ⅳ群D 3類に含まれる。31は沈線文の胴部破片である。地文は条痕である。

32-35は精製の鉢で沈線により文様を描出するもので、32-34は太い沈線による笛状の文様で、器面は丁寧に仕上げる。35は起点を円形状に刺突したやや細い沈線により、入り組み文状の文様構成である。

36-39は精製の無文の浅鉢で、大きく開くものである。36は内面上部で段状に突出する。焼成前的小孔を有する。37は口頸部で屈曲し、口縁が反り気味に立ち上がる。内外面共に研磨する。38は口縁内面を僅かに肥厚させる。

40-42は無文の粗製深鉢である。40は口唇を内側に折り返し、器形はやや外反気味に立ち上がるものである。41は頸部が僅かにくびれ、口頸部は直立し、胴部はやや丸味を持ち、内外面共に条痕である。42は口唇を僅かに肥厚させ、刻みを施す。内外面共に条痕である。

43-46は底部破片である。43、44は高台状の底部で深鉢に伴うものと考えられる。45、46は浅鉢に伴うものと考えられ、内外面共に研磨され、大きく開き、底裏は僅かに高台状を呈するものである。

石器 (No.47-50)

47は尖頭状の石鎌と考えられるものである。長さ3.6cm、幅0.9cm、厚さ0.5cm、重さ1.25gを測り、全体的に弓反りし、基部は側縁から剥離を行った後、縱方向から更に剥離調整を行い茎を作出している。刃部は両側縁から交互に剥離調整を行い、刃縁を作出する。サヌカイト製である。

48は抉入石器で両端に抉入部を持つもので、上端がやや細くなる。抉入部は上端が浅く、下端がやや深い。抉入部の上下端の脚は共にやや開き気味で左右はほぼ対称的である。側縁部は右側縁が左側縁より強く内弯し、また刃角が鋭くなっている。右側縁は僅かに内弯し、刃角は鈍い。調整は大きく剥離調整を行い、両側縁及び抉入部共に細かい調整は認められない。また

肉眼では明確な使用剝離痕は認められない。長さ5.2cm、幅3.1cm、厚さ0.9cm、重さ11.66gを測る。やや小型のものである。石質はサヌカイトである。

49, 50は石錐である。共に長軸両端を敲打し抉入部を作出する。重さは49が36.3g, 50が42.2gで、共に結晶片岩製である。

(4) S X 5 (第36図No.51~57)

縄文土器 (No.51, 52)

51は胴部破片で2本沈線による磨消繩文で縄文原体はR Lである。IV群C 1類に含まれる。52も胴部破片で直線の沈線を横位に施し、地文は条痕である。IV群D 4類に含まれる。

石器 (No.53~57)

53はチャート製の石鏃である。先端部及び右脚部は欠損する。残存長は2.3cm、残存幅1.3cm、厚さ0.4cmを測る。刃縁は内弯し、基部抉りは深い。石鏃II類に含まれる。

54は乳棒状の石斧で、刃部が大きく欠損する。全体的に丸味を持ち、基部にかけてすぼまり、先端は尖る。基部に敲打痕が顕著に認められ、先端部にも敲打痕がある。また刃部方向には磨きが認められ、擦痕が観察できる。残存長は10.9cmを測り、石質は砂岩と考えられる。

55~57は石錐で、梢円形の扁平な自然縫の長軸両端を敲打し抉入部を作出する。重さは55が14.1g, 56が49.7g, 57が37gである。石質は泥質片岩のものが55, 56、結晶片岩のものが57である。

(5) S X 6 (第36図No.58~71)

縄文土器 (No.58~60)

58は胴部破片で粗いrの撚糸の地文に「C」字状の爪形と円形刺突を施す。頸部分で屈曲しており、キャリバー形を呈する。III群A 2類に含まれる。59は口縁部をやや肥厚させ、波状の幅の広い沈線を施し、また胴部も沈線文である。IV群A 2類に含まれる。60は磨消繩文系の山形突起部分である。口唇部にも原体R Lの縄文を施す。IV群C 3類に含まれる。

石器 (No.61~71)

61は磨製石斧と考えられ、長さ7.8cm、幅4.6cm、厚さ1.0cmを測る扁平な石斧である。全体を研磨し、表面は僅かに丸味を持ち裏面は平らで、刃部を更に研ぎ出している。両側縁も表裏面から研磨し、やや鋸角である。刃部は敲打により欠損し、抉れる。両側縁部にも部分的に欠損が認められる。石質は乳白色で流紋岩か。

62から70は石錐である。62のみ短軸側縁部に抉入部を作出しているものの、下端の抉入部は側縁の中央部からずれている。重さは57gでやや重いものである。63から70は全て長軸先端部に抉入部を有するもので、その中で63が円形に近いもので重さ43.3gを測る。64~67の4点は扁平な梢円形で重さ30~60gの範囲内に納まる中型のものである。68~70の3点は長梢円形の

もので68は部分的に破損しているものの中型品で、69は60gを超す重さのもので大型の分類に含まれる。70は一端部が欠損しているものの、大型の分類に含まれよう。石質は泥質片岩製3点、緑色片岩4点、結晶片岩2点である。

71は磨石である。三角形に近い形状で、長さ10.4cm、幅5.4cm、厚さ2.4cmを測る。表面中央部はやや滑む。全体的に磨きが見られ、表面に擦痕が認められる。側縁、先端部には敲打痕等は認められない。石質は凝灰岩か。

(6) SK 6 (第37図No.72)

石器 (No.72)

72は緑色をしたチャート製のスクレイバーである。表裏面共に主要剥離面を残し、両側縁に僅かに使用剥離痕が認められる。

(7) SK 8 (第37図No.73~75)

縄文土器 (No.73)

73は鉢の口頸部で凹線状の沈線数条が巡る。くびれ部には刻みを施す。IV群F 2類に含まれる。

石器 (No.74, 75)

74, 75共にサヌカイト製の石鎚である。74の刃縁部は反り気味で、刃角はやや鋭い。右脚部は欠損し、左脚部も僅かに欠損する。石鎚I群D類に含まれる。75は大型の石鎚で、刃縁が中央部でくびれ、刃縁の剝離調整は丁寧で、先端部刃角も鋭い。脚は長く、基部抉りも深い。左脚は先端部が欠損する。石鎚II群に含まれる。

(8) SK 9 (第37図No.76~84)

縄文土器 (No.76, 77)

76は地文がR Lの縄文の脇部破片である。内面には指頭圧痕が見られる。II群D 3類に含まれる。77は沈線文の脇部破片である。幅の広い並行沈線を施している。IV群D 4類に含まれる。

石器 (No.78~84)

78から83の6点は全てサヌカイト製の石鎚である。形態に変化が多く、78~80のような小型のもの、81の平基で大型のもの、82, 83のように変形鎚と考えられるものも含まれている。78は三角形に近く刃縁はやや外湾気味で刃角は鈍く、基部抉りも浅い。81は重さ1.8gを計る大型のものである。

84は黒曜石の剥片である。綾長で断面三角形を呈する。主要剥離面のみで、2次調整痕、使用痕等は見られない。

(9) S K11 (第37図No.85, 86)

縄文土器 (No.85)

85は浮線を貼付した胴部破片である。断面カマボコ形の素文の浮線と縄文を施し潰れた浮線の2条を貼付している。内面には爪形状に連続の指頭圧痕が見られる。II群D1類に含まれる。

石器 (No.86)

86はサヌカイト製の石鎌である。刃縁が直線的で基部抉りは浅い。左舞部の先端部が欠損する。石鎌I群C類に含まれる。

(10) B 9 P 1 (第37図No.87, 88)

石器 (No.87)

87は棒状に細長い石錐である。長さ11.4cm, 幅2.45cm, 重さ75.9gを測る。長軸両端を打ち欠き抉入部を作出する。抉入部は摩耗している。石質は緑色片岩である。

石製品 (No.88)

88は块状耳飾りである。半分に欠損しており、下端に抉入部分が僅かに残っている。法量は推定で外径3.5cm, 厚さ0.5cmを測る。裏面は平坦で表面はやや丸味を持っている。内径縁部は裏面から研磨しており、特に裏面からの研磨が強く、尖っている。外径縁部は丸味を持っている。石質は銀白色の泥質片岩である。

(11) C 9 P 1 (第37図No.89)

縄文土器 (No.89)

89は胴部破片である。地文は原体L Rの節の整った縄文である。器内は薄く堅緻である。II群D3類に含まれる。

(12) G10P 1 (第37図No.90)

縄文土器 (No.90)

90は口縁部破片で、丸味を持った口唇の外面は無文であるが、口縁には沈線区画による蒂縄文を施し、原体はL Rで節の整った細かい縄文である。IV群E2類に含まれる。

(13) S X 4 (第38図No.91~96)

縄文土器 (No.91)

91は本遺構に混入したと考えられる縄文土器の浅鉢である。口縁は長くやや外反気味に立ち上がり、胴部との屈曲部では突帶となる。V群に含まれる。

弥生土器 (No.92~95)

92は台付鉢で高さ10.7cm, 鉢部口径10cm, 台部底径5.9cmを測る。鉢部は直線的に大きく開

いて立ち上がり、口唇は丸味を持つ。台部との境部分ではほまり、台部裾はやや丸味を持ち短く開く。底部端は面取り状に平坦である。外面の整形はヘラ磨き、内面は鉢部、台部共にナデである。

93は鉢である。胴部は直線的に立ち上がった後に頸部が僅かにくびれ。口縁がやや外反気味に開く。整形は外面口縁は横ナデ、胴部は縱ヘラケズリ、内面口縁が横ナデ、胴部が縱ナデである。

94は甕である。胴部は丸味を持ち頸部はややくびれ外反する。胴部は凹線状のヘラ搔沈線4条とその下に木口による刺突を連続的に加える。整形は内外面共にナデである。95も甕で、頸部はくびれ、強く外反する。口唇外は貼付により、口唇は尖る。整形は外面が胴部に僅かにヘラケズリが見られ、ナデ消す。内面はナデである。

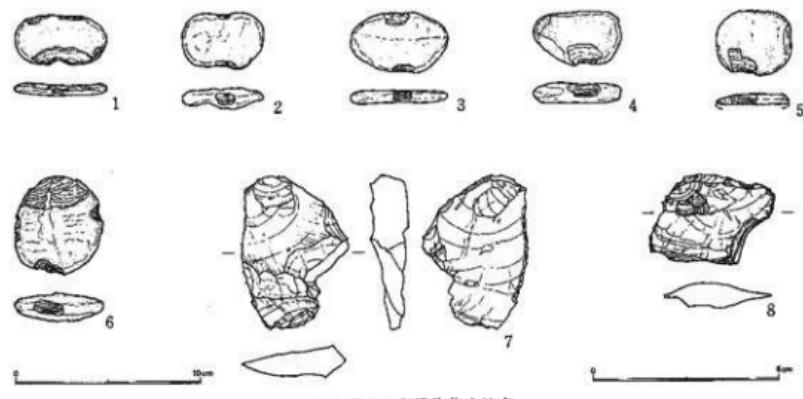
石器 (No.96)

96は砥石である。上端、裏面は欠損し、左側辺も僅かに残存するのみである。表面はほぼ平坦であるが、中央部がなだらかに窪み、全体に細かい擦痕が認められる。右側辺はほぼ平坦で表面と同様に細かい擦痕が認められる。石質は凝灰岩と考えられ、仕上げ砥石であろう。

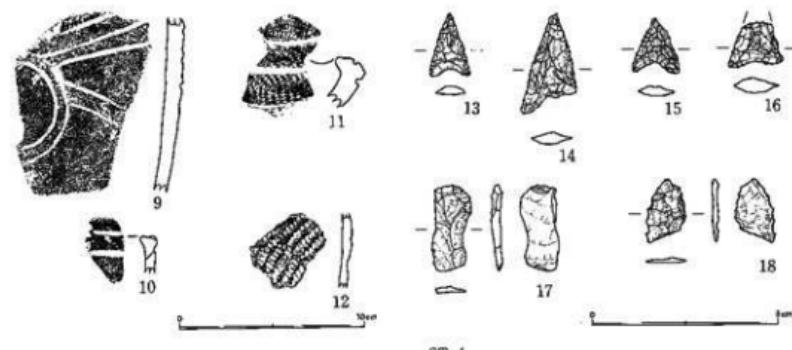
(14) S D 2 (第38図No.97)

陶器 (No.97)

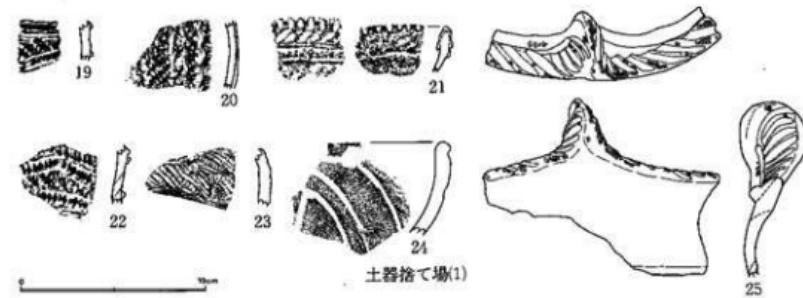
97は貧乏能利の頸部破片で外面に暗赤褐色の鉄釉がかかる。18世紀後半のものか。



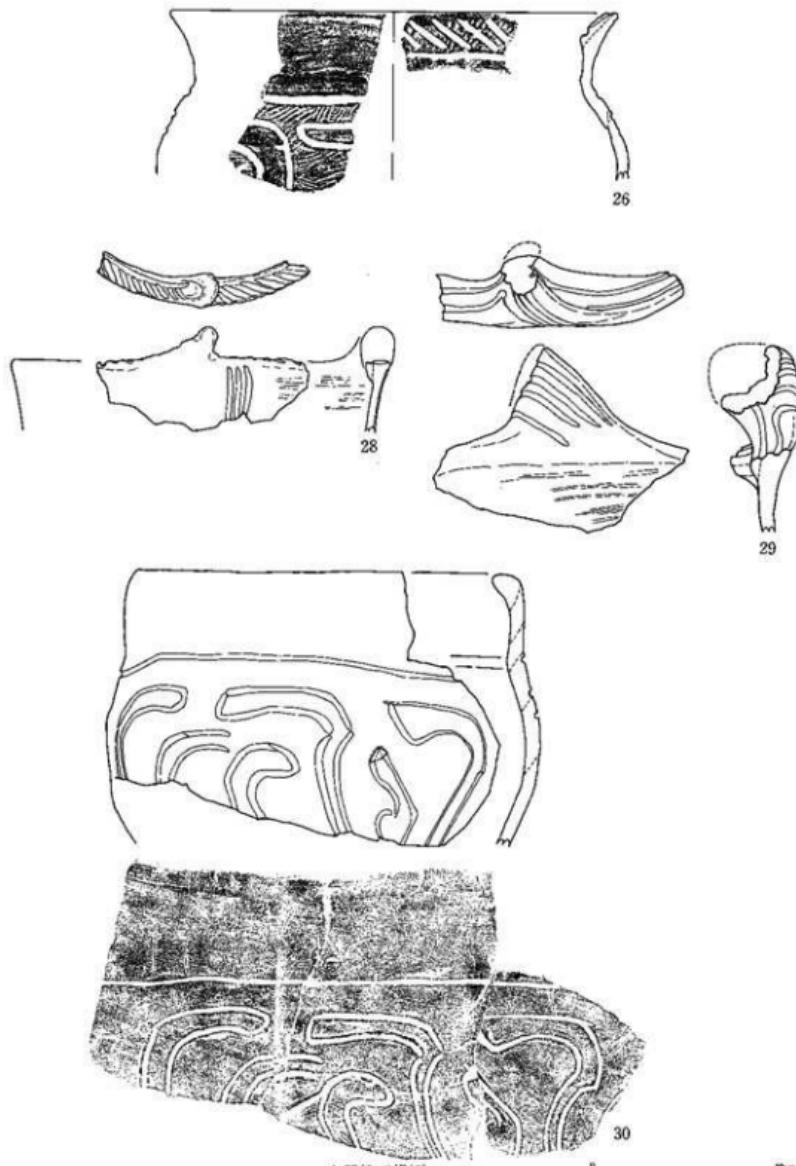
C 4 グリッド遺物集中地点



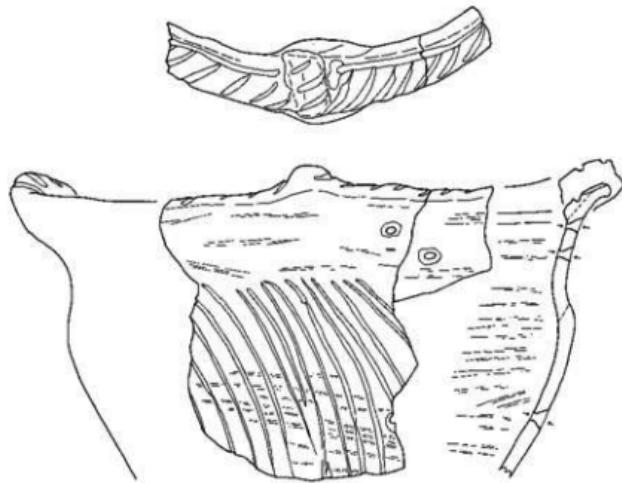
ST 4



第31図 遺構内出土遺物(1)



第32図 遺構内出土遺物(2)

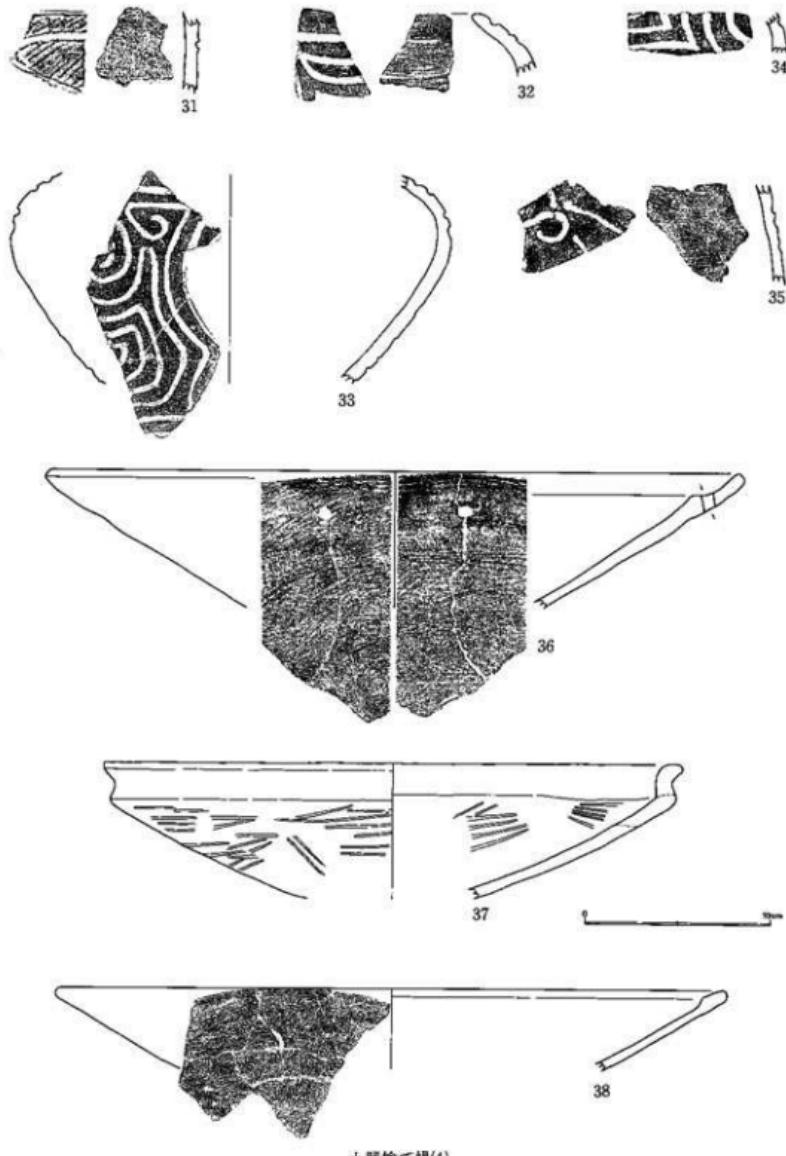


27

土器捨て場(3)

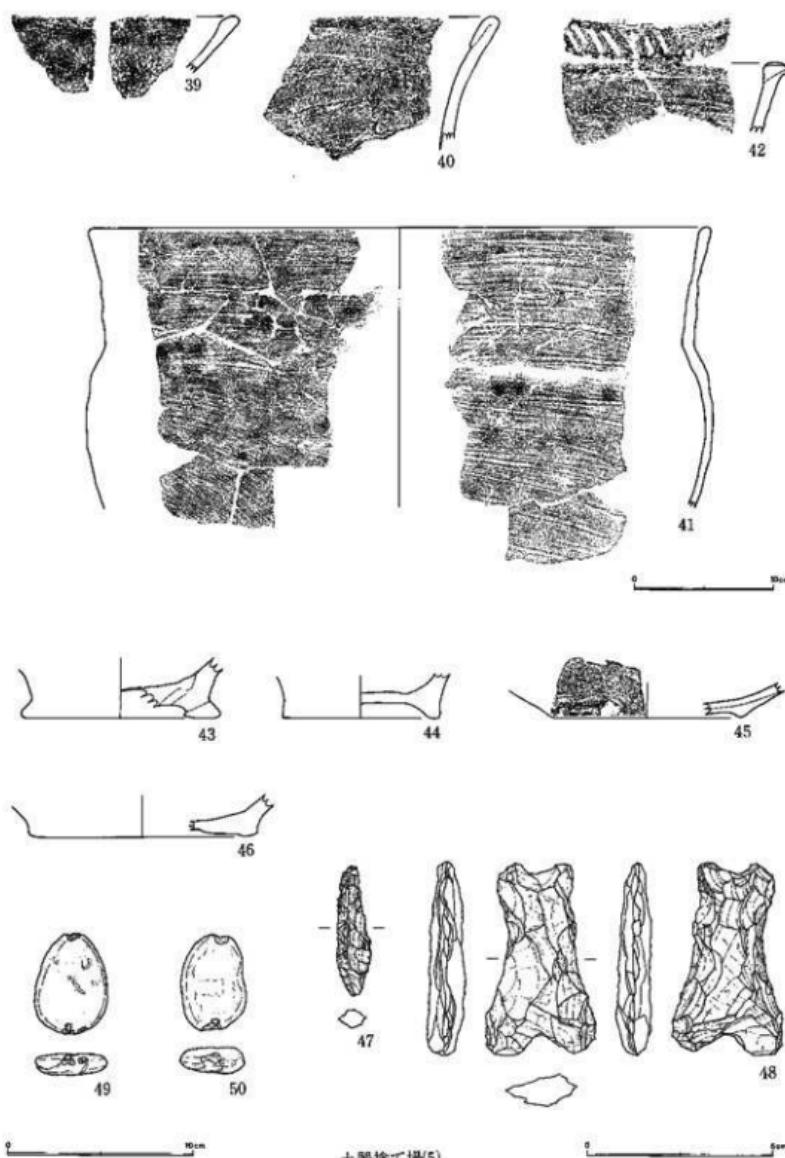
第33図 遺構内出土遺物(3)



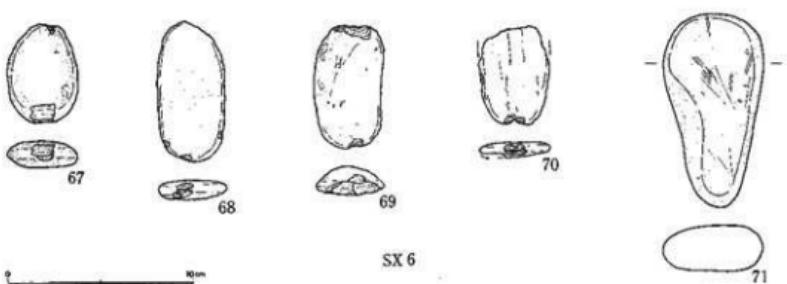
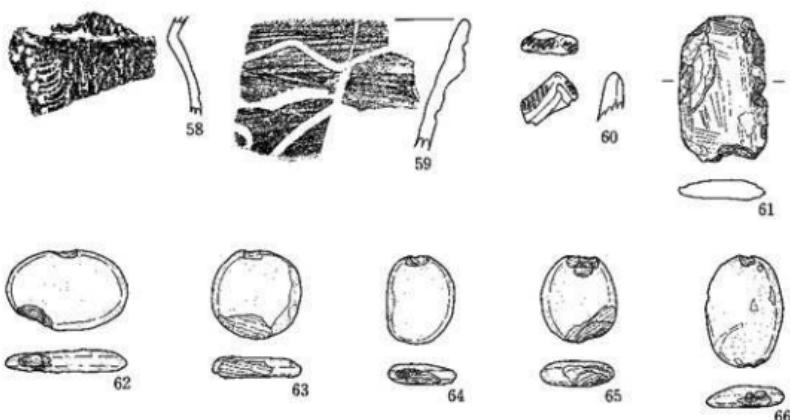
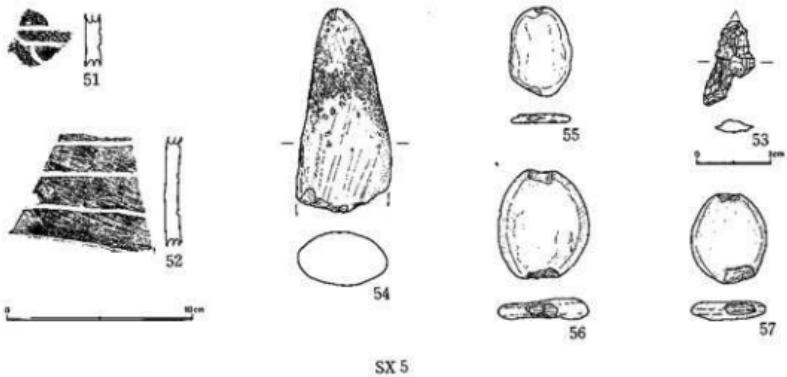


土器捨て場(4)

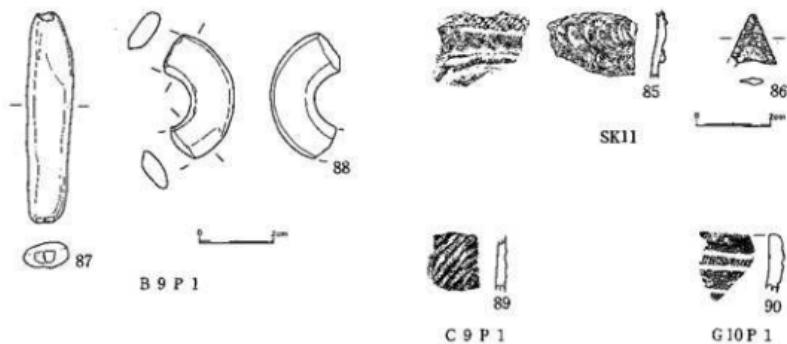
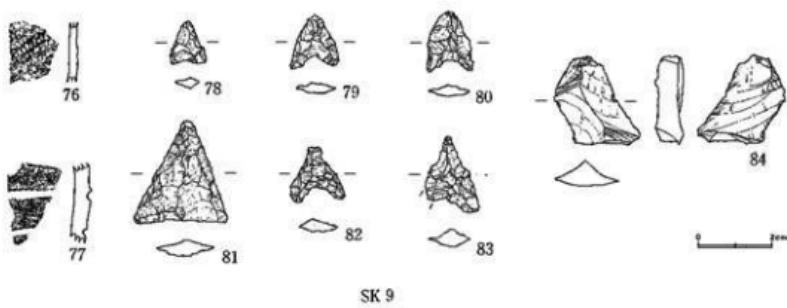
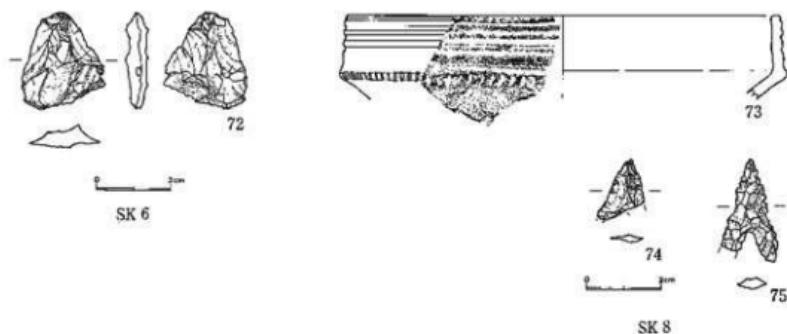
第34図 遺構内出土遺物(4)



第35図 遺構内出土遺物(5)



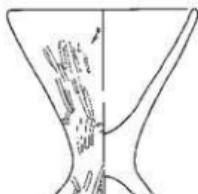
第36図 遺構内出土遺物(6)



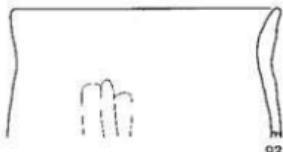
第37図 遺構内出土遺物(7)



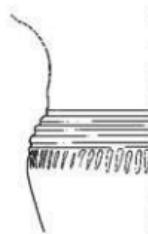
91



92



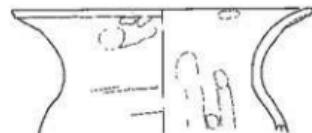
93



94



94



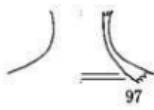
95



96

SX 4

mm



97

mm

SD 2

第38図 遺構内出土遺物8)

第1表 造構内出土土器觀察表1 (No. 9~34)
※法量のかっこ内数値は復元・残存長

| 遺物 番号 | 造構名一 様上番号 | 器種 | II件 器高 屏延 底径 底径 (mm) | 分類 | 胎土・色調 | 特徵 | | | |
|----------|--------------------|----|-------------------------------------|--------|---------------------------------|----------------------|--|--|-------|
| | | | | | | 開文 原体 | 器形調整 | 文様他 | |
| 9 | S T 4-16 | 鉢 | | IV C 1 | 角閃石・砂粒多量。 内外面暗褐色。 | R L | 内外面磨き | 2本沈線による唇沿縞文。 | |
| 10 | S T 4 | 鉢 | | IV C 1 | 焼造。内外面暗褐色。 | R L | | 口唇を肥厚させ、瓶及び上 端と外側に沈線。 | |
| 11 | S T 4-7 | 深鉢 | | IV C 3 | 2~3 mmの砂粒多量。 内外面暗褐色。 | R L | 内面ナデ | 浮遊土口線を呈し、口唇を内側 に肥厚させ、瓶及び側面を 施す。側部も沈線による区画 文、区画内に縞文。 | |
| 12 | S T 4 | 深鉢 | | II D 3 | 石英・チャート微量。 外側暗褐色、内側黄 褐色。 | L R | 内面ナデ、 側面に招潮 爪形。 | 地文は鉢の巻った縞文。 | |
| 19 | 土器物て場 | 深鉢 | | II D 2 | 長石少量。内外面褐色。 | R L | 内面招潮爪 形 | 浮遊塵を沈線で押さえ、浮線 間に毛の巻った縞文。 | |
| 20 | 土器物て場 | 深鉢 | | II D 2 | 長石、石英少々。内 外側暗褐色。 | L R | 内面ナデ | 浮遊文に縞文、地文にもやや 大きい縞文。 | |
| 21 | 土器物て場 | 深鉢 | | II D 3 | 長石、石英少量。内 外側褐色。 | L R | 外面ナデ | II種類に浮遊文付し、半載行 管状工具による押し引き。ま た口縁外にも縞文。内面を折 り返し肥厚させ縞文を施す。 口唇に削み。 | |
| 22 | 土器物て場 -13 | 深鉢 | | II E 3 | 石英微量。外側暗褐色。 内側明褐色。 | R L | 内面ナデ | 新面三角形の浮遊に連続爪形 文。 | |
| 23 | 土器物て場 -16 | 深鉢 | | II E 4 | 石英微量。外側暗褐色。 内側黑色。 | R L | 内面ナデ | 沈線による区画、区画内に筋 の巻った縞文。 | |
| 24 | 土器物て場 | 深鉢 | | IV C 1 | 角閃石・チャート・ 砂粒微量。内外面暗 褐色。 | L R | 内外面ナデ | 2本沈線による唇沿縞文。 | 沈線内赤彩 |
| 25 | 土器物て場 -66 | 深鉢 | | IV D 1 | 石英・砂粒少量。外 側暗褐色。内面褐色。 | R L | 内外面ナデ | 浮遊無文帯を形成し、口器を 前面に肥厚させ、瓶底の刷 み、縞文、沈線1条を施す。 大振りの耳状突起を付す。 | |
| 26 | 土器物て場 -45 | 深鉢 | 13件(24.0) | IV D 1 | 砂粒多量。内外面褐色。 | 吸流 文 | 外面ナデ、 内面赤彩 | 浮遊無文帯を形成し、刷毛と の間に沈線により区画する。 刷毛は2本沈線による唇沿縞文。 II唇を内側に施張させ、 3の短沈線の刷み、沈線1条を施らせる。 小振りな耳状突起を付す。 | |
| 27 | 土器物て場 -38-42-47 | 深鉢 | 13件(32.8) | IV D 1 | 石英・チャート・長 石少量。内外面暗褐色。 | | 内外面赤彩 | 浮遊無文帯を形成し、刷毛は 弧形法の多角の浮線。II唇 は内面に折返させ、瓶底の刷 み、沈線1条を施らせる。大振り の耳状突起を付す。 | |
| 28 | 土器物て場 -46 | 深鉢 | | IV D 1 | 石英・砂粒少々。内 外側暗褐色。 | | 内面赤彩 | 浮遊無文帯を形成させ、3本 沈線を垂下させる。II唇を肥 厚させ、短沈線の刷み、沈線 1条を施らせる。大振りな耳 状突起を付す。 | |
| 29 | 土器物て場 -39 | 深鉢 | | IV D 1 | 砂粒少量。外側暗褐色。 内面褐色。 | 外腹赤彩、 内面ナデ | 浮遊無文帯を形成し、 内面に肥厚させ、沈線2条を 施らせる。大振りな耳状突起 を付す。 | | |
| 30 | 土器物て場 | 深鉢 | 口径(26.0) | IV D 3 | 焼造。内外面褐色。 | 外腹ナデ、 内面ナデ、 赤彩 | 瓶底が僅かにくびれ、直立す る。瓶底には沈線を1条施ら せ、側部は2本沈線による曲 線的な泡「L」字状文。 | | |
| 31 | 土器物て場 | 深鉢 | | IV D 4 | 角閃石・長石・石英 多量。外側褐色。内 側暗褐色。 | | 内外面赤彩 | 赤腹地に沈線による区画文。 沈線脇のドテはそのまま。 | |
| 32 | 土器物て場 | 鉢 | | IV A | 角閃石・石英・石英 微量。外側褐色。内 側暗褐色。 | | 内外面磨き | 太い沈線による常状文様。 | 沈線内赤彩 |
| 33 | 土器物て場 | 鉢 | | IV A | 堆塑。外側褐色。内 側暗褐色。 | | 内外面磨き | 太い沈線による常状文様。 | 沈線内赤彩 |
| 34 | 土器物て場 -43 | 鉢 | | IV A | 雪片・角閃石微量。 内外面暗褐色。 | | 内外面磨き | 太い沈線による常状文様。 | 沈線内赤彩 |

第2表 遺構内出土器觀察表2 (No.35~90)

| 遺物 番号 | 遺物名一 括上番号 | 器 種 | 口徑 法量 (cm) | 口 部 特 徴 高 低 深 底 弧 | 分類 | 胎土・色 調 | 器 形 | | | 備 考 |
|----------|-----------------|----------|---------------------|---|---------------------------------------|-----------|-------------------|--|--|--------|
| | | | | | | | 軽文 原体 | 器面調査 | 文 様 他 | |
| 35 | 土器捨て場 | 浅鉢 | | N B | 角閃石・チャート・ 石英・長石微量。外 面青褐色。内面灰褐色。 | | 内外面ナゲ | | 沈殿による入り混み文。沈殿 の熱点を円形に押す。 | |
| 36 | 上器捨て場 | 浅鉢 | 口径 (37) | R A | 角閃石・チャート・ 石英・泥質片多量。 内外面暗赤褐色。 | | 内外面赤褐色 | | 内面に段を設け、大きく述べ。 地盤の円孔 | |
| 37 | 上器捨て場 -60 | 浅鉢 | 口径31.2, 器高 (7.3) | IV D | 角閃石・泥質片 微量。内外面暗褐色。 | | 内外面赤褐色 | | 口縁がくびれて立ち上がる。 内外面共に丁寧な崩き。 | |
| 38 | 土器捨て場 -5 | 浅鉢 | 口径 (48.6) | N B | 石英・長石・砂粒多 量。内外面暗褐色。 | | 内外面崩き | | 直線的に大きく開き、口縁内 を肥厚させる。 | |
| 39 | 土器捨て場 -65 | 浅鉢 | | R C | 角閃石・石英・長石 少量。内外面暗褐色。 | | 内外面ナゲ | | 直線的に開き、口内がやや 肥厚する。 | |
| 40 | 土器捨て場 | 板製 深鉢 | | R A | 角閃石多量。外青 褐色。内面暗褐色。 | | 内外面ナゲ | | 外反気味に立ち上がり、口唇 を内側に折り返す。 | |
| 41 | 上器捨て場 -18-23 | 板製 深鉢 | 口径 (25) | N A | 角閃石・砂粒多量。 内外面暗褐色。 | | 内外面赤褐色 | | 底部は僅かに丸味を持ち、頂 部で僅かにくびれ、口縁は直 線とする。 | |
| 42 | 土器捨て場 | 深鉢 | | IV D I | 石英多量。外面暗褐色。 内面暗褐色。 | | 内外面赤褐色 | | 口縫は直立気味に立ち上がり、 口唇を僅かに肥厚させ。短辯 縦を部分的に施す。 | |
| 43 | 上器捨て場 -2 | 深鉢 底部 | 底径 (10.7) | IV B | 石英・泥質片甚・砂 粒多量。内外面暗褐色。 | | 内外面ナゲ | | 高台状の底部破片。 | |
| 44 | 上器捨て場 -26 | 深鉢 底部 | 底径 (8.4) | IV B | 角閃石・砂粒多量。 外曲赤褐色。内面暗褐色。 | | 内外面ナゲ | | 高台状の底部破片。 | |
| 45 | 土器捨て場 | 浅鉢 底部 | 底径 (10) | IV C | 砂粒少量。内外面暗褐色。 | | 内外面崩き | | 高台状の底端破片で体部は大 きく開く。 | |
| 46 | 土器捨て場 | 浅鉢 底部 | 底径 (11) | R C | 石英・長石多量。内 外面暗褐色。 | | 内外面崩き | | 低い高台状の底端破片。 | |
| 51 | S X 5-2 | 深鉢 | | IV C 1 | 角閃石・砂粒微量。 内外面暗褐色。 | R L | 内外面ナゲ | 2本沈縫による垂直縞文。 | | |
| 52 | S X 5 | 深鉢 | | R D 4 | 角閃石・石英少量。 内外面暗褐色。 | | 外面赤褐色。 内面ナゲ | 横段の沈縫紋。 | | |
| 58 | S X 6 | 深鉢 | | IV A 2 | 石英・砂粒多量。内 外面暗褐色。 | R | 内面ナゲ | キャラリバ・形を呈し、腹部の 施文は模様いの熱帯及び「C」 字状の爪彫文。円形刻文を施す。 | | |
| 59 | S X 6 | 深鉢 | | V A 2 | 石英・長石・砂粒多 量。内外面暗褐色。 | | 内外面ナゲ | 口縁を肥厚させ。山形の沈縫 文。網目は沈縫文。 | | |
| 60 | S X 6 | 深鉢 | | IV C 3 | 石英・チャート少量。 外曲褐色。内面暗褐色。 | R L | 内外面ナゲ | 山形の縫合口唇に模様。口縁 は肥厚文。 | | |
| 73 | S K 8 | 鉢 | | IV P 2 | 石英・チャート微量。 外曲褐色。内面暗褐色。 | | 外表面ナゲ。 内面ナゲ・崩き | 口縫部に凹線、くびれ縫をや や突出させ。崩きを施す。 | | |
| 76 | S K 9 | 深鉢 | | IV D 3 | 雲母・長石・チャー ト微量。内外面暗褐色。 | R L | 内面指痕压 痕 | 器の堅った模様。 | | |
| 77 | S K 9 | 深鉢 | | IV D 4 | 雲母・長石・石英微量。 外曲褐色。内面暗褐色。 | | 内面ナゲ | 直線的な模様。 | | |
| 85 | S K 11 | 深鉢 | | ED 1 | 長石微量。内外面暗 褐色。 | R L | 内面指痕压 痕 | 断面カマボコ形の筆文の沿縫 を付し、輪郭を沈縫で押さえ る。また施した浮款に筋の太 い縞文を施す。表面は底端文 様に沿縫に指痕圧痕。 | | |
| 89 | C 9 P 1 | 深鉢 | | II D 3 | 雲母・長石微量。内 外面暗褐色。 | L R | 内面ナゲ | 器の堅った模様。 | | |
| 90 | G 10 P 1 | 深鉢 | | IV E 2 | 砂粒微量。外曲褐色。 内面暗褐色。 | L R | 内面ナゲ | 2本沈縫による垂直縞文。 | | |

第3表 遺構内出土土器観察表3 (No.91~97)

| 遺物 番号 | 遺構名— 採土番号 | 器種 | 法 長 (cm) | 口 径 (cm) | 分類 | 粘土・色調 | 特 徴 | | | 備 考 |
|----------|--------------------|------|-------------------------------|----------------|-------|-------------------------------------|-------------------------|------|---|--------|
| | | | | | | | 碑文 原体 | 器面調整 | 文様等 | |
| 91 | S X 4-43 | 浅杯 | | | V B 5 | 石英・砂粒少量。内 外同赤褐色。 | 内外面ナゲ | | 口縁がやや外反気味に立ち上 り、底部は突出となる。 | |
| 92 | S X 4- 39-42-51 | 台付鉢 | 11坪10.0, 砂高10.7, 底径 5.9 | 管 | | 石英・チャート・砂 粒少量。内外同赤褐色。 | 外面磨き, 内面ナゲ | | 外部は直線的に大きく開き、 台付との堆すばりあり、台部 端は弧形開く。 | |
| 93 | S X 4- 8-12 | 鉢 | 口径 (14.2) | 管 | | 1~2mmの砂粒少量。 内外同赤褐色。 | 外面ハラ ズリ。内面 ナゲ | | 全体は直線的に立ち上がり、 頭部が僅かにくびれ。口縁が やや外反する。 | |
| 94 | S X 4- 39-40-41 | 甕 | | 管 | | 2~3mmの砂粒多量。 内外同赤褐色。 | 内外面ナゲ | | 腹部に円錐状沈捺4箇とその 下に木口による遮蔽跡。 | |
| 95 | S X 4-41 | 甕 | 口径 (16.2) | 管 | | 2~3mmの砂粒・チ ャット少量。外青 褐色。内面赤褐色。 | 外面ナゲ, ハラケズリ, 内面ナゲ | | 腹部がくびれ。強く外反する。 口部外は貼付。 | |
| 97 | S D 2-1 | 灰陶花瓶 | | | | 粘土。外向地赤褐色 の鉄鉬。内面赤褐色。 | | | 貴重花瓶の腹部直付で、やや 小振り。 | |

第4表 遺構内出土石器観察表1 (No.1~50)

| 遺物 番号 | 遺構名— 採土番号 | 器種 | 法 量 | | | | 分類 | 石質 | 調査・特徴 | |
|----------|--------------|-------------|--------|-------|------|--------|-------|-------|---|-------|
| | | | 長cm | 幅cm | 厚cm | 重g | | | 特徴 | 調査・特徴 |
| 1 | C 4-17 | 石錐 | 2.7 | 5.0 | 0.5 | 12.6 | I B 2 | 緑色片岩 | 粗粒阿爾卑ス打ち欠く。 | |
| 2 | C 4-40 | 石錐 | 3.0 | 4.4 | 1.05 | 20.6 | I B 2 | 泥質片岩 | 粗粒阿爾卑ス打ち欠く。 | |
| 3 | C 4-12 | 石錐 | 3.3 | 5.2 | 0.65 | 20.3 | I B 2 | 鈍化片岩 | 粗粒阿爾卑ス打ち欠く。 | |
| 4 | C 4-14 | 石錐 | 2.85 | 4.7 | 1.0 | 24.2 | I B 2 | 泥質片岩 | 粗粒・細粒のみを打ち欠く。 | |
| 5 | C 4 | 石錐 | 3.5 | 4.0 | 0.55 | (14.0) | I B 2 | 緑色片岩 | 粗粒・細粒を強く打ち欠き、裏面は剥離す る。 | |
| 6 | C 4 | 石錐 | 5.3 | 4.7 | 1.2 | 45.8 | I B 3 | 緑色片岩 | 粗粒を主として打ち欠き、粗粒も僅かに打 ち欠く。 | |
| 7 | C 4-37 | スクレ イバレー | 4.2 | 2.9 | 0.8 | 9.7 | | チャート | 平坦な面を作出し。削離する。一體性が 鋭利で外寄し、微かな剥離痕が確認に認め られる。 | |
| 8 | C 4-38 | 剥片 | 2.4 | 3.4 | 0.7 | 4.4 | | チャート | 上端を調整した後、打点の方向を僅かに変 え、削離する。 | |
| 13 | S T 4 | 石錐 | 1.7 | 1.1 | 0.2 | 0.3 | I A 1 | サスカイト | サスカイトは丸く、基部抉りはや や浅い。 | |
| 14 | S T 4 | 石錐 | 2.7 | (1.8) | 0.3 | 0.65 | I A 2 | サスカイト | 刃根が直線的で刃角が鋭く、大型のもの。 一部が欠損する。 | |
| 15 | S T 4 | 石錐 | 1.5 | 1.3 | 3 | 0.3 | I B | サスカイト | 刃根が直線的でやや厚く、三角形に近い。 | |
| 16 | S T 4 | 石錐 | (1.2) | 1.5 | 0.5 | (0.6) | I D | サスカイト | 基部抉りは浅く、先端部は欠損する。 | |
| 17 | S T 4 | 剥片 | 2.3 | 1.0 | 0.25 | 0.6 | | サスカイト | 粗粒の剥片で表面には数ヶ所の調整剥離が 見られる。 | |
| 18 | S T 4 | 剥片 | 1.5 | 1.05 | 0.2 | 0.2 | | サスカイト | 薄い剥片で表面には数ヶ所の調整剥離が見 られる。 | |
| 47 | 上唇施て場 | 尖頭状 石錐 | 3.6 | 0.9 | 0.5 | 1.25 | V C | サスカイト | 両刃縁は両面から交叉に剥離を行ない、刃部 を作出し、全体がV字状にする。基部は側縫 から剥離を行った處。裏面方に剥離して作 出する。 | |
| 48 | 上唇施て場 | 块状 石錐 | 5.2 | 3.1 | 0.9 | 11.66 | | サスカイト | 両刃縁は内寄し、右刃縁は刃削し状にやや 厚く、両縫に抉入部を作出し、下部抉入部 は広がる。 | |
| 49 | 土部施て場 -48 | 石錐 | 5.4 | 3.85 | 1.1 | 36.3 | I B 3 | 結晶片岩 | 良輪輪縫を打ち欠く。 | |
| 50 | 上唇施て場 | 石錐 | 5.25 | 3.5 | 1.4 | 42.2 | I C 3 | 結晶片岩 | 長輪輪縫が部分的に 穿孔する。 | |

第5表 遺構内出土石器観察表2 (No.53~96)

| 遺物番号 | 遺物名 採上番号 | 基 標 | 法 量 | | | | 分類 | 石 質 | 調査・特徴 |
|------|-------------|------------|--------------------------------------|--------|-------|--------|--------|-------|--|
| | | | 長cm | 幅cm | 厚cm | 重g | | | |
| 53 | S X 5 | 石錐 | (2.3) | (1.3) | 0.4 | (0.51) | I E | チャート | 刃縁は内凹し、基部抉りは深い。刃脚部は欠損する。 |
| 54 | S X 5 | 乳輪状 石斧 | (10.9) | (4.75) | (2.8) | (212) | | 砂岩 | 基部が乳輪状に欠け、全体を磨く。基部、先端部は無打痕。刃部は削切する。 |
| 55 | S X 5 | 石錐 | 4.7 | 3.3 | 0.5 | 14.1 | II B 2 | 泥質片岩 | 長袖両端を僅かに打ち欠く。 |
| 56 | S X 5 | 石錐 | 5.75 | 4.85 | 0.8 | 40.7 | II B 3 | 泥質片岩 | 長袖両端を打ち欠く。 |
| 57 | S X 5 | 石錐 | 4.8 | 3.8 | 0.4 | 37 | II B 3 | 結晶片岩 | 長袖両端を打ち欠く。 |
| 61 | S X 6 | 磨製石斧 | 7.8 | 4.6 | 1.0 | 38.2 | | 流紋岩 | 全体を研磨し、刃部を更に研磨し作成する。 |
| 62 | S X 6 | 石錐 | 4.3 | 6.5 | 1.1 | 57 | I B 3 | 泥質片岩 | 鉄錆両側縁を打ち欠くが、対角ではない。 |
| 63 | S X 6 | 石錐 | 4.7 | 4.75 | 1.05 | 43.5 | II A 3 | 緑色片岩 | 円形に凸起した鉄錆両側縁を打ち欠く。 |
| 64 | S X 6 | 石錐 | 4.7 | 3.6 | 1.1 | 32.5 | II B 3 | 結晶片岩 | 長袖両端を打ち欠く。 |
| 65 | S X 6 | 石錐 | 4.6 | 4.0 | 1.35 | 38.6 | II B 3 | 泥質片岩 | 長袖両端を大きく打ち欠く。 |
| 66 | S X 6 | 石錐 | 6.0 | 4.1 | 1.15 | 47.8 | II B 3 | 緑色片岩 | 長袖両端を打ち欠く。 |
| 67 | S X 6 | 石錐 | 5.2 | 3.8 | 1.45 | 50.3 | II B 3 | 緑色片岩 | 長袖両端を打ち欠き、抉入部はやや摩耗する。 |
| 68 | S X 6 | 石錐 | (7.4) | 3.6 | 1.0 | (47.0) | I C | 泥質片岩 | 長袖一端部を打ち欠く。→端部は大きく欠損する。 |
| 69 | S X 6 | 石錐 | 6.4 | 3.6 | 1.5 | 61.0 | II C 4 | 結晶片岩 | 長袖両端を打ち欠く。 |
| 70 | S X 6 | 石錐 | (5.0) | 3.8 | 0.75 | (25.1) | I C | 結晶片岩 | 長袖一端部を打ち欠き、一端部は欠損する。 |
| 71 | S X 6 | 磨石 | 10.4 | 5.4 | 2.4 | 229.0 | | 泥灰岩 | 尖頭中央部が凹み、表面に擦痕が見られる。 |
| 72 | S K 6 | スクレ イバー | 2.6 | 2.2 | 0.6 | 3.8 | | チャート | 表面共に主要削離を残し、両側縁に僅かに使用痕が認められる。 |
| 74 | S K 8 | 石錐 | 1.6 | (1.2) | 0.2 | (0.29) | I D | サヌカイト | 刃縁はやや内凹する。 |
| 75 | S K 8 | 石錐 | 2.7 | (1.6) | 0.3 | (0.58) | II | サヌカイト | 刃縁がくびれ、刃脚が突く、基部抉りは深い。脚部も鋸く長い。 |
| 78 | S K 9 | 石錐 | 1.1 | 1.0 | 0.3 | 0.2 | I C | サヌカイト | 小型の石錐で、刃縁が直線的で基部抉りは浅い。 |
| 79 | S K 9 | 石錐 | 1.4 | 1.3 | 0.3 | 0.32 | I E | サヌカイト | 小型の心臓形で、刃縁は外彎し、肩部分で直線的に曲る。刃角は浅い。基部抉りは深い。 |
| 80 | S K 9 | 石錐 | 1.6 | 1.2 | 0.3 | 0.4 | I F | サヌカイト | 小型の石錐で、刃縁は外彎し、刃部は純く、肩部分がやくびれ、基部抉りは浅い。 |
| 81 | S K 9 | 石錐 | 2.8 | 2.6 | 0.4 | 1.8 | IV A | サヌカイト | 大型の石錐で、刃縁は直線的で、基部はほぼ平らで、左右の脚はやや不揃い。 |
| 82 | S K 9 | 石錐 | 1.5 | 1.5 | 0.4 | 0.35 | V A | サヌカイト | 三叉状の形状のもので、刃縁は内凹形で、基部抉りは広く深い。左右の脚はやや不揃い。 |
| 83 | S K 9 | 石錐 | 2.1 | (1.4) | 0.5 | (0.8) | V B | サヌカイト | 刃縁は左右非対称で、刃角が尖る。石錐の可能性もある。 |
| 84 | S K 9 | 刮片 | 2.4 | 2.4 | 0.8 | 2.2 | | 黒曜石 | 主要剥離面のみで、使用面、2次剥離面等は認められない。 |
| 86 | S K 11 | 石錐 | 1.3 | (1.3) | 0.2 | 0.2 | I C | サヌカイト | 刃縁が直線的で基部抉りが浅く、小型。 |
| 87 | B 9 P 1 | 石錐 | 11.4 | 2.45 | 1.45 | 75.9 | II C 4 | 緑色片岩 | 棒状に長い長袖両端を打ち欠く。抉入部は摩耗する。 |
| 88 | B 9 P 1 | 丸吹耳 飾り | 外径(3.5) × 内径(1.8) × 厚0.5 × 重(3.8) | | | | | 泥質片岩 | 円形で下端に抉入が入る。表面はやや丸味を持たず、裏面は平滑。全体を研磨する。 |
| 96 | S X 4-1 | 砥石 | 8.6 | 6.7 | 2.7 | 278 | | 細灰岩 | 表面、刃脚部と左側縁の一部に擦痕。側部は欠損する。 |

第3節 遺構外出土遺物

遺構外出土の遺物は縄文土器、弥生土器の土器類、石鎌、石錘等の石器類、また土製品としてはミニチュア土器が挙げられる。以下、器種毎に分類できるものについては分類基準を提示し、個々の遺物の概略を記す。

(1) 縄文土器 (第39~45図No.98~237)

1) 縄文土器の分類

縄文土器は早期、前期、中期、後期、晩期と考えられる上器群が出土しており、基本的には時期を目安としてローマ数字によりⅠ~Ⅴ群まで大きく分類を行い、更に形態・文様・手法等により型式を基本とし、アルファベットで細分を行い、更にアラビア数字により細区分して類を設けた。尚、遺構内出土土器についても同時に記述する。

Ⅰ群 口縁は直立し、口唇内に斜方向の刻みを施すもの (98)。

Ⅱ群 表裏面に条痕を施すもの、爪形刺突を施すもの、浮線文等を施す一群を一括した。

A 1類ー表裏条痕で口唇に刻みを施すもの (99)。

A 2類ー表裏条痕で「C」字状の連続爪形文で、口唇に刻みを施すものもある (100~102)。

A 3類ー表裏条痕の破片であるがA類に含まれる可能性の強いもので、器肉は薄いもの (103)。

B類ー爪形刺突文を表裏面に施し、外面にはR Lの縄文を施すもの (104)。

C類ー角棒状工具による連続押し引き、口唇に刻みを施し、器肉は薄く、内面には指頭圧痕が認められるもの (105)。

D 1類ー浮線の断面はつまみ上げたようにやや鈍い三角形を呈し、浮線上に何も施さない素文のもので、浮線両脇が弦線状になるもの。地文は縄文、器肉は薄い (106, 107)。

D 2類ー浮線上を半截竹管状工具で撫でつけ、浮線の両脇が弦線状になるもの。浮線が細いもの (108)、浮線断面がカマボコ状になるもの (19, 109~112)、浮線断面が低く、三角形になるもの (113, 114)、浮線断面が三角形を呈し、半截竹管状工具により爪形文に近い刻みを施すもの (115~117)、浮線上に縄文を施すもの (20) 等々のバリエティーを持ち、地文は縄文でR L, L R共にある。器肉は全体的に薄く、内面に僅かに指頭圧痕を残す。

D 3類ーD 1, 2類の口縁部及び胴部破片と考えられる一群。口縁を内面に折り返し段状にして、口唇に刻みを有するもの (21, 119)、口縁を僅かに内側に折り返し、口唇に刻みを有するもの (123)、同じく刻みを施さないもの (124) 等々が見られ、地文はL Rの縄文で口縁折り返し部分にも同様に縄文を施す。胴部破片はL Rの縄文で筋が太く、器肉は薄い (12, 76,

89)。

E類—前記のA～D類に含まれないものを以下の5類に分類した。

E 1類—潰れたような幅広の浮線(特殊凸帯)を付し、縄文を施し、口縁、口唇にも同様に施し、口唇は平らなもの(125、126)。

E 2類—口縁を屈曲させ、素文の浮線を縦に貼付し、両脇が沈線状になる。地文は節の太いLRの縄文(127、128)。(127)は胴部はRLで羽状にする。

E 3類—断面三角形の浮線上に「 Σ 」形の連続爪形文、口縁の内面も折り返し、口縁形態は「Y」字状に近い。地文は節の太いRLの縄文で口縁内面にも施す(22、129)。

E 4類—胴部破片でRLの縄文地に沈線を施すもの(23)、潰れた浮線上に連続爪形文を施すもの(130)。

E 5類—I群に伴うと考えられる底部で多角形の底部を一括する。胴部はRL、LRの節の太い縄文(131～133)。

F類—C類と同様に角棒状工具による押し引きだが結節状にはならないもの。口唇に刺突、内面には指頭压痕が残る(134)。

III群 地文が主として燃糸、条線で爪形文、円形刺突を施し、器形はキャリバー形を呈する一群。

A 1類—胴部破片で地文は「r」の燃糸で燃りが太くゆるい。円形刺突を連続して施す(135、136)。

A 2類—キャリバー形を呈し、地文は燃りが太くゆるい「r」の燃糸、円形刺突と爪形を施すもの(58)。

A 3類—口縁下に円形小刺突と爪形刺突、口縁内にも爪形刺突を施すもの(137)。

A 4類—口唇にも刺み、また口縁外に貝殻先端部压痕を施すもの(138、139)。

B 1類—口唇に刺みを施すもの(140)。

B 2類—胴部破片で地文は「r」の燃糸のもの(141)。

C 1類—地文は継位に燃糸を施し、波状の沈線を施すもの(142～147)。

C 2類—口唇下に円形刺突またはジグザグに連続的に刺突を施す。口唇には何も施さないもの(148、149)。

C 3類—条線、または集合沈線を施すもの(150～153)。

D類—地文は節の太いLRの縄文で、刷部に太い隆帯を貼付し、隆帯を指頭で押し潰し、連鎖状にするもの(154～157)。

E類—A～D類に含まれないもので、以下の2類に分類した。

E 1類—口縁下に円形の压痕を数段連ねるもの(158)。

E 2類—地文がLRの縄文のもの(159)。

IV群 主として磨消繩文系の土器群。

A類—沈線文、繩文、貝殻擬繩文のもので、以下の5類に分類した。

A 1類—胴部全面に円形刺突を施すもので、地文はL Rの繩文のもの（160, 161）。

A 2類—太い沈線で山線的な文様を施すもの（59, 162-166）。

A 3類—貝殻擬繩文を施し、隆帯または口縁部を肥厚させて、文様帯を作るもの（167, 168）。

A 4類—口縁部を肥厚させないものの、口縁部文様帯を沈線により区画し、口縁部に区画文、または繩文のみを施すもの（169, 170）。

A 5類—擬繩文による磨消繩文のもの（171）。

B類—磨消繩文で沈線が太く、端部が結みつかないもの。繩文原体は主としてL Rである。以下の3類に分類した。

B 1類—キャリバー形を呈し、口縁部文様帯を有し、波状を呈する。胴部文様は磨消繩文で縱位区画文。地文はL Rの整った繩文である（172）。

B 2類—鉢型口縁は波状を呈し、口縁外は無文帯を形成し、胴部は磨消繩文で縱位区画文地文はL Rの整った繩文である（173）。

B 3類—胴部破片で曲線的な太い沈線による磨消繩文。原体はR Lの繩文である（174-177）。

C類—2本沈線による磨消繩文のもので、以下の5類に分類した。

C 1類—鉢状の器形で口唇は肥厚せず口唇外に沈線が1条巡り、胴部は幅の狭い2本沈線で沈線内は主にR Lの細かい繩文のもの（9, 10, 24, 51, 178-186）。

C 2類—曲線的な幅広の微隆帯を施すもの（187）。

C 3類—口縁は山形の波状を呈し、口縁に文様帯を設け、頸部は発達していないもの（188, 189）、口縁が山形突起をなし、磨消繩文が結みつくもの（60, 190）、口縁を肥厚させ、外面に沈線、また刻み、繩文を施すもの（11, 191）。

C 4類—口唇を余り肥厚させず、沈線及び刻みを施す。頸部には文様帯を設けないもの（192, 193）。

C 5類—Ⅳ群C類に伴うと考えられる底部で、底部は平底で底部脇が突出する（194, 195）。

D類—口唇内を肥厚または拡張し、刻み、沈線を施すもので、胴部文様は幅広の磨消繩文、または沈線文の一類。以下の4類に分類した。

D 1類—口唇を内側に拡張し、沈線1条と短沈線、繩文を施し耳状把手が付き、頸部無文帯を形成し、胴部文様は沈線文のもの（25）、（26）は胴部文様は逆「L」字状の磨消繩文、（27）は瘤状突起を付し、頸部無文帯を形成し、胴部文様帯はやや粗い集合沈線、（28）は頸部に3条の沈線を垂下させる。（29）は沈線2条で短沈線を施さないもの等が見られる。

D 2類—口唇を拡張しないで、また頸部無文帯を形成せず、胴部文様が上位から施され、逆「L」字状の磨消繩文を施すもの（199）。

D 3類—口唇を拡張しないで、口縁部は無文帯となり、頸部は無文帯で沈線1条を巡らせ、

やや内弯気味にし、脇部は逆「L」字状の2本沈線による曲線文のもの（30）。

D 4類—沈線文の脇部破片で曲線的なもの（31, 200）、直線的なもの（52, 77）が見られ、条痕を施すものもある。

E 1類—口縁を拡張させず、緩やかな波状口縁を呈し、幅広い沈線が口縁内外面に入り組み文状に絡むもの（201—203）。

E 2類—口縁部を大きく外側に拡張し、外面に沈線2～3条と縄文を施し、頸部は無文帶となるもの（360, 361）、また脇部は縄文地に直接沈線を施すもの（353）。

E 3類—口唇に丸味を持ち、口縁外に並行沈線を巡らせ、沈線内に縄文を施すもの（90）、口唇をやや肥厚させるもの（204）。

E 4類—口唇を外側に拡張させ、沈線を3条巡らせるもの（205）。

F 1類—口縁部に文様集約が見られ、帶縄文が2条巡るもの（206, 207）。

F 2類—口縁部が凹凸状になるもの（73, 208）。（73）は屈曲部に刻みを施す。

鉢類—IV群に伴うと考えられるもので、以下の3類に分類した。

A類—太い沈線により、雷状の文様が施され、器面は丁寧に仕上げられるもの（32—34）。

B類—入り組み文状になり、沈線の起点を刺突するもので、IV群E類に伴うものと考えられるもの（35）。

C類—文様を持たず、口縁が内弯気味のもの（209）。

D類—口縁に縄文及び沈線、脇部に三角形状の文様を沈線で施すもので、E 2類に伴うと考えられるもの（362）。

浅鉢類—IV群に伴うと考えられるもので、以下の4類に分類した。

A類—口縁内が段状に突出し、大きく開くもの（36）。

B類—口唇内を段状に肥厚させるもの（38）。

C類—口唇内を僅かに肥厚させるもの（39）。

D類—口縁部を形成し、内弯気味に直立するもの（37）。

粗製深鉢—IV群に伴うと考えられるもので、以下の3類に分類した。

A類—口唇に刻み等を施さず、素口縁のもので口縁形態には種々あり、口唇を折り返すもの（40）、やや内弯するもの（210）、直立するもの（41）。

B類—口唇に刻みを施すもので、刻みの施し方に数種類の形態が認められる。刻みが直角で短いもの（211, 212）、やや刻みが長く斜行のもの（213—215）。

C類—口唇にジグザグに刻みを入れるもの（216）。但しII群に含まれる可能性がある。

底部—IV群に伴うと考えられるもので、以下の3類に分類した。

A類—小型で上げ底のもの (218)。

B類—高台状を呈し、深鉢の底部と考えられるもの (43, 44, 219, 220)。

C類—浅鉢の底部と考えられるもので、上げ底で大きく開いて立ち上がるもの (45, 46)。

把手類—IV群に伴うと考えられるもの。

(222) は大振りな把手で太い沈線を3条巡らせる。(221) は注口土器の可能性があり、摘み状の突起を貼付し、器面は丁寧な仕上げである。

V群—刻み目突帯を付す一群。

A 1類—一口唇に刻みを施すもの (223~227)。

A 2類—一口唇に刻みを施さないもの (228, 229)。

A 3類—一口唇の直下に突帯を付し、口唇に刻みを施さないもの (230)。

A 4類—一口唇内が沈線状になり、口唇に刻みを施すもの (231, 232)。

B類—IV群に伴うと考えられる浅鉢類を以下の5類に分類した。

B 1類—一口唇内及び口縁屈曲部に沈線を巡らせるもの (233)。

B 2類—一口縁屈曲部が突出し、沈線を巡らせるもの (234)。

B 3類—一口縁屈曲部が僅かに突出し、沈線を巡らせ、口唇が外傾するもの (235, 236)。

B 4類—一口縁屈曲部が突出し、口唇が外傾するもの (237)。

B 5類—一口縁屈曲部が突出し、口縁が外反気味のもの (91)。

2) 繩文土器の所属時期

I群は98の1点のみで、出土層位は現水田耕作土除去後の黄褐色シルト層にへばりつくように出土している。器形はバケツ状に直線的に立ち上り、口唇がやや尖り気味で、口唇内に斜方の刻みを施し、僅かに条痕が見られる。また粘土帯が明瞭で粘土帯接合部分に指押さえが見られる。早期に属する可能性が高い。型式名については不明である。

II群は前期に含まれると考えられる一群である。

II群A類は表裏面に粗い条痕を施し、連続爪形文を施す一群である。前期前半に含まれ、羽島下層式であろう。

II群B類の104は外面にL Rの繩文地で内外面共に爪形刺突を施すもので、大歳山遺跡に類例が見られ、前期中葉に含まれ、磯の森式に相当するものと考えられる。

II群C類の105は半截竹管状工具により連続爪形文を施し、口唇にも刻みを施すもので、内面には強い指頭圧痕が認められる。前期中葉に含まれ、彦崎2Ⅱ式に相当するものと考えられ

る。

II群D類は浮線を貼付するものを基本とし、地文にR L、またはL Rの縄文を施す一群である。浮線の形態は種々見られ、断面三角形のもの、カマボコ形のものが見られ、浮線上に何も施さない素文のもの、結節浮線になるもの等が見られ、浮線上に縄文を施すものは少ない。口唇形態は素文のもの、縄文を施すもの、また内面に折り返し縄文を施すもの等が見られる。前期後半に含まれ、彦崎Z I式に相当しよう。

II群E類は潰れた浮線文(特殊凸帯)に縄文、または連続爪形文を施すもの等が見られ、縄文はR Lを主とし、節が整っている。また、127の様に羽状縄文も見られる。内面には僅かに指頭圧痕が見られるものが多いようである。E 3類は浮線上に「エ」字状の連続爪形文を施し、口唇は特徴的で「Y」字状の断面形態を呈している。多角形の底部はそれに伴うものと考えられる。前期末に含まれるものと考えられ、E 3類は大歳山式、他のものは田井式の範疇に含まれよう。

II群F類の134は角棒状工具による押し引きで、彦崎Z I式に見られる様な半截竹管状工具による連続押し引きとは違い、深く刺突状に施文されるなど施文方法、施文具の相違が認められる。口唇にも刺突が見られ、内面には指頭圧痕が認められる。型式名は不明であるが、前期中葉から後半に含まれるものと考えられる。

III群は中期に含まれると考えられる一群である。

III群A類は地文がrの斜位に施した撚糸で円形刺突を加えたもの。また口唇外に貝殻背先端部の圧痕が見られるものもある。137は微隆帯に連続爪形文を施すもので、共に中期前半に含まれ、船元I式の範疇で捉えられるものである。

III群B類は中期前半に含まれると考えられるものの、型式名は特定できない。

III群C類はA類と同様に地文に撚糸を施すものの、縦位に施文する。原体はr、1共に見られる。C 1類142のように口縁部文様帯にも撚糸を施し、ジグザグの連続刺突により区画するものも見られる。中期後半に含まれ、里木II式に相当しよう。C 2、C 3類は地文が条線となるか、条線状に条痕を施すものが見られる。口唇が無文のものは口縁にジグザグ連続刺突を施し、口縁が外反する。口唇外に刻みを施すものは内弯し、口縁に条線を施す。中期後半に含まれ、里木III式に相当しよう。

III群D類は地文がL Rの縄文で、連續状の浮線文を付すものである。類例はなく、時期等は特定できないものの中期の可能性の高いものである。

III群E類も時期は特定できない一群である。158は口縁外に小円形の圧痕を数段施すもので、胎上に石英を多量に含み、内外面が黄褐色の色調を呈するものである。中期の可能性があるものである。

IV群は後期に含まれると考えられる一群である。

IV群A2類は太い沈線文の一群で並行沈線のもの、曲線的な沈線文が見られ、外側の調整は条旋である。後期初頭に含まれ、中津式に相当しよう。A1類は胴部に棒状の施文具による円形の刺突を施すもので、地文はL Rの縄文である。中津式の範疇に含まれる可能性が高い。A3類の167、168の2点は地文が貝殻縄文のもので、口縁文様帶を肥厚させ、隆帯を貼付するものである。器形的には瀬戸内の方に認められないものであり、また中津式には類例は求められないものの、文様構成、手法からして後期初頭に含まれるものと考えられる。A4類の169もやはり口縁部文様帶を形成しており、A5類は口縁部に貝殻背先端部の圧痕が見られるものである。A4、5類は共に中津式に含まれないものの、後期初頭に属すると考えられる。

IV群B類は磨消縄文の一群で、B1類の172はキャリバー形を呈し口縁に文様帶を設けるもので、胴部文様構成は逆「U」字状のものである。後期初頭に含まれるものであるが、中津式には類例は認められない。またB2類も同様である。B3類は中津式の範疇で捉えられよう。

IV群C類は2本沈線による曲線的な磨消縄文で、C1類は後期前半に含まれる宿毛式である。C2~5類は宿毛式に類例は認められないものの、宿毛式と並行関係にある一群と考えられる。

IV群D類は口唇を内面に肥厚させ、短沈線、縄文を施し、沈線を1~2条巡らせ、耳状の突起を付すものである。バケツ状の器形のものは頭部無文帶を発達させず、頭部無文帶を形成するものへと変遷が見られるようである。胴部は宿毛式とは違い、幅の広い磨消縄文で逆「L」字状文の文様構成を探るものが比較的多く、胴部文様構成はダイレクトには宿毛式に系譜を求めることはできない。沈線のタッチは宿毛式、福田KII式、平城I式とは若干の相違が見られ、沈線脇の土手を残し、器面の仕上げはやや粗い感じを持つ。しかし、沈線端部が入り組み文状に離れる癖は宿毛式、福田KII式、平城I式と同様である。また、沈線内に赤彩を施すものも僅かに残るようである。磨消縄文以外に沈線文のものも比較的多く認められ、また沈線による雷文状の文様構成の鉢等、器種にバラエティーを持つ。後期前半に含まれ、本遺跡を標準とする松ノ木式に相当する。

IV群E1類は沈線による入り組み文を形成するもので、201は口唇内側にも鉢巻き状に絡ませ、縄文を施すものである。頭部は無文帶を形成せず、口縁部から文様を施すものである。また器面全体に赤彩を施している。後期前半に含まれ、平城式には類例は見られないものの、口唇に沈線を絡ませる等の特徴からして、平城式系統の範疇で把えるのが妥当と考えられる。E2類は口縁部を拡張したもので、360、361は縁帶文に含まれるもので、津雲A式に相当しよう。353は平城II式に通常にみられるものであるが、地域的隔りを考慮に入れると津雲A式に伴なう胴部破片の可能性がある。E3類の90はG10P1内出土のもので、宿毛式期のS T 4と切り合い関係にあり、口唇に帶縄文を施すものである。後期前半から中葉にかけてのものと考えられるが、型式名等は不明である。E4類も中葉と考えられるものの、型式名は不明である。

IV群F1類は口縁部に2条の帶縄文を設け、頭部は大きくくびれ無文帶となっている。後期

後半に含まれ、伊吹町式相当であろう。F 2類は口縁部に凹線文を施し、73は口縁屈曲部に刻みを施す。後期後葉から末葉に含まれる。

IV群に伴うと考えられる鉢、浅鉢、粗製深鉢、底部、把手類について、概略を記す。

鉢A類は太い沈線に雷状に文様が施され、器面が丁寧に仕上げられるものである。松ノ木式を構成する鉢で、壺形を呈するものも見られ、当該期の遺跡から僅かに出土する例が認められる。A類についての系譜等については今の所、不明である。鉢B類は沈線による入り組み文状になり、沈線の起点を刺突するもので、IV群E類の半城式系統に含まれる可能性が高い。鉢C類は口縁が内窪し、外面が条痕のみのものである。宿毛式から松ノ木式に含まれるものと考えられる。D類については、津雲A式、または平城II式の縁帶文に伴なう鉢と考えられる。

浅鉢A類の36は大きく開き、条痕調整で口縁内が段状に突出するもので、宿毛式に段状になるものが比較的多いものの、松ノ木式までこのタイプは残る可能性がある。浅鉢B類38は口縁内を段状に肥厚させるもので器面全体を焼き調整で仕上げるもので、松ノ木式に伴うものと考えられる。浅鉢C類39も松ノ木式に伴い、口縁内を僅かに肥厚させるものである。浅鉢D類37は口縁部が内窪気味に立ち上がり、焼き調整である。松ノ木式に伴う。

粗製深鉢は胴部文様帯を持たず、口唇に刻みを施し、器面調整が条痕のものを主流とする。粗製深鉢A類は口唇に刻みを持たないで器面調整が条痕のもの、松ノ木式に伴う。B類は口唇に刻みを施すもので、刻みの施し方にバラエティーが見られ、刻みが短く口唇に対し直角的に施すものは宿毛式が多く、また松ノ木式に見られるものの、松ノ木式に明らかに伴うと考えられるものは比較的刻みが長く、斜行する傾向にあるようである。口縁を肥厚させるものについては松ノ木式に含まれよう。C類216は口唇を肥厚させず口唇上端にジグザグの刻みを施すもので、松ノ木式に含まれるかどうかは判然としない。

底部A類は深鉢の底部で218は小振りで上げ底のもので、宿毛式に伴うものと考えられ、高台状になるB類は松ノ木式に伴うものである。C類は浅鉢の底部で松ノ木式に伴うものであろう。

把手類の221、222共に松ノ木式に伴うものであろう。

V群は晩期に含まれる一群である。

A類は刻み目突帯を付するもので、口唇に刻みを施すもの、施さないものが認められ、また口唇内が沈線状になるものも認められる。A類に伴うと考えられる浅鉢をB類とした。口縁屈曲部に沈線を巡らせるもの、突帯状になるもの等が認められ、A、B類共に晩期後半に含まれよう。

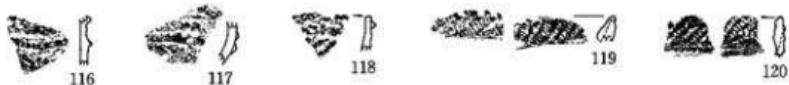
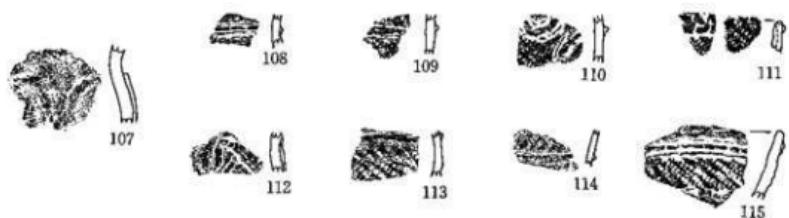
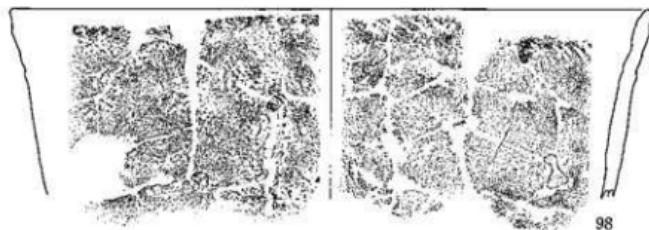
(2) 弥生土器 (第46図No.238~252)

弥生土器は縄文土器に較べ、出土量は少なく、縄文土器と区別する為にVI群として分類したもの、特に細分は設けなかった。以下、個別に概略を記述する。

238は壺で口唇に断面三角形の粘土を突帯状に貼付する。239は壺と考えられ、口縁端部に凹線状の沈線を施す。240も壺と考えられ、口縁を外面に折り返す。241は口縁が「く」字状に外傾させる。242は壺で口縁内外面共にナデ調整、243は胴部破片で強く張るものである。244は胴部破片で細い沈線間に粘土帶の貼付を施し、刻み状に押さえる。245は筆状文、246は櫛描波状文である。247は細い頸部に刺穴が見られる。

248、249は共に半底の底部で、248は底径5.2cmを測り、2~5mmの砂粒を多量に含み、調整は内外面共にハケ調整である。250、251も底部で250は4.8cmを測り、底部脇がやや突出している。251は上げ底状の底部で石英を多量に含み、外面ヘラケズリ、内面粗いハケ調整である。

252は高环の脚部である。砂粒・長石を多量に含み、内外面ナデ調整である。



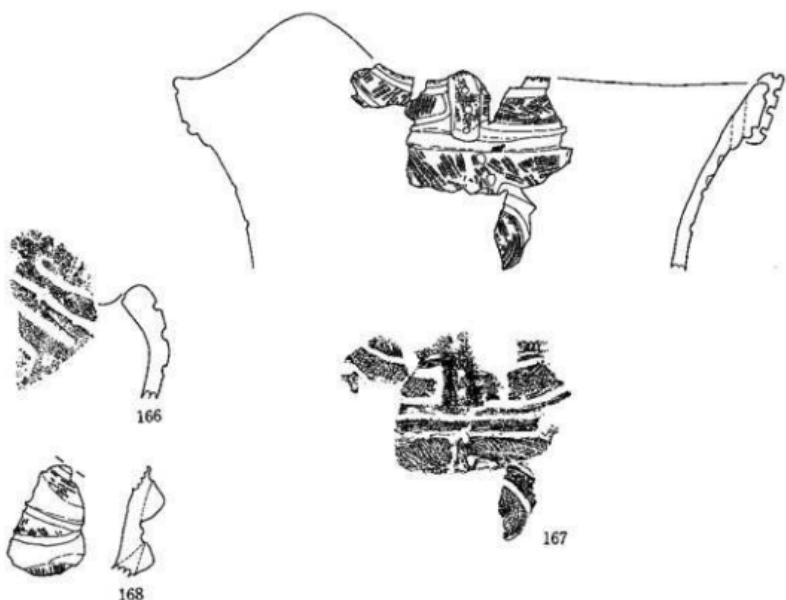
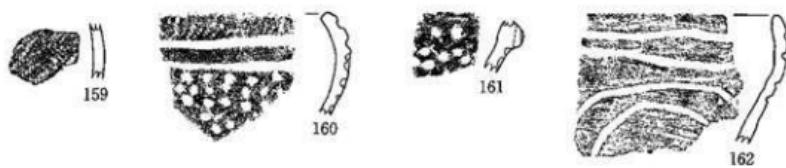
第39図 遺構外出土遺物(1)





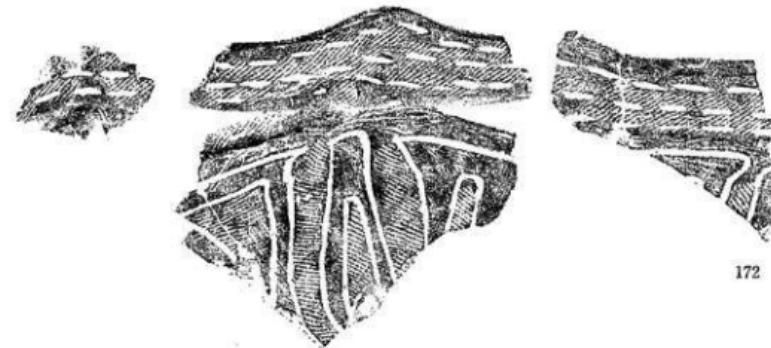
第40図 造構外出土遺物(2)





第41図 遺構外出土遺物(3)





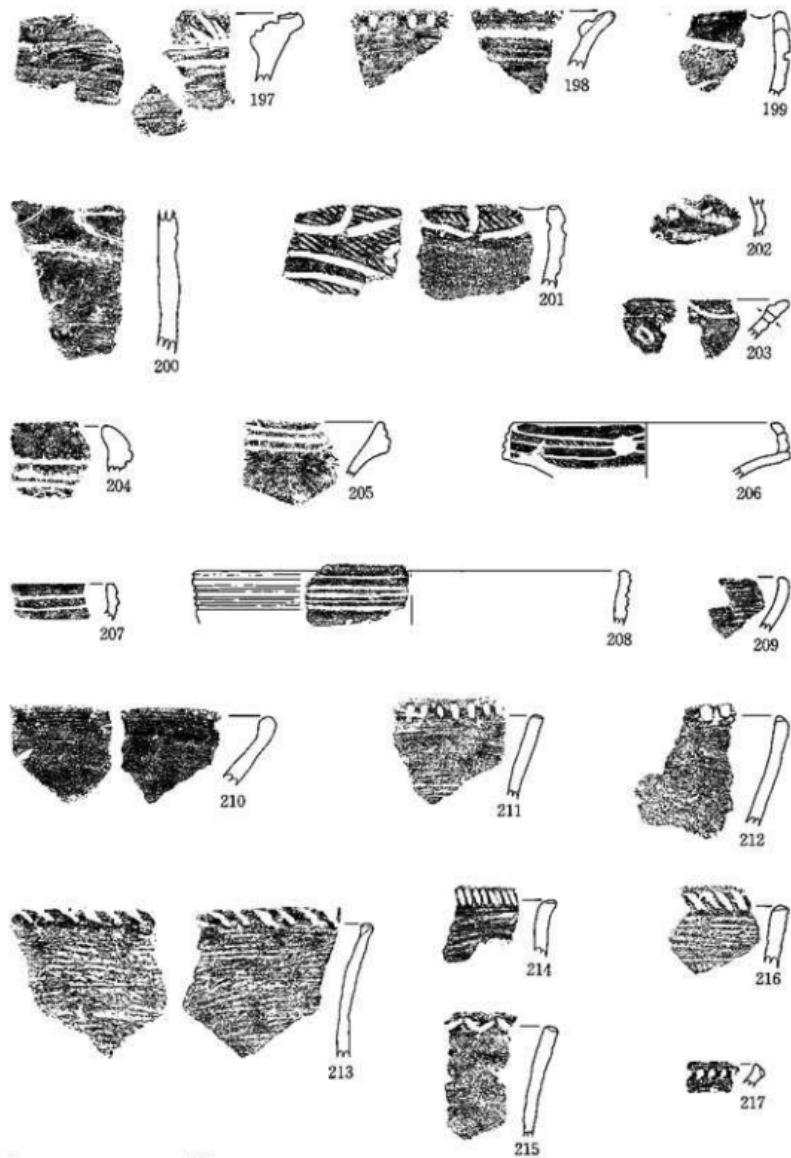
第42図 遺構外出土遺物(4)



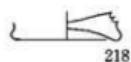


第43図 遺構外出土遺物(5)

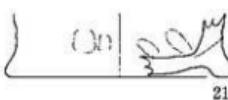




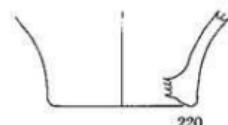
第44図 遺構外出土遺物(6)



218



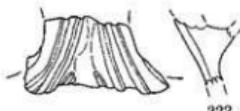
219



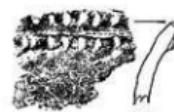
220



221



222



223



224



225



226



227



228



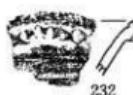
229



230



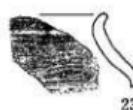
231



232



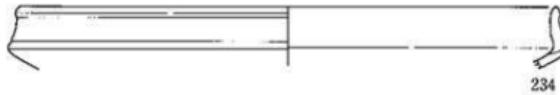
233



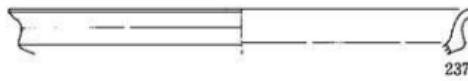
235



236



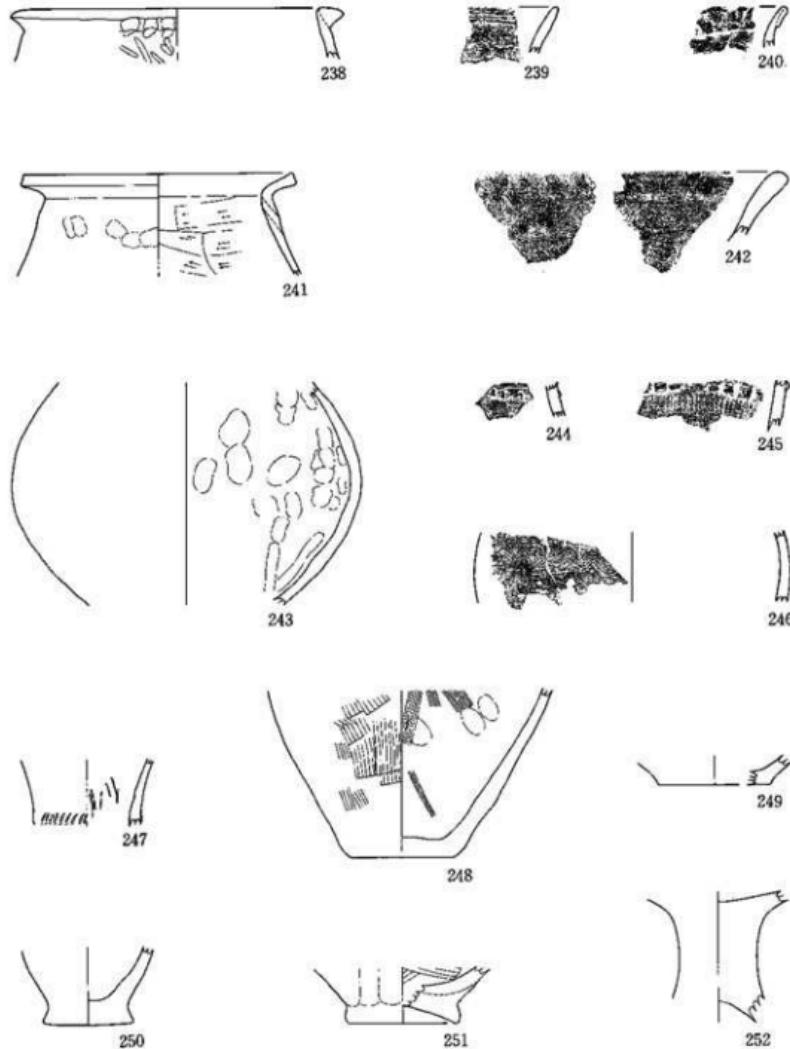
234



237

第45図 造構外出土遺物(7)





第46図 遺構外出土遺物(8)

第6表 遺構外出土繩文土器觀察表1 (No. 98~125)

| 遺物 番号 | 出土グリ ッド名- 採上番号 | 器 種 | 口径 基部 側面 底盤 (cm) | 分類 | 胎土-色調 | 特 徴 | | | 備 考 |
|----------|----------------------|--------|------------------------------|--------|----------------------|--------------|----------------------------------|-------------------------------------|--------|
| | | | | | | 縄文 原体 | 器面調査 | 文 様 他 | |
| 98 | F9-25-26 | 深鉢 | | I | 長石・石英・チャート多量。内外面暗褐色。 | 外層ナデ、内面柔軟。 | 口唇はやや尖り、内面に斜行の割み。 | | |
| 99 | C9-32 | 深鉢 | | II A 1 | 石英・砂粒微量。内外面黒褐色。 | 内面柔軟 | 内面灰地に立ち上がり、口唇を僅かに肥厚させ、「C」字状の彫刻文。 | | |
| 100 | 一括 | 深鉢 | | II A 2 | 長石・砂粒少量。外面黒褐色、内面暗褐色。 | 内面柔軟 | 「C」字状の連続彫形文が2段、口唇に連続爪形文の跡み。 | | |
| 101 | 一括 | 深鉢 | | II A 2 | 長石多量。外面黒褐色、内面暗褐色。 | 内面柔軟 | 押し引き刺文。 | | |
| 102 | C10 | 深鉢 | | II A 2 | 長石多量。外面黒褐色、内面暗褐色。 | 内面柔軟 | 「C」字状の連続爪形文を数段ねじる。 | | |
| 103 | C10 | 深鉢 | | II A 3 | 鐵は、砂粒少量。外面暗褐色、内面暗褐色。 | 内面柔軟 | 内面側に粗い杂质を挟む、器内は無い。 | | |
| 104 | C8-19 | 深鉢 | | II B | 砂粒微量。外面暗褐色、内面暗褐色。 | L R | 縄文地に爪形の痕跡、内面に凹。 | | |
| 105 | B7 | 深鉢 | | II C | 長石少量。内外面暗褐色。 | 内面強めの 剥離痕 | 内面強めの剥離痕、口唇に丸み。 | | |
| 106 | 一括 | 深鉢 | | II D 1 | 石英・長石少量。内外面暗褐色。 | L R | 内面ナデ | 断面に角形の浮き線文、浮き線文下を波状に押さえられる。 | SX3回逆 |
| 107 | 一括 | 深鉢 | | II D 1 | 石英・チャート多量。内外面暗褐色。 | 内面ナデ | 内面強めの剥離痕。 | | |
| 108 | 一括 | 深鉢 | | II D 2 | 石英微量。内外面暗褐色。 | 内面ナデ | 斜筋浮線文。断面は三角形。 | | |
| 109 | C9 | 深鉢 | | II D 2 | 長石微量。内外面暗褐色。 | R L | 内面ナデ | 断面カマボコ形の浮き線文、地文は獨立。 | |
| 110 | C10 | 深鉢 | | II D 2 | 石英少量。内外面暗褐色。 | 内面滑脂压 痕 | 断面カマボコ形の直線的な浮き線文、體を沈殿で覆える。 | | |
| 111 | 一括 | 深鉢 | | II D 2 | 石英・長石少量。内外面暗褐色。 | R L | | 口唇に斜筋浮線文、口縁内は斜筋に折り返し、地文を施す。凹凸に割み。 | |
| 112 | E10-15 | 深鉢 | | II D 2 | 長石少量。外面暗褐色、内面側。 | L R | 内面ナデ | 曲線的な斜筋浮線文。地文は獨立。 | |
| 113 | C8-16 | 深鉢 | | II D 2 | 長石・基質少量。外面暗褐色、内面暗褐色。 | R L | 内面滑脂压 痕 | 素文の浮き線文。地文は純文。 | |
| 114 | E9 | 深鉢 | | II D 2 | 砂粒微量。内外面暗褐色。 | L R | 内面ナデ | 断面三角形の浮き線文、上縁を沈殿で覆する。 | |
| 115 | D8-8 | 深鉢 | | II D 2 | 長石・長石少量。内外面暗褐色。 | R L | 内面滑脂压 痕 | 口唇近くに斜筋浮線文。II様に横状の小突起。 | |
| 116 | D10 | 深鉢 | | II D 2 | チャート・石英少量。 | L R | 内面ナデ | 曲線的な斜筋浮線文。 | |
| 117 | 一括 | 深鉢 | | II D 2 | 長石・石英微量。外面黒褐色、内面暗褐色。 | R L | 内面ナデ | 斜筋浮線文。 | |
| 118 | C9 | 深鉢 | | II D 2 | 石英微量。内外面暗褐色。 | L R | 内面ナデ | II唇外に断面二角形の浮き線文。浮き・口唇に純文。内面に僅かに真珠質。 | |
| 119 | 一括 | 深鉢 | | II D 3 | 鐵等・石英微量。内外面暗褐色。 | L R | | II唇を折り返し段状に、口縁内面に純文。 | |
| 120 | E8 | 深鉢 | | II D 3 | 砂粒微量。内外面暗褐色。 | L R | | 口唇を折り返し段状に、口縁内面に純文。 | |
| 121 | 一括 | 深鉢 | | II D 3 | 石英微量。内外面暗褐色。 | L R | 内面ナデ | 口縁も折り返し段状に、II様内外面に純文、外縁に断面三角形の微隆。 | |
| 122 | C10-28 | 深鉢 | | II D 3 | チャート・石英・長石少量。内外面暗褐色。 | L R | 内面滑脂压 痕 | 口縫は直立気孔に立ち上がり、II唇に折り返し、削み。頭部に較った削み。 | |
| 123 | 一括 | 深鉢 | | II D 3 | 砂粒微量。内外面暗褐色。 | L R | 内面ナデ | II唇を僅かに折り返し、削み。II唇外に淡れた浮き線文。 | |
| 124 | 一括 | 深鉢 | | II D 3 | 長石・石英多量。内外面暗褐色。 | L R | 内面強めに 剥離痕 | II唇を僅かに折り返し、削み。II唇外に淡れた浮き線文。 | |
| 125 | D10-48 | 深鉢 | | II E 1 | 長石・石英少量。内外面暗褐色。 | R | 内面強めに 剥離痕 | 口縫外、口縫内に淡れた浮き線文、口唇にも熱点。 | |

第7表 造構出土陶文土器觀察表2 (No.126~152)

| 文物 番号 | 出土グリ ッド名 ・ 床面番号 | 器 種 | 口徑 法量 (cm) ・ 容積 底径 | 分類 | 胎土・色調 | 特 徴 | | | 備 考 |
|----------|--------------------------|--------|-----------------------------------|-------|------------------------------------|------------|-------------|---|-------------|
| | | | | | | 縦文 等体 | 背面調整 | 文 様 等 | |
| 126 | B7 | 深鉢 | | Ⅱ E 1 | 灰石・素燒少量。内 外青褐色。 | R.L | 内面側頭圧 痕 | 横れた浮雕文に縦文。 | SX3周辺 |
| 127 | C11-2 | 深鉢 | | Ⅱ E 2 | 灰英微量。外延黃褐色。 内面褐色。 | R.L L.R | 内面側頭圧痕 | 口縁を屈曲させ、棒状の添付 文。地文は羽状純文。 | |
| 128 | B9-26 | 深鉢 | | Ⅱ E 2 | 灰石・石英・チャー ト微量。内外青褐色。 | L.R | 内面側頭圧 痕 | 口縁を屈曲させ、棒状の添付 文。口縁内面に巻き込み。 縦文を施す。 | |
| 129 | 一括 | 深鉢 | | Ⅱ E 3 | 石英微量。外延褐色。 内面明褐色。 | R.L | 内面ナデ | 口縁を折り返し、段状にし縦 文を施す。口縁断面は「M」 字形。口縁外に断面三内唇の 輪郭浮雕文。 | |
| 130 | 一括 | 深鉢 | 底径 (B.1) | Ⅱ E 4 | 灰石・砂較微量。内 外青褐色。 | L.R | 内面ナデ | 横れた浮雕文上に連続芦形文。 | |
| 131 | D10 | 深鉢 | 底径 (5.6) | Ⅱ E 5 | 石英少量。外延黃褐色。 内面褐色。 | R.L | 内面ナデ | 多角形の底盤で、腹部には節 の大きい圓文。 | |
| 132 | D9-17 | 深鉢 | | Ⅱ E 5 | 砂粒微量。外延黃褐色。 内面褐色。 | R.L | 内面側頭圧 痕 | 多角形の底盤で、やや鋸の太 い輪郭。 | |
| 133 | C11-14 | 深鉢 | | Ⅱ E 5 | 灰石・石英少量。内 外青褐色。 | I | 内面側頭圧 痕 | 多角形の底盤で腹部にIの熱 帯。 | |
| 134 | D9-1 | 深鉢 | | Ⅲ F | 砂は少量。内外青 褐色。 | | 内面ナデ | 2段の角棒状工具による押し 引き。口唇に刺突。 | |
| 135 | F11-25 | 深鉢 | | Ⅲ A 1 | チャート・泥質片岩 ・石灰少量。外延褐 褐色。内面褐色。 | r | 内面ナデ | 熟成の地文に円形刺突。 | |
| 136 | D11-2 | 深鉢 | | Ⅲ A 1 | 灰石・チャート・砂 較少量。内外青褐色。 | r | 内面ナデ | 佛式工具による添被刺突。 | |
| 137 | 一括 | 深鉢 | | Ⅲ A 3 | 石英微量。内外青褐 褐色。 | | 内面ナデ | 綴やかな波状口縁下に平らな 微隆起に点形刺突。口縁下に 小円孔の網目。口縁内にも爪 形文。 | |
| 138 | 一括 | 深鉢 | | Ⅲ A 4 | 砂粒少量。外延褐色。 内面褐色。 | r | | 口唇を僅かに肥厚させ、口唇 内面に条縞状の網目を施す。 | |
| 139 | D10 | 深鉢 | | Ⅲ A 4 | 砂粒少量。内外青褐 褐色。 | | 内面ナデ | 口縁内面に貫通背光道の網目 を連続的に施す。 | |
| 140 | C10 | 深鉢 | | Ⅲ B 1 | 砂粒少量。外延赤褐色。 内面褐色。 | | 内面ナデ | 内外青褐色。口縫に「S」形 の刺突。 | |
| 141 | E9-1 | 深鉢 | | Ⅲ B 2 | 灰石・灰少量。内 外青褐色。 | r | 内面ナデ | 網目で盛りの堅った熱帯。 | |
| 142 | 一括 | 深鉢 | | Ⅲ C 1 | 灰石・石英多量。内 外青褐色。 | r | 内面ナデ | 口縫にやり、口縫外にジグザ グの網目刺突。口縫に波状の 沈線。沈線間に撲。 | |
| 143 | D9-25 | 深鉢 | | Ⅲ C 1 | 砂は・石英多量。内 外青褐色。 | r | 内面ナデ | 全面に縱位の網目。 | 内外青化 物付着 |
| 144 | D9-23 | 深鉢 | | Ⅲ C 1 | 灰石・青は多量。外 青褐色。内面褐色。 | r | 内面ナデ | 全面縱位の網目。 | |
| 145 | C9-38 | 深鉢 | | Ⅲ C 1 | 砂粒多量。内外青褐 褐色。 | I | 内面ナデ | 航行虎斑を模倣させ。網目を 縱位に施す。 | |
| 146 | 一括 | 深鉢 | | Ⅲ C 1 | 石英微量。内外青褐色。 | I | 内面ナデ | 網目下端で緩やかに屈曲し。 上部に波状の熱帯。 | |
| 147 | D10 | 深鉢 | | Ⅲ C 1 | 灰石・石英・砂粒少 量。内外青褐色。 | | 内面ナデ | 網目に沈線1条を模倣させ。 地文は縱位の網目。 | |
| 148 | D10-42 | 深鉢 | | Ⅲ C 2 | 角閃石・砂粒少量。 内外青褐色。 | | 内面ナデ | 口縫下に連續的にジグザ グの刺突。 | |
| 149 | E9-2 | 深鉢 | | Ⅲ C 2 | 灰石・石英・砂粒多 量。内外青褐色。 | | 内面ナデ・ 柔度 | 口縫を「く」字状に外彎させ。 口縫下に「D」字状の刺突。 | |
| 150 | D10-48 | 深鉢 | | Ⅲ C 3 | 砂粒・チャート・長 石英多量。内外青褐 褐色。 | | 内面ナデ | 口縫外に沿み、網目地文は柔 軟。 | |
| 151 | H11-7 | 深鉢 | | Ⅲ C 3 | 石英・灰石・砂粒多 量。内外青褐色。 | | 内面ナデ | 口縫外に細い沈線2本。網目 地文は柔軟。 | |
| 152 | E10-17 | 深鉢 | | Ⅲ C 3 | 砂粒少量。内外青 褐色。 | | 内面ナデ | 網目地文は柔軟の柔軟に浅 い沈線。 | |

第8表 造構外出土縄文土器観察表3 (No.153-176)

| 造物番号 | 遺物名一様上番号 | 器種 | 法量(m) | 口荷 器高 側面 厚さ | 分類 | 胎土・色調 | 特徴 | | | 備考 |
|------|---------------------------|----|---------|----------------------|----------------------------------|---------------|------------------------|---|----|----|
| | | | | | | | 純火 胚体 | 器皿箇数 | 文様 | |
| 153 | C9-24 | 深鉢 | 底径(7.1) | 目 C 3 | 石英多量。外面部褐色。 内面部暗褐色。 | 外面部灰 内面部ナダ | 上口部の灰褐色。底部下半に粗 い条状。 | | | |
| 154 | 一括 | 深鉢 | | 目 D | 石英多量。外面部褐色。 内面部暗褐色。 | L R | 内面部ナダ | 連續状浮雕文。地文は筋の太 い網文。 | | |
| 155 | C8 | 深鉢 | | 重 D | 石英多量。外面部褐色。 内面部暗褐色。 | L R | 内面部ナダ | 連續状浮雕文。地文は網文。 | | |
| 156 | C8-21 | 深鉢 | | 重 D | 石英多量。外面部褐色。 内面部暗褐色。 | L R | 内面部ナダ | 連續状浮雕文。地文は網文。 | | |
| 157 | C8 | 深鉢 | | 重 D | 石英多量。外面部褐色。 内面部暗褐色。 | | 内面部ナダ | 連續状浮雕文。 | | |
| 158 | D10-32 | 深鉢 | | 目 E 1 | 石英多量。外面部褐色。 内面部暗褐色。 | | 内面部ナダ | 口縁に小円形の凹痕を数設施 す。 | | |
| 159 | G10-4 | 深鉢 | | 目 E 2 | 石英・从石英。外 面部褐色、内面部暗褐色。 | L R | 内面部ナダ | 網文地文はやや細の太い網文。 | | |
| 160 | C9-50 | 深鉢 | | 目 A 1 | チャート・石英・長 石少量。外面部褐色。 | L R | 内面部ナダ | 内寄り灰褐色に立ち上がり、山根 に2本の沈窓。地文地に円形 模様。口付にも網文。 | | |
| 161 | C9-63 | 深鉢 | | 目 A 1 | 角閃石・長石・石英 少量。外面部暗褐色。 | | 内面部ナダ | 大きい凹窓に棒状工具による刻 み。網文は圓形刻紋。 | | |
| 162 | 一括 | 深鉢 | | 目 A 2 | 砂粒少量。外面部褐色。 内面部暗褐色。 | | 外面部灰 内面部ナダ | 口付は太い平行状線。底部は 曲線的な沈窓文。 | | |
| 163 | F11-10 | 深鉢 | | 目 A 2 | 素面・泥質片岩・砂 粒少量。内面部暗褐色。 | | 外面部灰 内面部ナダ | 地文的な沈窓文。 | | |
| 164 | D10-46 | 深鉢 | | 目 A 2 | 素面・石英・砂粒多量。 外面部褐色。内面部 暗褐色。 | | 内面部灰 内面部ナダ | 大きい凹窓による蛇行曲線と区 別文。 | | |
| 165 | E10-9 | 深鉢 | | 目 A 2 | 角閃石・石英少量。 内面部暗褐色。 | | 外面部灰 内面部ナダ | 条状窓に2本沈窓。沈窓間は 網目。 | | |
| 166 | 一括 | 深鉢 | | 目 A 2 | 石英砂粒多量。外 面部暗褐色。内面部 暗褐色。 | | 内面部ナダ | 山根突起を呈する口縁。太い 沈窓文。 | | |
| 167 | C9-35-36 | 深鉢 | | 目 A 3 | 石英・砂粒少量。内 外部暗褐色。 | | 内面部灰 内面部網文 | キヤリバー形を呈し、口縁を 大きく拡大し、沈窓による区 別文。また大振りの棒状の貼 付文。底部は沈窓による曲線 的な区別文。内面部には条痕及 び浮雕網文に円形刻紋。 | | |
| 168 | F11-30 | 深鉢 | | 目 A 3 | 砂粒多量。外面部褐色。 内面部暗褐色。 | II群 網文 | 内面部ナダ | 大きい凹窓による区別文。 | | |
| 169 | E10 | 鉢 | | 目 A 4 | 角閃石・砂粒微量。 内面部暗褐色。 | R L | 内外面部 暗褐色 | II群を沈窓により区別を行 うとを施す。II群断面は三角 形を呈する。 | | |
| 170 | 一括 | 鉢 | | 目 A 4 | 石英多量。内面部 暗褐色。 | L R | 外面部 内面部ナダ | 台形網文。複数の沈窓により II群断面を區別し、II群に網か る網文。底部は沈窓による区 別文。 | | |
| 171 | C9-19 | 深鉢 | | 目 A 5 | 石英・長石少量。内 外部暗褐色。 | L R | 内面部ナダ | 口縁は立寄り灰褐色に立ち上がり、 口付・腹部に沈窓を複数させ、 沈窓間は直角網文。口縁には 貝殻骨先端部の干縫。 | | |
| 172 | F10-6- 14-42-47 -49 | 深鉢 | | 目 B 1 | 角閃石・素面・砂粒 微量。内面部暗褐色。 | L R | 内面部ナダ | キヤリバー形で、口縁は波状 を呈し、網文地に横位の波状 線。網文は沈窓による複数ク ラウ内に網消溝文。 | | |
| 173 | F10-15 | 深鉢 | | 目 B 2 | チャート・長石少量。 内面部暗褐色。 | L R | 内面部ナダ | 波状1群で脚部は2本沈窓によ る網消溝文。口付にも網文。 | | |
| 174 | G11-13 | 深鉢 | | 目 B 3 | 石英・長石多量。内 外部暗褐色。 | R L | 内面部ナダ | 横位の「J」字状の網消溝文。 | | |
| 175 | G11-17 | 深鉢 | | 目 B 3 | 石英多量。内面部暗 褐色。 | R L | 内面部ナダ | 横位の沈窓による巻線的な地 面網文。 | | |
| 176 | H11-3 | 深鉢 | | 目 B 5 | 長石・砂粒少量。内 外部暗褐色。 | R L | | 地文的な網消溝文。 | | |

第9表 遺構出土縄文土器観察表4 (No.177~200)

| 遺物 番号 | 遺構名 採上番号 | 器種 | 法量 (cm) | 口径 器高 側径 底径 | 分類 | 底七・色調 | 特徴 | | | 備考 |
|----------|-------------|----|------------|----------------------|--------|---------------------------|----------|------------|--|-------|
| | | | | | | | 縄文 原体 | 齒面調整 | 文様 | |
| 177 | C8 | 深鉢 | | | IV B 3 | 砂粒少多。内外面黃褐色。 | 貝紋 縄文 | 内面垂直 | 曲線的な唇縄彫文。 | |
| 178 | D10-39 | 浅鉢 | | | IV C 1 | 灰母・長石・石英少量。外面部褐色。内面部褐色。 | R L | 内外面磨き | 2本沈線による唇縄彫文。内面は僅かに突出し、唇状になる。 | |
| 179 | 一括 | 鉢 | | | IV C 1 | 長石少量。内外面暗褐色。 | R L | 内面ナゲ | 2本沈線による唇縄彫文。口唇外にも縄文。 | |
| 180 | F11-28 | 深鉢 | | | IV C 1 | 砂粒多量。内外面褐色。 | I | 内面ナゲ | 2本沈線による唇縄彫文。LI唇外に縄文。 | |
| 181 | 一括 | 鉢 | | | IV C 1 | 角閃石・チャート微量。外面部褐色。内面部褐色。 | | 内面ナゲ | 直線気味に立ち上がり、腹部無文帯は發展せず。沈線を残し、口唇には直線的な押沈線及び円形刺突。 | |
| 182 | 一括 | 鉢 | | | IV C 1 | 石英・チャート多量。内外面褐色。 | R L | 内面ナゲ | 2本沈線による唇縄彫文。 | |
| 183 | F11-13 | 深鉢 | | | IV C 1 | 長石・石英・砂粒少量。内外面褐色。 | R L | 内面ナゲ | 2本沈線による唇縄彫文。 | |
| 184 | D9-28 | 深鉢 | | | IV C 1 | 雲母・砂粒微量。外面部褐色。内面部褐色。 | R L | 外面部磨き、内面ナゲ | 2本沈線による唇縄彫文。 | |
| 185 | C10 | 鉢 | | | IV C 1 | 長石・石英・角閃石微量。外面部褐色。内面部褐色。 | R L | 外面部磨き、内面ナゲ | 2本沈線による入り組み唇縄彫文。内面に段をする。 | |
| 186 | D10 | 鉢 | | | IV C 1 | 石英・長石少量。内面部褐色。外面部褐色。 | R L | 内外面磨き | 2本沈線による唇縄彫文。馬頭部分に巻貝による刺突。 | |
| 187 | F10-46 | 鉢 | | | IV C 2 | 角閃石少量。内外面暗褐色。 | R L | 内面磨き | 曲線的な唇の広い凹溝帶の内側に沈線を施す。 | |
| 188 | C9-31 | 深鉢 | | | IV C 3 | 砂粒多量。外面部褐色。内面部褐色。 | R L | 内面垂直 | 山形突起に口縁部移行部を設け、沈線による区画内に縄文を施す。腹部に「O」字状の区画文。 | 変化物付番 |
| 189 | E10-23 | 深鉢 | | | IV C 3 | 角閃石・チャート・砂粒多量。内外面褐色。 | R L | 内面ナゲ | 波状口縁を呈し、口唇を肥厚させ。沈線及び縄文を施す。口唇外にも沈線。 | |
| 190 | F10-41 | 深鉢 | | | IV C 3 | 砂粒微量。外面部褐色。内面部褐色。 | R L | 内面ナゲ | 波状口縁の突起部分で鉢巻き状に沈線が施す。 | |
| 191 | D10 | 深鉢 | | | IV C 3 | 石英・チャート・砂粒多量。内外面黄褐色。 | R L | 内面ナゲ | 山形突起の進退部分で口唇を肥厚させ、内側に沈線1条。外側に縄文及びRの沈線。 | |
| 192 | F11-25 | 浅鉢 | | | IV C 4 | 石英・長石・砂粒多量。内外面褐色。 | | 内面ナゲ | 口唇をやや肥厚し、沈線及び網目。網目は沈縄文。 | |
| 193 | D9 | 深鉢 | | | IV C 4 | 長石・石英多量。内面部褐色。 | | 内面ナゲ | 口唇は直線気味に立ち上がり、口唇外に別々、足の下に沈線1条。 | |
| 194 | F9-11 | 深鉢 | 底径 (18.4) | | IV C 5 | 暗褐色。内外面黄褐色。 | | 内面ナゲ | 底部脇が突出し、腹部下手に沈縄文。 | |
| 195 | 一括 | 深鉢 | 底径 (7.4) | | IV C 5 | 石英・長石少量。内面部褐色。 | | 内面ナゲ | 底部脇が突出する半島で腹部下手に沈縄文。 | |
| 196 | B9-20 | 深鉢 | | | IV D 1 | チャート・石英・砂粒微量。外面部褐色。内面部褐色。 | | 内面ナゲ | 11唇を肥厚させRの網目。網目は沈縄文。 | |
| 197 | B9-10 | 深鉢 | | | IV D 1 | 長石・砂粒少量。外面部褐色。内面部褐色。 | | 内外面垂直 | 口唇を肥厚させ、沈縄2本とRの網状沈線を施す。網目は無又否を形成。 | |
| 198 | C10-15 | 深鉢 | | | IV D 2 | チャート・石英・長石・角閃石少量。内外面褐色。 | | 内外面垂直 | 口唇内側を肥厚させRの網状沈線を施す。11唇部には棒状工具による刺突。 | |
| 199 | G10-11 | 深鉢 | | | IV D 2 | 石英・チャート少量。外面部褐色。内面部褐色。 | L R | 内面ナゲ | 底部内側を呈し、沈線による区画文。沈縄内は縦の細い縄文を方向を変えて施す。 | |
| 200 | C9-28 | 深鉢 | | | IV D 4 | 石英・チャート少量。外面部褐色。内面部褐色。 | | 内外面垂直 | 腹部上半に沈縄文。下半は各異。 | |

第10表 遺構外出土縄文土器観察表5 (No.201~224)

| 遺物 番号 | 出土グリ ッド名- 採上番号 | 器種 | 法量 (cm) | 口縁 厚さ 測定値 | 分類 | 胎土・色調 | 特 徴 | | | 備考 |
|----------|----------------------|-----------|--------------|-----------------|--------------------------------------|----------------|-------------------------------|--------------------------------------|-----------------|----|
| | | | | | | | 縄文 軸体 | 内面 面質板 | 文 様 他 | |
| 201 | 一柄 | 深鉢 | | Ⅳ E 1 | 砂粒・石英多量。内 外面褐色。 | R L | 内面ナデ | 幅広い比較による磨痕記文。 口唇に跡つき状に落とす純文を施す。 | 赤部 | |
| 202 | F10-18 | 深鉢 | | Ⅳ E 1 | 砂粒・石英多量。外 外面赤褐色。内面褐色。 | | 内面ナデ | 波状口縁に幅広い比較による 入り織文。花織の軸体を円形網状。 | | |
| 203 | D9 | 鉢 | | Ⅳ E 1 | 角閃石少量。内外面 褐色。 | | 内面ナデ | 口縁内面を僅かに肥厚させ、 内縁内外面に浅い沈線。 | 焼成直円孔 | |
| 204 | B9-30 | 深鉢 | | Ⅳ E 3 | 石英・チャート・砂 粒多量。内外面赤褐色。 | | 内面ナデ | 内凹気味の丸味のある口縁で 外縁に束ね沈線3本。 | | |
| 205 | B9-7 | 深鉢 | | Ⅳ E 4 | 長石多量。右尖峰量。 内外面赤褐色。 | | 内面ナデ | 口唇を肥厚させ、沈線3本を 施す。頂部は無文部となる。 | | |
| 206 | D9-18 | 深鉢 | | Ⅳ F 1 | 長石・石英少量。内 外面黒褐色。 | R L | 内面黒墨 | 口縁に3本の沈線による帶織 文。頭部は大きくなり織文 部。 | 沈線内赤部、 焼成直円孔 | |
| 207 | C4-2 | 鉢 | | Ⅳ F 1 | 石英・長石微量。内 外面黑色。 | R ? 付加 ? | 内面ナデ | 内凹気味の口縁に比較による 垂織文。 | | |
| 208 | C9-30 | 鉢 | | Ⅳ F 2 | 砂粒微量。外縁赤褐色。 内縁黒褐色。 | | 内面ナデ | 内凹気味の口縁に円滑状の沈 線。 | | |
| 209 | C9 | 鉢 | | Ⅳ C | 炭母・チャート・石 英微量。外縫赤褐色。 内縫黒褐色。 | | 内面ナデ | 内凹気味の口縁。 | | |
| 210 | C7-2 | 縦製 深鉢 | | Ⅳ A | 石英・紫母少量。外 面暗褐色。内縫黒褐色。 | | 内面ナデ | 内凹気味の口唇で口唇に丸味 を持つ。 | | |
| 211 | C9-17 | 縦製 深鉢 | | Ⅳ B | 長石・角閃石少量。 外縫赤褐色。内縫黒 褐色。 | | 内面赤板 | 直線的に立ち上がり、口唇は 肥厚せず、棒状工具による刻 み。 | | |
| 212 | D10 | 縦製 深鉢 | | Ⅳ B | 雲母・チャート微量。 内縫黒褐色。 | | 内面ナデ | 直立気味に立ち上がり、口唇 を棒状工具による刻み。 | | |
| 213 | 一柄 | 縦製 深鉢 | | Ⅳ B | 石英・砂粒多量。外 面暗褐色。内縫褐色。 | | 内面赤板 | 直立気味に立ち上がり、口唇 にRの短沈線。 | | |
| 214 | 一柄 | 縦製 深鉢 | | Ⅳ B | 石英多量。外縫褐色。 | 外縫赤板、 内面ナデ | 口唇を僅かに肥厚させ、Rの 短沈線。 | | | |
| 215 | G8 | 縦製 深鉢 | | Ⅳ B | 長石・石英多量。内 外縫暗褐色。 | 外縫赤板、 内面ナデ | 直線的に立ち上がり、口唇に Rの短沈線。 | | | |
| 216 | F11-9 | 縦製 深鉢 | | N.C.? | 砂粒多量。内外縫暗 褐色。 | 内面ナデ | 口唇に「V」字状の崩みを達 成的に施す。 | | | |
| 217 | D9-10 | 深鉢 | | N | 砂粒少量。内外縫青 褐色。 | 内面青ナデ | 口唇内を僅かに突出させ、口 唇外に崩み。 | | | |
| 218 | B10 | 深鉢 底部 | 底径 5.5 | Ⅳ A | 砂粒多量。外縫褐色。 内縫暗褐色。 | 内面青ナデ | 上げ底の底部で網目状の縫で 沈線状にくびれる。 | | | |
| 219 | F10-4 | 深鉢 底部 | 底径 (12.2) | Ⅳ B | 石英・チャート・砂 粒多量。外縫明褐色。 内縫暗褐色。 | 内面ナデ | 高台状の底部で網目状が反る。 | | | |
| 220 | F10-3 | 深鉢 底部 | 底径 (8.2) | Ⅳ B | 角閃石・紫母・長石 少量。内外縫赤褐色。 | 内面青ナデ | 上げ底の底部で網目状が反く。 | | | |
| 221 | C9-15 | 注口十 字柄 | | N | 紫母・石英少量。内 外縫褐色。 | 内面青ナデ | 内板状の突出部に把手状の點 付文を付し、円孔を穿つ。 | | | |
| 222 | B6-7 | 把手 | | N | チャート・砂粒多量。 2~5mmの砂粒多量。 内外縫暗褐色。 | 内面青ナデ | 大振りの口縁上端に付く横状 把手。長い沈線を施す。 | | | |
| 223 | B8-23 | 吏 | | V A 1 | 長石・石英少量。内 外縫赤褐色。 | 内面青ナデ | 口唇下に崩み口突部。口唇に も崩み。 | | | |
| 224 | C10-27 | 吏 | | V A 1 | 長石・石英少量。内 外縫赤褐色。 | 内面青ナデ | 口唇下に崩み口突部。口唇に も崩み。 | | | |

第11表 遺構出土器調査表6 (No.225~237)

| 遺物番号 | 出土グリッド名— 探土番号 | 器種 | 法盤 (cm) | 口径 盤高 胸深 底深 | 分類 | 胎土・色調 | 特徴 | | | 備考 |
|------|------------------|----|------------|----------------------|---------------------------|----------------------|---|------|-----|----|
| | | | | | | | 模文 原体 | 器面調査 | 文様像 | |
| 225 | B7 | 甕 | | V A 1 | 長石・石英・黄丹少量。外腹明褐色。内腹暗褐色。 | 内外面稍いナゲ | 口唇に割み目欠乏。口唇にも刻み。 | | | |
| 226 | B8-9 | 甕 | | V A 1 | 長石・石英微量。外腹暗茶褐色。内腹黒褐色。 | 内外面ナゲ | 口唇下に割み目欠乏。口唇にも刻み。 | | | |
| 227 | 一越 | 甕 | | V A 1 | 泥質片岩・石英・砂粒少量。外腹暗褐色。内腹黒褐色。 | 内外面ナゲ | 口唇部に割み目欠乏。口唇にも刻み。 | | | |
| 228 | H8-1 | 甕 | | V A 2 | 石英微量。外腹暗褐色。内腹暗褐色。 | 内外面ナゲ | 口唇に割み目欠乏。 | | | |
| 229 | 一越 | 先 | | V A 2 | 石英・砂粒微量。内腹黒褐色。 | 内外面ナゲ | 口唇にも割み目欠乏。口唇にも刻み。 | | | |
| 230 | F10-11 | 甕 | | V A 3 | 泥質片岩・砂粒多量。内外面褐色。 | 内外面ナゲ | 口唇下に割み目欠乏。 | | | |
| 231 | C9-63 | 甕 | | V A 4 | 石英・長石・砂粒多量。外腹暗褐色。暗褐色。 | 内外面条板 | 口唇より僅かに下に割み目欠乏を付し、口唇にも刻み。 | | | |
| 232 | D10-41 | 甕 | | V A 4 | 石英・砂粒少量。外腹黃褐色。内腹褐色。 | 内外面条實 | 口唇下に割み目欠乏。口唇にも刻み。内面は沈黙灰。 | | | |
| 233 | H11-20 | 浅鉢 | | V B 1 | 長石微量。外腹暗褐色。内腹黒褐色。 | 内外面ナゲ | 波状の縁を呈し、口内に沈黙灰。外腹筋曲部上端にも波状1条。 | | | |
| 234 | C8-48-48 | 浅鉢 | II径(28.0) | V B 2 | 石英・長石多量。内腹暗褐色。 | 内外面磨き | 口唇は直線的にやや内凹し、唇肉薄を突出させる。 | | | |
| 235 | F10-32 | 浅鉢 | | V B 3 | 長石・石英少量。内腹暗褐色。 | 内外面磨き | 口唇が直線尖端に立ち上がり、口唇部が「く」字状に外傾する。 | | | |
| 236 | F10-7 | 浅鉢 | | V B 3 | 石英・長石少量。外腹暗褐色。内腹黒褐色。 | 外腹磨き・ 内腹磨き・ 条痕 | 波状を呈する口縁は直立気味に立ち上がり、口唇は「く」字状に外傾する。腹部との接合部が1条通過。 | | | |
| 237 | D10-38 | 浅鉢 | | V B 4 | 石英・雲母少量。内腹暗褐色。 | 内外面磨き | 制筋の制筋部が突出状になり、口唇を「く」字状に外反させる。 | | | |

第12表 遺構外出土弥生土器・土師器観察表1 (No.238~252)

| 遺物番号 | 出土グリッド名 採上番号 | 器種 | 法量 (cm) | 口径 器高 側径 底径 | 分類 | 胎土・色調 | 特徴 | | 備考 |
|------|-----------------|----|------------|----------------------|----|--------------------------------------|----------------------|--------------------------------|-------|
| | | | | | | | 背面調整 | 文様・他 | |
| 238 | CB-1 | 碗 | 口径 (17.8) | | VI | 良石。石英多量。内 外青褐色。 | 背面微凹。内面ナ ゲ | 口唇に背面三角の粘土帯を突 起状に貼付する。 | |
| 239 | C9-10 | 盤 | | | VI | 砂粒少量。外側明赤 褐色。内側暗褐色。 | 内外面ナゲ | 口縁部分に凸凹状の細縫を施 す。 | |
| 240 | CA-17 | 盘 | | | VI | 石英。砂粒少量。内 外青褐色。 | 内外面ナゲ | 口縁を外側に折り返す。 | |
| 241 | E10-14 | 碗 | 口径 (14.4) | | VI | 石英。砂粒多量。外 面青色。内面赤褐色。 | 外面部微凹。ナゲ。 内面ハラケズリ | 口縁が「く」字状に外折する。 | |
| 242 | C8-8 | 盘 | | | VI | 石英多量。内外青褐色。 | 内外面ヨコナゲ | 口縁が直角に外反気味に立ち 上がり、口唇は丸味を持つ。 | |
| 243 | D6-11 | 碗 | | | VI | 微砂粒多量。外側赤 褐色。内面青褐色。 | 内外面ナゲ | 断端が強く崩る。 | |
| 244 | B7-6 | 盘 | | | VI | 砂粒微量。内外青褐色。 | 内外面ナゲ | 頗る比較的粘土質を貼付し、 組み方に押さえられる。 | |
| 245 | C10-16 | 盘 | | | VI | 砂粒少量。外側青褐色。内 面青褐色。 | 外面部ナゲ。内面粗 いナゲ | 直立化。粘土帶の貼付に削み を施す。 | |
| 246 | C9-46 | 盘 | | | VI | 砂粒少量。外側黒褐色。内 面青褐色。 | 外面部ナゲ。内面粗 いナゲ | 7~8単位の横縫波状文。 | |
| 247 | E10 | 盘 | | | VI | 精造。内外青褐色。 | 内外面ナゲ | 縦筋の側で、開き気味に立ち 上がり、斜面を施す。 | |
| 248 | E10-20 | 碗 | 底径 5.2 | | VI | 2~5mmの砂粒。チ ヤート多量。外側暗 褐色。内側黒褐色。 | 内外面ハラ ケ | 半球上に供奉は延々かに覆いて 立ち上がる。 | |
| 249 | G10 | 碗 | 底径 (6.0) | | VI | 砂粒多量。外側暗褐色。内 面青褐色。 | 内外面ナゲ | 半球の底部で体部は開いて立 ち上がる。 | |
| 250 | D10-43 | 盘 | 底径 4.5 | | VI | 破碎小塊少量。外側 褐色。内側暗褐色。 | 内外面ナゲ | 半球で底部が突出する。 | |
| 251 | BR-7 | 钵 | 底径 (6.0) | | VI | 石英多量。外側赤褐色。内 面暗褐色。 | 外面部ハラケズリ。 内面粗いハケ | 上部の底部で、体部は開いて立 ち上がる。 | SX2層邊 |
| 252 | A7-1 | 高杯 | | | VI | 砂粒。石英多量。外 面赤褐色。内面灰黑色。 | 内外面ナゲ | 底辺の脚部で柱状を呈する。 | |

(3) 石器 (第48~52回No.253~350)

石器は大部分が縄文時代に含まれる。遺構外出土石器は石鏃、石匙、石刀、剝片類、石斧、石錘、磨石、敲石、凹石である。以下、器種毎に概略を記す。また、石鏃、石錘については遺構内出土のものも含め、分類を行った。

1) 石器の分類

石鏃 (第48回No.253~264)

石鏃は遺構内より15点、遺構外より13点、合計28点が出土している。形態等により5群に大きく分け、石鏃の大部分が含まれるⅠ群については更に細分を行った。

Ⅰ群 四基鏃で小型品のもので多く占められる。以下の6類に分類を行った。

A 1類 - 刀縁が長く直線的で刃角が鋭く、中型のもの (13, 253~255)。

A 2類 - A 1と同様の形態で、大型のもの (14, 256)。

B類 - A類に較べ刃縁が無いもの (15)。

C類 - 刀縁がほぼ直線的で基部抉りが浅く、小型のもの (78, 86, 257)。

D類 - 基部が僅かに内弯気味で脚が反り、基部抉りがやや浅く、中型のもの (16, 74, 258)。

E類 - 刀縁がやや外弯気味で刃角もやや鈍いもの (79, 259)。

F類 - E類に較べ刃縁が更に外弯し、刃角も鋭いもの (80, 260)。

Ⅱ群 凹基の大型の鏃で刃縁がややくびれ、基部抉りは深いもの (75, 53, 261, 262)。

Ⅲ群 凹基鏃で刃縁が大きく外弯し、刃角が鈍く、脚は内弯するもので、やや歛形縁に似るもの (263)。

Ⅳ群 平基鏃のもので、大きさにより以下の2類に分類を行った。

A類 - 刀縁が直線的なもので、大型のもの (81)。

B類 - A類と同様の形態で、中型のもの (264)。

Ⅴ群 変形鏃に含まれるもの

で、以下の3類に分類した。

第13表 石鏃分類別遺構内出土一覧表

| 分類 遺構名 | I | | | | | | II | | | III | | | IV | | | V | | | 備考 其伴土器 |
|-----------|----|----|---|---|---|---|----|---|---|-----|---|---|----|---|---|---|---|----|------------|
| | A1 | A2 | B | C | D | E | F | A | B | A | B | C | A | B | C | A | B | C | |
| S+4 | 1 | 1 | 1 | | 1 | | | | | | | | | | | | | 4 | 冠毛式 |
| 上野谷西場 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 松ノ木式 |
| S X 5 | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | 1 | 齒毛式 |
| S X 8 | | | | | | | | 1 | | 1 | | | | | | | | 2 | 巴彌文 |
| S K 9 | | | | 1 | | | 1 | | 1 | | | | 1 | 1 | 1 | | | 6 | 深崎之口式 |
| S K 11 | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | 1 | 深崎之口式 |
| 遺構外 | 3 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 2 | 1 | | 1 | | | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 13 | |
| 計 | 4 | 2 | 1 | 2 | 3 | 2 | 2 | 4 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 2 | 28 | |

石匙（第48図No.265）

265の1点のみである。横長の刃部を持ち、刃部は幅が広く、左右非対称で右側部は欠損するものより長くなるものと思われる。小振りな摘みは上端のやや左寄りに作出されている。全体の側縁は表裏面から交互剥離を行い銳く作出し、極状剥離が見られ、中央部分が厚くなる。刃縁も細かな剥離調整が施され、残存長8.1cmを測り、大型の分類に含まれよう。石質は緑色のチャート製である。

刃器（第48図No.266）

横長のもので長さ10.5cmを測り、表裏面共に主要剥離痕を残し、刃縁も表裏面から2次調整を施している。サスカイト製である。

剝片類（第48図No.267-271）

268から271はスクレイパーである。主として綫長剝片を利用する。271は刀器の可能性がある。267, 272は使用痕の認められない剝片である。石質は黒曜石、チャート、サスカイトのものである。

石斧（第49図No.273-275）

石斧は3点と少ない。その中で打製石斧は274の大型のもので、分錐形を呈している。緑色片岩製である。273, 275は磨製石斧で273は楔状の小型のものである。基部、側縁に敲打痕が見られる。頁岩製か。275は刃部のみ研磨痕が残る。基部は欠損している。緑色片岩製である。

石錘（第49-51図No.276-337）

石錘は遺構内21点、遺構外62点、合計83点出土しており、石器に占める割合は一番高い。遺構内からの出土は少なく、纏まって出土せず遺跡全体に他の隣、遺物等に混在して出土している。

石錘の分類は、先ず抉入部を短軸側縁部か長軸先端部に作出するかでⅠ、Ⅱ群に大きく分けた。更に素材の礫の形状により円形A、楕円形B、長楕円形Cのアルファベットで分類し、また重量により10g以下の微小のものを1、10-29gの小型のものを2、30-59gの中型を3、60-100gの大型のものを4とした。形状A-C類と重さ1-4類の組み合わせで分類基準を設けた。中には100gを超す特大のものも見られ、これをⅢ群とした。遺構内出土石錘も含めて分類を行っている。

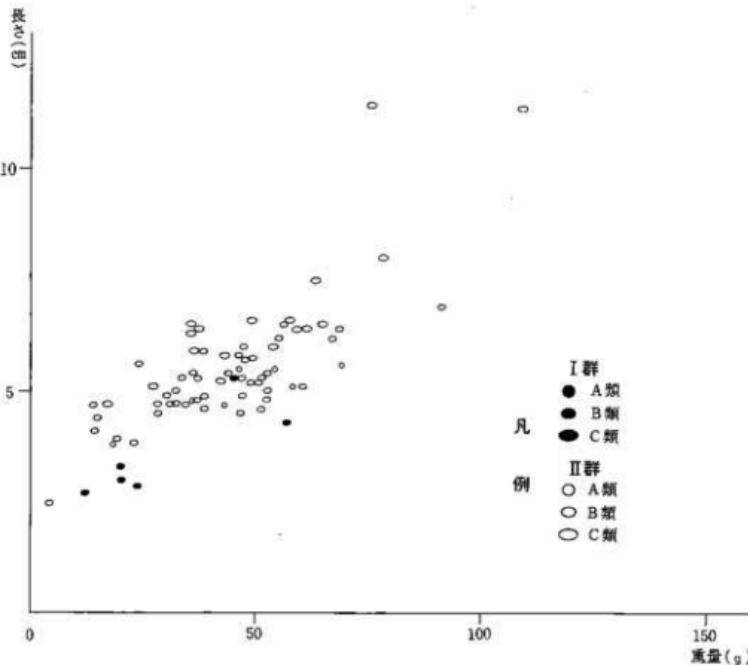
Ⅰ群 短軸側縁に抉入部を有するもの。

B 2類-1-5

B 3類-6, 62

第14表 石錘 I・II群分類一覧表

| 形状分類 重量分類 | I 群 | | | II 群 | | | 計 |
|--------------|--------|---------|------|--------|---------|------|----|
| | A 円 | B 扁円 | C長楕円 | A 円 | B 扁円 | C長楕円 | |
| 1 (10g以下) | | | | | 1 | | 1 |
| 2 (10~25g) | | 5 | | 1 | 8 | 2 | 16 |
| 3 (30~55g) | | 2 | | 6 | 30 | 11 | 40 |
| 4 (60~100g) | | | | 1 | 4 | 5 | 10 |
| 凡 例 | 7 | | | 8 | 43 | 18 | |
| 合 計 | 7 | | | 69 | | | 76 |



第15表 石錘 I・II群分類別分布表

II群 長軸先端部に挿入部を有するもの。

A 2類-276

A 3類-63, 277-281

A 4類-282

B 1類-283

B 2類-55, 284-290

B 3類-49, 56, 57, 64-67, 291-313

B 4類-314-317

C 2類-318, 319

C 3類-50, 320-329

C 4類-69, 87, 330-332

III群 特大のもの。

B類-336, 337

C類-335

磨石（第52図No.338-342）

磨石は自然の円礫を素材とし、全体に擦痕が認められるものが多い。339は大型のもので部分に折損しており、また341は敲打痕も認められる。石質は泥質片岩と砂岩製のものである。重さは100gを超すもので占められる。

敲石（第52図No.343-349）

敲石は長楕円形のものと楕円形のものに形状を分けることができる。共に長軸両端に敲打痕が認められる。348は大型のもので大きな敲打痕を残している。349は扁平な形状で打製石斧の可能性もある。石質は種々見られ、泥質片岩、緑色片岩、砂岩製で周辺域で採集できる石材を素材としている。

凹石（第52図No.350）

350は緑色片岩製で、表裏面共に中央部に敲打痕が認められ窪む。また両端には敲打痕が認められる。

2) 石器の所属時期

石器については所属時期を明確にできる器種は少なく、石匙、274の大型の打製石斧は縄文前期、刃器は後期から晩期の可能性が強いものである。磨石、敲石、凹石については不明である。石鎌、石錐については形態にバラエティーが見られ、形態の相違は時期差による可能性が

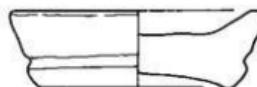
あり、各分類により時期を検討してみたい。

石鏃は大きく5群に分類で、遺構内出土のものは12点で、第14表の通り、共伴土器からして、前期に含まれるものはⅠ群C, E, F類、Ⅳ群A類、V群A, B類である。また前期の可能性の強いのものはⅢ群、Ⅳ群B類である。後期前半に含まれると考えられるものはⅠ群A, B類、V群C類、後期後半の可能性の強いものはⅠ群D類、Ⅱ群である。

石錐はⅠ群が1点を除いてC 4グリッド遺物集中地点からの出土であり、30g以下のものが多く、形状はB類椎円形のもので占められる。出土層位、及び近隣の長徳寺遺跡からは押型文土器に伴って出土していることからして、本群は早期に所属するものと考えられる。Ⅱ群はB 3類に含まれる割合が高く30点、次いでC 3類の11点である。30~59gのものがA 3類を含め48点となり全体の61%を占めている。形状は椎円形のものが多く66%を占める。遺構との共伴関係を見てみると、C 4類がB 9 P 1及びS X 6より出土しており縄文時代前期の可能性があるものの、A 3, B 2, B 3, C 3類が土器捨て場、S X 5, S X 6より出土しており、縄文時代後期の所産と考えられるものであり、Ⅱ群の大半が後期前半に含まれる可能性が高い。Ⅲ群については遺構外出土のもので占められる為、時期は特定できない。

(4) 土製品 (第47図No.351)

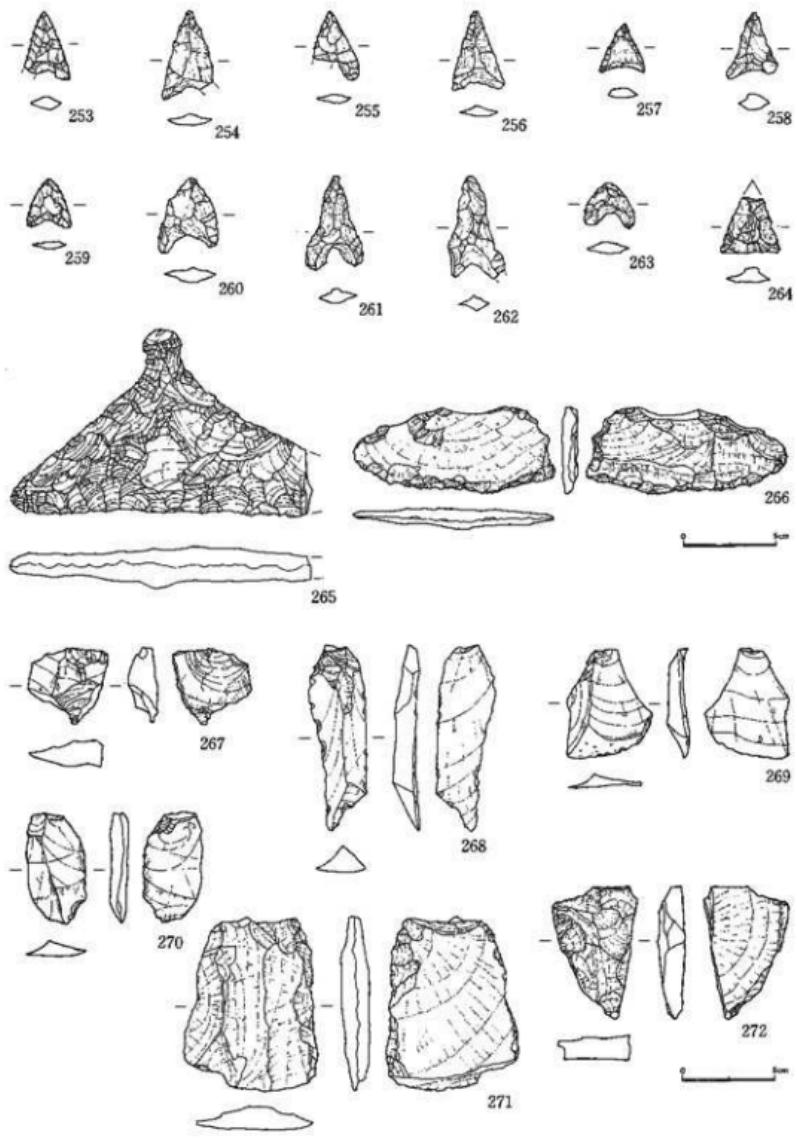
351はミニチュア土器でE 10グリッドより出土した。口径4.6cm、器高1.4cm、底径3.4cmの皿状のもので、底部は宿毛式土器に見られるような上げ底を呈しており、底部脇が沈線状にくびれるものである。底部以外に赤彩が施されている。胎土には泥質片岩、角閃石、砂粒を少量含み、色調は外面が褐色、内面が黒褐色を呈している。類例は見られないものの、底部の形態からして、縄文時代後期前半に含まれるものと考えられる。



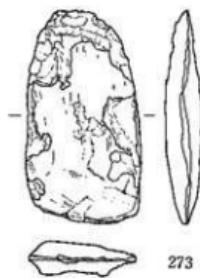
351



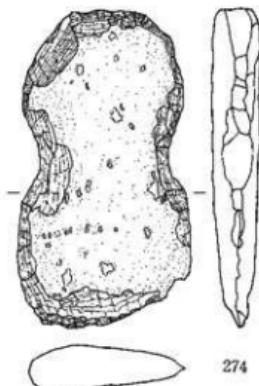
第47図 遺構外出土遺物(9)



第48図 遺構外出土遺物00



273



274



275



276



277



278



279



280



281



282



283



284



285



286



287



288

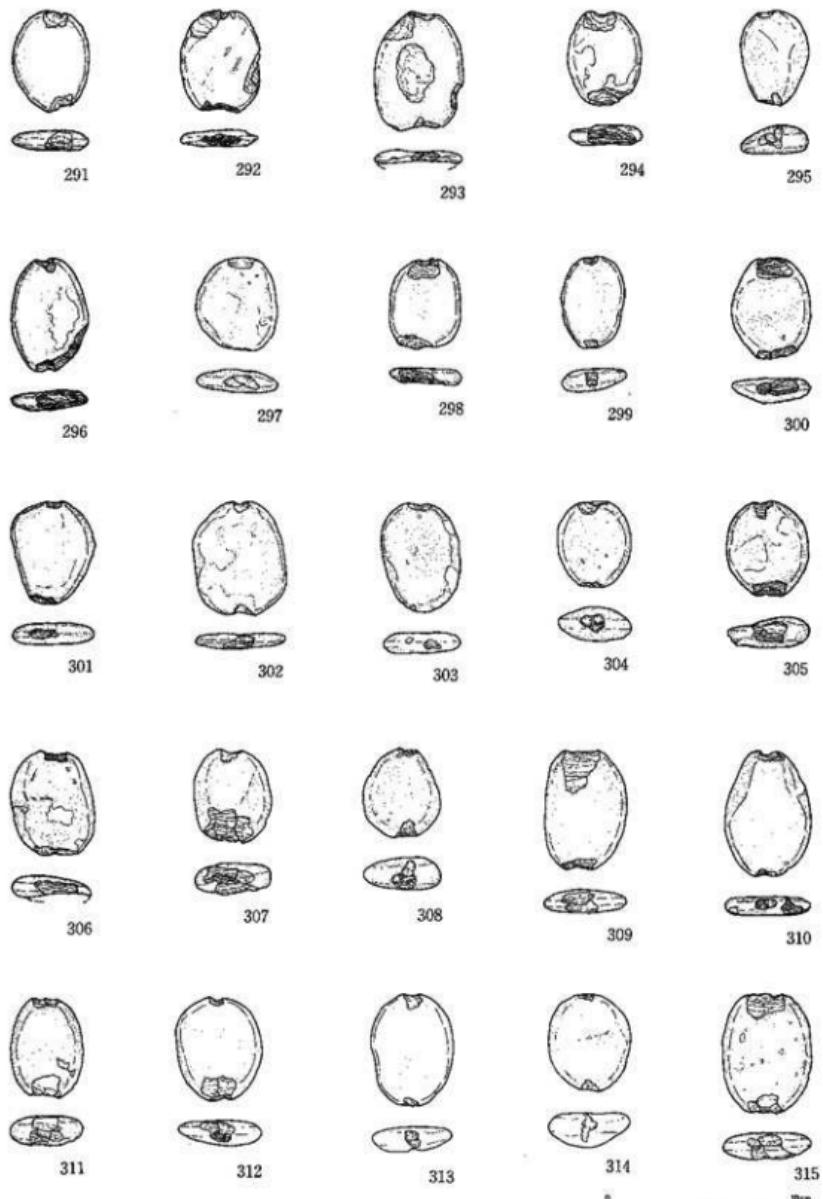


289

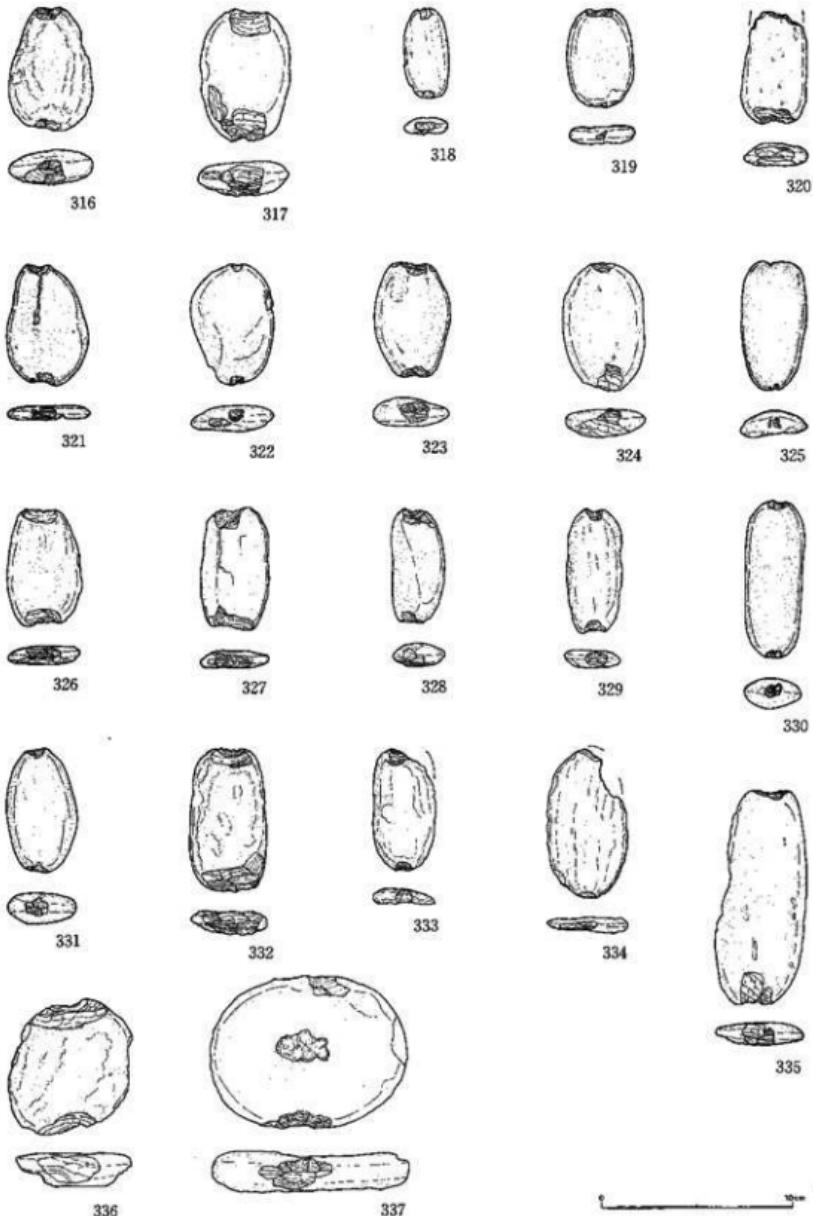


290

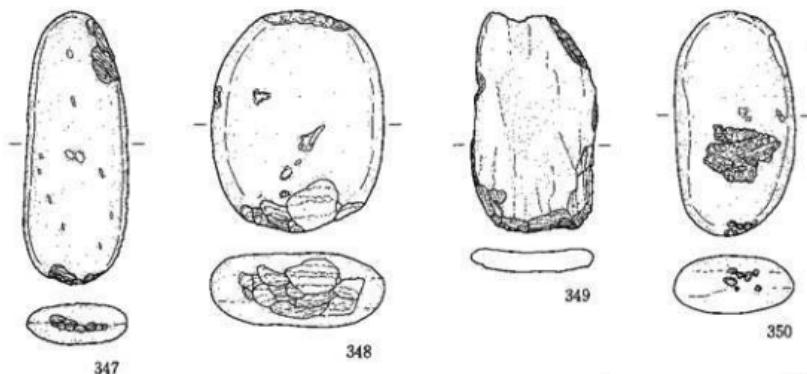
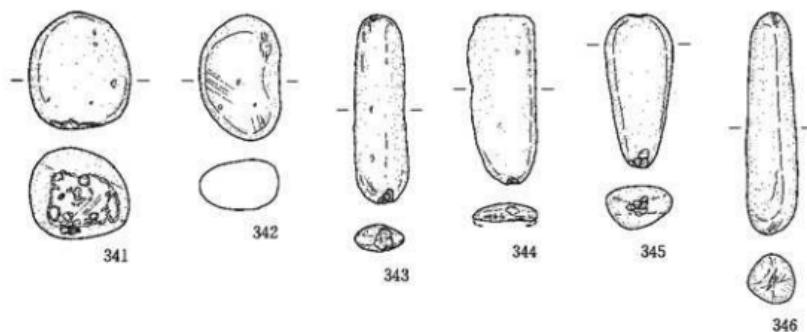
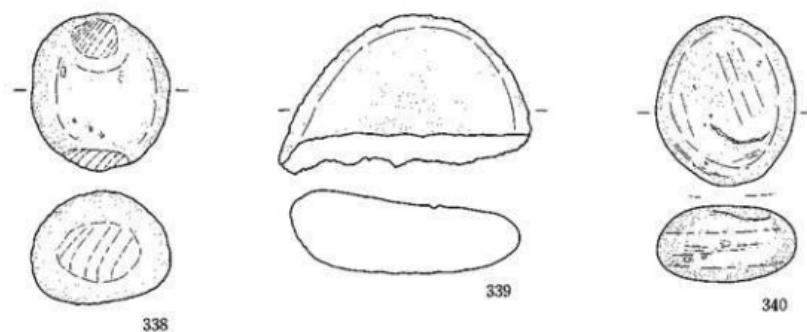
第49圖 造構外出土遺物(1)



第50図 遺構外出土遺物(2)



第51図 遺構出土遺物(13)



第52図 遺構外出土遺物(14)



第16表 遺構外出土石器観察表1 (No.253-281)

| 遺物 番号 | 出土グリ ッド名 採上番号 | 器種 | 法 量 | | | | 分類 | 石質 | 調査・特徴 |
|----------|---------------------|------------|--------|-------|------|--------|--------|---|---|
| | | | 長cm | 幅cm | 厚cm | 重g | | | |
| 253 | 一括 | 石鋸 | 1.8 | (1.3) | 0.3 | (0.4) | I A 1 | サヌカイト | 刃縁が直線的で刃角が鋭く、基部抉りは深い。 |
| 254 | 一括 | 石鋸 | 2.35 | 1.3 | 0.3 | (0.6) | I A 1 | サヌカイト | 刃縁が直線的で刃角が鋭く、基部抉りは浅い。 |
| 255 | 一括 | 石鋸 | 1.8 | (1.2) | 0.2 | (0.3) | I A 1 | サヌカイト | 刃縁はほぼ直線的で刃角も鋭く、基部抉りは深い。 |
| 256 | 一括 | 石鋸 | 2.1 | 1.4 | 0.3 | 0.6 | I A 2 | サヌカイト | 刃縁が直線的で刃角が鋭く、基部抉りは深い。 |
| 257 | 一括 | 石鋸 | 1.3 | 1.2 | 0.3 | 0.3 | I C | サヌカイト | 正三角形に近く、刃縁は直線的で刃角は浅く基部抉りは浅い。裏面は調整せず。 |
| 258 | R11 | 石鋸 | 1.8 | 1.4 | 0.4 | 0.5 | I D | サヌカイト | 刃縁は内凹し、脚は不揃い。基部抉りは浅い。 |
| 259 | 一括 | 石鋸 | 1.3 | 1.2 | 0.2 | 0.2 | I E | サヌカイト | 刃縁はやや外刈し、刃角もやや浅い。基部抉りは浅い。 |
| 260 | 一括 | 石鋸 | 2.1 | 1.6 | 0.4 | 0.9 | I F | サヌカイト | 刃縁は外刈し、刃角が鋭い。脚は不揃いに陥る。基部抉りはやや浅い。 |
| 261 | 一括 | 石鋸 | 2.5 | 1.5 | 0.4 | 0.8 | I I | サヌカイト | 刃縁がくびれ、基部抉りは深い。 |
| 262 | R8-T1 | 石鋸 | (2.8) | (1.5) | 0.4 | (1.0) | I I | サヌカイト | 刃縁はくびれるように刃を削り、基部抉りは深い。 |
| 263 | 一括 | 石鋸 | 1.3 | 1.4 | 0.3 | 0.8 | I I | サヌカイト | 刃縁は大きく外刈し、刃角は鋭く、基部抉りはやや深く。脚は内凹気味で微形態に差がある。 |
| 264 | 一括 | 石鋸 | (1.5) | 1.6 | 0.3 | (0.7) | 皆B | サヌカイト | 先端部を欠損する。両刃縁は直線的で基部は平底。 |
| 265 | R11 | 石鋸 | 4.9 | (8.1) | 1.1 | (30.2) | チャット | 左右不对称の極長のもので、刀部はほぼ半円で、刃間に斜離曲面を行く。 | |
| 266 | C9-41 | 刀斧 | 10.5 | 4.5 | 1.0 | 45.5 | | サヌカイト | 横長で表表面とともに主要剝離面を残し、上面には自然面を保ちに残る。右端はやや突き出る。左端は新削したまま。刃縁は表裏面から2次調整を施す。 |
| 267 | H13-T1 | 剥片 | 2.0 | 2.1 | 0.8 | 2.8 | | 黒曜石 | 表に主要剝離面を残し、上端に平凸状打撃面を作成し、母骨から剥離する。使用痕・2次調整痕は認められない。 |
| 268 | C8-57 | スクレ イバー | 5.0 | 1.5 | 0.7 | 3.8 | | サヌカイト | 縱長剥片の両側面に使用痕。 |
| 269 | C8-T1 | スクレ イバー | 3.0 | 2.3 | 0.6 | 2.0 | チャット | 下端に僅かに使用痕。 | |
| 270 | 一括 | スクレ イバー | 3.0 | 1.6 | 0.4 | 2.1 | チャット | 縱長剥片で両側面に僅かに使用痕。 | |
| 271 | C10 | スクレ イバー | 4.7 | 3.6 | 0.6 | 11.4 | サヌカイト | 縱長剥片で裏面に主要剝離面を残し、下端は斜削し、両端縁は2次調整痕。刃部分は | |
| 272 | B9 | 剥片 | 7.1 | 4.5 | 1.5 | 46.5 | サヌカイト | 大型の剥片で表裏面に主要剝離面を残し、2次調整痕等は認められない。 | |
| 273 | 一括 | 磨製石 斧 | 11.0 | 5.9 | 1.75 | 23.6 | 真岩? | 小型の基礎。縁部に打撃離層が見られ、全体に研磨し歴に刃こぼれが見られる。刃部分に僅かに刃こぼれが見られる。 | |
| 274 | D9 | 打撃石 斧 | 16.5 | 8.6 | 2.5 | 565 | | 緑色片岩 | 分割の大型のもので、表面には自然面を残し、刃部分に刃こぼれが見られる。 |
| 275 | R10-75 | 磨製石 斧 | 6.8 | 4.7 | 1.05 | 55.3 | | 緑色片岩 | 刃部分のみ研ぎ出し、側面は戻打により作成する。基部は研削する。 |
| 276 | B9 | 石斧 | 3.8 | 4.3 | 0.5 | 18.6 | II A 2 | 泥質片岩 | 長軸に直交しない部分の2側縁を打ち欠き、抜入部を作出する。長軸両端を粗く打ち欠く。裏面は半分程欠ける。 |
| 277 | B8-T1 | 石斧 | 3.8 | 3.9 | 1.3 | (30.9) | II A 3 | 緑色片岩 | 更削。長軸共に打ち欠き。抜入部を作出する。 |
| 278 | 一括 | 石斧 | 4.8 | 5.25 | 0.7 | 36.2 | II A 3 | 泥質片岩 | 円形の両端を打ち欠き。抜入部の一端が壊れる。 |
| 279 | C10 | 石斧 | 5.45 | 5.45 | 0.85 | 46.5 | II A 3 | 泥質片岩 | 長軸両端を打ち欠き、抜入部を作出。 |
| 280 | C10 | 石斧 | 5.1 | 4.9 | 1.4 | 58.4 | II A 3 | 緑色片岩 | 円形に近く長軸両端を打ち欠き、肩に一端を粗く打ち欠く。 |
| 281 | 一括 | 石斧 | 5.5 | 5.05 | 1.3 | 54.6 | II A 3 | 緑色片岩 | |

第17表 遺構外出土石器観察表2 (No.282~327)

| 遺物 番号 | 出土アリ ド名一 様上番号 | 器種 | 法 量 | | | | 分類 | 石質 | 測定・特徴 |
|----------|---------------------|----|--------|------|-------|--------|--------|------|-----------------------------|
| | | | 長cm | 幅cm | 厚cm | 重kg | | | |
| 282 | B10 | 石錐 | 5.6 | 5.4 | 1.5 | 69.6 | II A 4 | 泥質片岩 | 円形に近く、長軸両端を粗く打ち欠き、抉入部を作出する。 |
| 283 | R7 | 石錐 | 2.5 | 2.23 | 0.6 | 4.7 | II B 1 | 泥質片岩 | 小型で、円形に近く長軸両端を打ち欠く。 |
| 284 | D9 | 石錐 | 4.1 | 3.15 | 0.55 | 14.5 | II B 2 | 泥質片岩 | 長軸両端を打ち欠き、抉入部はやや摩耗する。 |
| 285 | 一括 | 石錐 | 3.9 | 3.2 | 0.8 | 19.2 | II B 2 | 泥質片岩 | 長軸両端を打ち欠く、抉入部が掌状する。 |
| 286 | 一括 | 石錐 | 4.4 | 3.3 | 0.55 | 15.1 | II B 2 | 緑色片岩 | 長軸両端を確かに打ち欠き、抉入部を作出する。 |
| 287 | D10 | 石錐 | 4.5 | 3.7 | 0.8 | 28.5 | II B 2 | 緑色片岩 | 長軸両端を大きく打ち欠く、握持部にも抉入部を作出する。 |
| 288 | D10 | 石錐 | 3.85 | 3.0 | 1.1 | 23.55 | II B 2 | 粘晶片岩 | 長軸両端を大きく打ち欠く。 |
| 289 | 一括 | 石錐 | 5.6 | 4.5 | 0.65 | 24.3 | II B 2 | 泥質片岩 | 長軸両端を打ち欠く。 |
| 290 | 一括 | 石錐 | 4.7 | 3.8 | 0.8 | 28.8 | II B 2 | 泥岩 | 長軸両端を打ち欠く。 |
| 291 | 一括 | 石錐 | 5.3 | 4.0 | 1.0 | 37.0 | II B 3 | 泥質片岩 | 長軸両端を打ち欠く。 |
| 292 | 一括 | 石錐 | 5.3 | 4.1 | 0.8 | 33.7 | II B 3 | 緑色片岩 | 長軸両端を打ち欠く。 |
| 293 | 一括 | 石錐 | 6.1 | 4.6 | 0.5 | (37.2) | II B 3 | 緑色片岩 | 長軸両端を打ち欠く。裏面は大きく欠損する。 |
| 294 | 一括 | 石錐 | 5.0 | 3.75 | 1.0 | 32.6 | II B 3 | 緑色片岩 | 長軸両端を打ち欠く。 |
| 295 | 一括 | 石錐 | 4.9 | 3.6 | 1.45 | 30.2 | II B 3 | 砂岩 | 長軸両端を打ち欠き、抉入部は摩耗する。 |
| 296 | 一括 | 石錐 | 5.9 | 4.0 | 0.95 | 38.4 | II B 3 | 粘晶片岩 | 長軸両端を打ち欠き、一部は摩耗する。 |
| 297 | 一括 | 石錐 | 4.9 | 4.2 | 1.2 | 38.0 | II B 3 | 泥質片岩 | 長軸両端を打ち欠く、抉入部が掌状する。 |
| 298 | C9-51 | 石錐 | 4.7 | 3.7 | 0.75 | 31.1 | II B 3 | 粘晶片岩 | 長軸両端を打ち欠く。 |
| 299 | C9-1 | 石錐 | 4.75 | 3.3 | 1.15 | 34.8 | II B 3 | 粘晶片岩 | 長軸両端を打ち欠く。 |
| 300 | G11 | 石錐 | 5.2 | 4.1 | 1.2 | 49.1 | II B 3 | 緑色片岩 | 長軸両端を打ち欠く。 |
| 301 | 一括 | 石錐 | 5.3 | 4.2 | 1.1 | 46.9 | II B 3 | 粘晶片岩 | 長軸両端を打ち欠く。 |
| 302 | 一括 | 石錐 | 5.8 | 4.7 | 0.7 | 46.8 | II B 3 | 粘晶片岩 | 長軸両端を打ち欠き、抉入部は摩耗する。 |
| 303 | 一括 | 石錐 | 5.7 | 4.0 | 1.1 | 47.0 | II B 3 | 粘晶片岩 | 長軸両端を打ち欠く。 |
| 304 | 一括 | 石錐 | 4.5 | 3.8 | 1.8 | 46.9 | II B 3 | 泥質片岩 | 長軸両端を打ち欠く。 |
| 305 | 一括 | 石錐 | 4.9 | 4.2 | 1.5 | 47.2 | II B 3 | 泥質片岩 | 長軸両端を打ち欠く。 |
| 306 | H10-27 | 石錐 | 5.4 | 4.2 | (0.9) | 44.4 | II B 3 | 粘晶片岩 | 長軸両端を打ち欠く。裏面は削落する。 |
| 307 | D9-11 | 石錐 | 4.8 | 4.0 | 1.55 | 52.3 | II B 3 | 粘晶片岩 | 長軸両端を打ち欠く。 |
| 308 | C10 | 石錐 | 4.6 | 4.0 | 1.7 | 51.7 | II B 3 | 粘晶片岩 | 長軸両端を打ち欠く。 |
| 309 | C7 | 石錐 | 6.2 | 4.3 | 1.2 | 55.6 | II B 3 | 緑色片岩 | 長軸両端を打ち欠く。 |
| 310 | -統 | 石錐 | 6.5 | 4.5 | 0.95 | 56.3 | II B 3 | 緑色片岩 | 長軸両端を大きく打ち欠く。 |
| 311 | H6-1 | 石錐 | 5.0 | 3.75 | 1.5 | 53.0 | II B 3 | 粘晶片岩 | 長軸両端を打ち欠く。 |
| 312 | B7-T1 | 石錐 | 5.4 | 4.4 | 1.3 | 52.8 | II B 3 | 緑色片岩 | 長軸両端を打ち欠く。 |
| 313 | B7-S8 | 石錐 | 5.3 | 4.2 | 1.3 | 51.6 | II B 3 | 緑色片岩 | 長軸両端を打ち欠く。 |
| 314 | B9 | 石錐 | 5.1 | 4.3 | 1.8 | 60.5 | II B 4 | 砂岩 | 長軸両端を確かに打ち欠く。 |
| 315 | B10 | 石錐 | 6.2 | 4.6 | 1.4 | 67.1 | II B 4 | 粘晶片岩 | 長軸両端を打ち欠く。 |
| 316 | -統 | 石錐 | 6.4 | 4.4 | 1.75 | 68.9 | II B 4 | 泥質片岩 | 長軸両端を打ち欠く。 |
| 317 | C10-T1 | 石錐 | 5.9 | 4.7 | 1.75 | 91.5 | II B 4 | 泥質片岩 | 長軸両端を大きく打ち欠く。 |
| 318 | B7 | 石錐 | 4.7 | 2.4 | 0.9 | 17.1 | II C 2 | 緑色片岩 | 長軸両端を打ち欠く。 |
| 319 | -統 | 石錐 | 5.1 | 3.4 | 0.8 | 27.2 | II C 2 | 泥質片岩 | 長軸両端を打ち欠く。 |
| 320 | C8 | 石錐 | (5.8) | 3.3 | 1.1 | (36.9) | II C 3 | 泥質片岩 | 長軸両端を打ち欠き、一端部は折損する。 |
| 321 | -統 | 石錐 | 6.3 | 4.2 | 0.7 | 35.5 | II C 3 | 粘晶片岩 | 長軸両端を打ち欠く。 |
| 322 | -統 | 石錐 | 6.4 | 4.25 | 1.35 | 59.5 | II C 3 | 緑色片岩 | 長軸両端を打ち欠く。 |
| 323 | -統 | 石錐 | 6.0 | 4.0 | 1.5 | 54.2 | II C 3 | 泥質片岩 | 長軸両端を打ち欠く。 |
| 324 | C10 | 石錐 | 6.6 | 4.2 | 1.4 | 57.5 | II C 3 | 粘晶片岩 | 長軸両端を打ち欠く。 |
| 325 | -統 | 石錐 | 6.6 | 3.4 | 1.2 | 49.2 | II C 3 | 緑色片岩 | 長軸両端を打ち欠く。 |
| 326 | -統 | 石錐 | 5.8 | 3.8 | 0.95 | 43.3 | II C 3 | 粘晶片岩 | 長軸両端を打ち欠く。 |
| 327 | E10-30 | 石錐 | 6.4 | 3.6 | 0.9 | 37.5 | II C 3 | 泥質片岩 | 長軸両端を打ち欠く。 |

第18表 遺構外出土石器観察表3 (No.328~350)

| 遺物 番号 | 出土グリ ッド名一 様上番号 | 岩種 | 法 量 | | | | 分類 | 石質 | 調査・特徴 |
|----------|----------------------|----|--------|--------|-------|--------|-------|------|-------------------------------------|
| | | | 長cm | 幅cm | 厚cm | 重kg | | | |
| 328 | 一括 | 石錐 | 5.9 | 2.7 | 1.2 | 36.4 | Ⅱ C 3 | 緑色片岩 | 長軸両端を打ち欠く。 |
| 329 | B7 | 石錐 | 6.5 | 2.9 | 0.9 | 35.7 | Ⅱ C 3 | 緑色片岩 | 長軸両端を打ち欠き、抜入部は摩耗する。 |
| 330 | 一括 | 石錐 | 8.0 | 2.95 | 1.6 | 78.6 | Ⅱ C 4 | 緑色片岩 | 長軸両端を打ち欠く。 |
| 331 | 一括 | 石錐 | 6.5 | 3.6 | 1.6 | 65.0 | Ⅱ C 4 | 緑色片岩 | 長軸両端を打ち欠き、抜入部は摩耗する。 |
| 332 | C10 | 石錐 | 7.5 | 4.0 | 1.2 | 63.8 | Ⅱ C 4 | 泥質片岩 | 長軸両端を大きく打ち欠く。 |
| 333 | D10 | 石錐 | (6.3) | 3.3 | (0.7) | (27.7) | Ⅱ C | 泥質片岩 | 長軸両端を打ち欠き。一端部は折損する。 |
| 334 | 一括 | 石錐 | (7.8) | 4.2 | 0.65 | (40.4) | Ⅱ C | 泥質片岩 | 長軸両端を打ち欠き。端部は欠損する。 |
| 335 | C9 | 石錐 | 11.3 | 4.7 | 1.2 | 106.5 | Ⅱ C | 緑色片岩 | 長軸両端を大きく打ち欠く。 |
| 336 | C10 | 石錐 | 7.2 | 6.5 | 1.65 | 116.4 | Ⅱ B | 泥質片岩 | 長軸から少しづれた側面を大きく打ち欠く。 |
| 337 | 一括 | 石錐 | 7.9 | 10.3 | 2.1 | 327 | Ⅱ B | 納藻片岩 | 短軸両端を打ち欠く。表面中央部に敲打痕。 |
| 338 | C10 | 磨石 | 8.25 | 7.2 | 5.9 | 495 | | 泥質片岩 | 長軸両端に擦痕が見られる。 |
| 339 | C10-2 | 磨石 | — | (12.0) | (3.7) | (530) | | 泥質片岩 | 中央部が窪む。 |
| 340 | 一括 | 磨石 | 8.8 | 7.3 | 4.0 | 365 | | 砂岩 | 全体を窪く。側面に僅かに敲打痕。 |
| 341 | 一括 | 磨石 | 6.1 | 5.3 | 4.8 | 222 | | 砂岩 | 全体を窪く。下端部に擦打痕。 |
| 342 | 一括 | 磨石 | 6.6 | 4.2 | 2.6 | 101 | | 砂岩 | 全体を窪く。 |
| 343 | E9 | 敲石 | 9.9 | 2.6 | 1.5 | 80.7 | | 泥質片岩 | 両端を敲打する。 |
| 344 | B7 | 敲石 | 8.85 | 3.6 | 0.9 | 55.2 | | 緑色片岩 | 一面に敲打痕。表面は欠損し、もう一方部も折損する。 |
| 345 | 一括 | 敲石 | 8.0 | 3.4 | 2.25 | 77.5 | | 砂岩 | 下端部がすぼまり、先端部に敲打痕。 |
| 346 | E10-S63 | 敲石 | 11.6 | 2.55 | 2.6 | 138 | | 緑色片岩 | 棒状のもので、先端部を僅かに敲打痕。 |
| 347 | 一括 | 敲石 | 14.3 | 5.3 | 2.15 | 274 | | 緑色片岩 | へら状のもので先端部に敲打痕。 |
| 348 | 一括 | 敲石 | 11.6 | 9.0 | 3.9 | 659 | | 砂岩 | 円筒形の棒の下端部を大きく敲打し、上端部にも、表面中央部は敲打で窪む。 |
| 349 | 一括 | 敲石 | 11.2 | 6.4 | 1.0 | 114 | | 泥質片岩 | 扁平で先端部に敲打痕。両側縁にも。打製作の可能性もある。 |
| 350 | C10-1 | 凹石 | 11.75 | 6.2 | 3.0 | 380 | | 緑色片岩 | 表面で先端部共に溝状の敲打痕。両端部も敲打する。 |

第4節 2次調査の調査結果

(1) 2次調査の概要 (第53図)

2次調査は平成5年3月1日から同年3月19日にかけて、周辺域での遺跡の広がりを把握するために実施した。調査対象地は平成3年度と同一平坦面である東側部分の水田と、平成3年度及び平成4年度1次調査区の西側部分にあたる水田・畑地で、対象面積は8,140m²と広範囲に及んだ。このため、調査区を2箇所に便宜的に分け、それぞれA、B区と呼称することとした。A区は東側部分の平成3、4年度調査区の上段、B区は西側部分の下段とした。トレンチは2×2m、及び2×5mの試掘坑を21箇所を任意の方向で設定し、A区に4箇所、B区に17箇所それぞれ設けた。また、必要に応じてトレンチを拡張し、遺構の性格等の把握に努めた。トレンチ番号は平成4年度1次調査からの続番号を付し、TR3からとし、測量には平成3年度の基準点を使用した(第53図参照)。

A区については、設定したトレンチ(TR3~6)の全てから遺構を検出した。TR3では縄文時代後期と考えられるSKを2基確認した。TR4では縄文時代後期のSK1基、弥生時代後期と考えられるSDを1条、松ノ木式期のSX1基を確認した。TR5ではピット3個、TR5では弥生時代後期と考えられる一辺1mの方形のSKをそれぞれ確認した。

B区では平成3年度調査区、及び平成4年度1次調査区と約2.5mの比高差があり、本米継やかな段丘を形成していたものが、耕作地の石垣等が築かれ、段丘変換点は大きく削平を受けている。遺構を検出したトレンチはTR10・14・17の3箇所で、ピット2個、SX2基を確認した。また、B区の南部から南西部にかけて一部斜面地盤の部分で、縄文土器が集中して出土している。遺物は今回設定した全てのトレンチから出土しており、縄文土器、弥生土器、土師器、石器を確認した。

遺構、遺物については調査したトレンチごとに以下で触れたい。なお、今回の調査で遺構を検出したトレンチについては、遺構の完掘を行わず遺構確認面に砂を入れ埋め戻しを行い、現況に復した。2次調査の発掘調査面積は143m²である。

(2) 各トレンチの内容 (第54~56図)

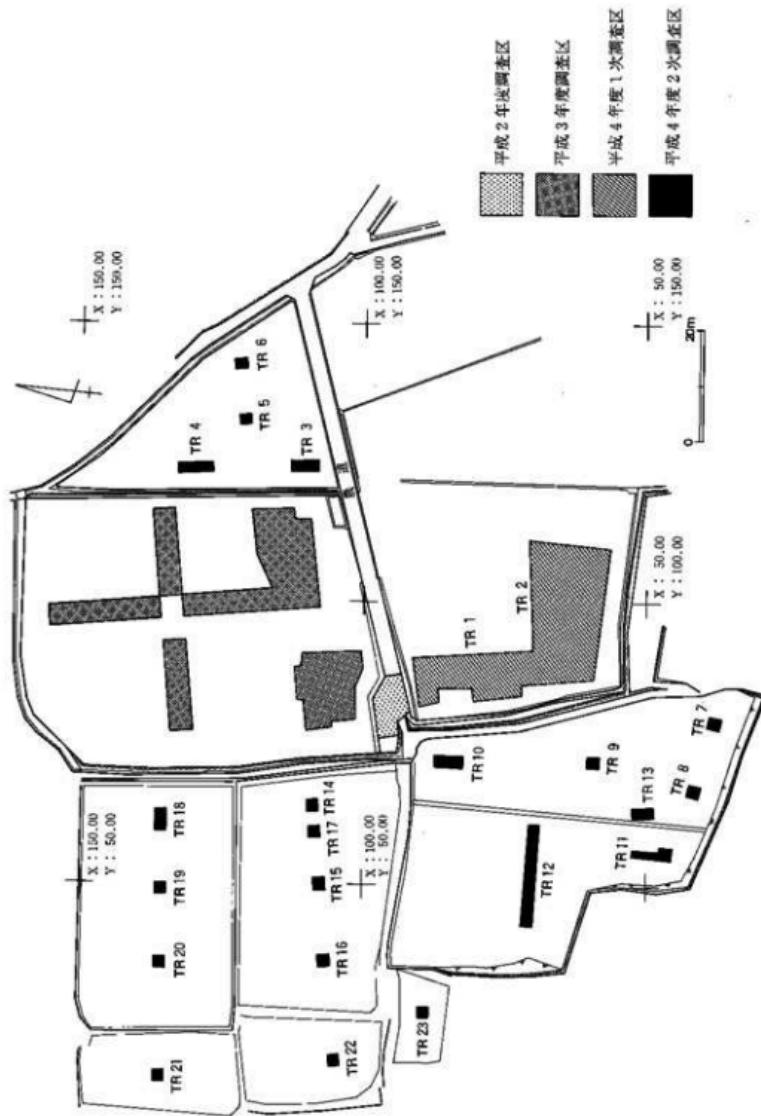
A区 (TR3~6)

平成3年度調査区と同じ段丘面(標高247.8m)の東側部分に当たる。

TR3 (第54図)

A区の南西部の隅に設定した2×5mのトレンチである。I層耕作土(層厚18~24cm)、II層水田床土(2~6cm)直下で縄文時代後期と思われる土坑を2基検出した。遺構検出面は標高247.5mでIII層(黄灰褐色火山灰土)上面である。遺構埋土は暗灰褐色シルトで層厚約20cm

第53図 2次調査トレーンチ配図図



を測る。縄文時代後期の包含層は削平されているものと思われる。IV層は黒褐色火山灰土（黄色土含む）である。層厚20~40cmを測り、ほぼフラットな状態で堆積している。無遺物層である。V層は明褐色シルト層でトレンチ南端部において、やや南方向に傾斜している。無遺物層である。

TR 4 (第54図)

A区の北部に設定した2×6mのトレンチである。トレンチ北端部において縄文時代後期の土器（松ノ木式）が一括集中して出土するSXを検出した。遺構検出面は耕作土直下で標高247.6mである。SXの遺構埋土は暗褐色シルトで炭化物を含む。351が出土している。また、トレンチ中央部では弥生時代後期と思われるSDを1条検出した。遺構埋土は黒灰色シルトで炭化物を少量含んでいる。平成3年度調査で検出されているSD1と関連している可能性がある。353はトレンチ中央部のSKで出土し、平城II式と同時期の可能性がある。遺構埋土は暗灰褐色土でややシルト質である。SKは上面で長径1m、短径0.4mを測り橢円形を呈する。その他に縄文時代後期と考えられる直径30cmのピットを2個確認している。下層の明褐色シルト層は標高247.5mで検出され、TR3よりもレベルが高くなっている。

TR 5 (第54図)

A区の中央部に設定した2×2mのトレンチである。遺構検出面は耕作土直下で標高247.5mである。縄文時代後期と考えられるピットを2個確認した。ピットは直径がそれぞれ25cmと35cmのもので、柱穴間は50cmを測る。遺構埋土は暗灰褐色シルトである。下層の堆積はTR3、4と同じ黒褐色火山灰層、明褐色シルト層の順でほぼフラットに堆積している。遺物包含層は存在しない。

TR 6 (第54図)

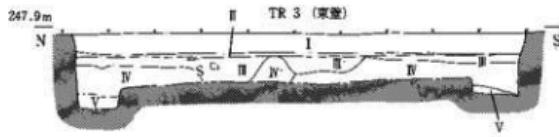
A区の東部に設定した2×2mのトレンチである。SK1基、ピット1個を検出をした。遺構検出面は耕作土直下で標高247.5mである。SKは一辺が約1mの方形を呈する。遺構埋土（黒褐色シルト）からみて弥生時代後期のものと考えられる。ピットは直径30cmを測り、遺構埋土は暗褐色シルトである。下層の堆積はTR5よりもレベルはやや下がる。遺物包含層は存在しない。

B区 (TR 7~23)

平成3年度調査区、平成4年度1次調査区の西側部分に当たる標高245.2mの調査区である。

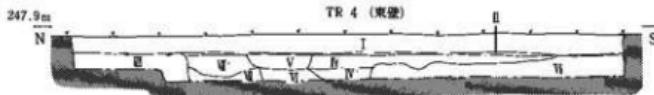
TR 7

B区の南部に設定した2×2mのトレンチである。現耕作土下に旧耕作土があり、開墾の跡が窺われる。旧耕作土の下は緑灰砂層が堆積しており、河川の氾濫原であったと考えられる。遺物は現耕作土、旧耕作土中に若干混入しているが縦片でローリングを受けており、詳細は不明である。



〔土層説明〕

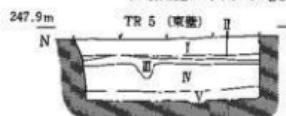
- I. 黒褐色粘土質；耕作土
- II. 赤褐色土；底土
- III. 黄褐色シルト
- IV. 黑褐色火山灰土
- V. 黄褐色シルト



〔土層説明〕

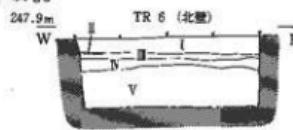
- I. 黑褐色粘土質；耕作土
- II. 赤褐色土；底土
- III. 黄褐色シルト；カーボン含む。調文時代後期包含層
- IV. 黑褐色火山灰土；カーボン含む
- V. 黄褐色シルト；カーボン含む
- VI. 黄褐色シルト；カーボン含む

- V. 黑褐色シルト
- VI. 黑褐色火山灰土
- VII. 黄褐色シルト；カーボン含む



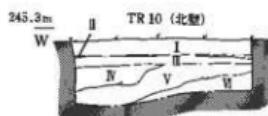
〔土層説明〕

- I. 黑褐色粘質土；耕作土
- II. 赤褐色土；底土
- III. 黄褐色シルト
- IV. 黑褐色火山灰土
- V. 明褐色シルト；やや粘性がある



〔土層説明〕

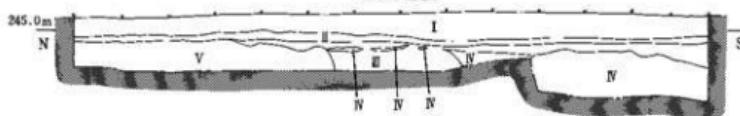
- I. 黑褐色粘質土；耕作土
- II. 赤褐色土；底土
- III. 黄褐色シルト
- IV. 黑褐色シルト
- V. 黑褐色火山灰土



〔土層説明〕

- I. 灰色粘土質；耕作土
- II. 赤褐色土；底土
- III. 黄褐色土；しまり強い
- IV. 黄褐色シルト；カーボン含む。土壌混入
- V. 黑褐色シルト；SX 透徹地土。調文時代後期包含層
- VI. 黄褐色シルト

TR 10 (北壁)



〔土層説明〕

- I. 灰色粘土質；耕作土
- II. 黄褐色土；底土
- III. 黄褐色シルト
- IV. 黑褐色シルト；黄色シルト混じり。調文時代後期土質混入
- V. 黑灰色シルト；複数層。旧堅地帶

第54図 2次調査トレーンセクション(1)

TR 8

B区の南部、TR 7の西側に設定した $2 \times 2\text{ m}$ のトレンチである。耕作土下は擾乱層が続いている。開墾時の整地層と考えられる。遺物は擾乱層の中から石器が1点出土している。土器も数点出土しているものの、細片でローリングを受けており詳細は不明である。

TR 9

TR 7、8の北側に設定した $2 \times 2\text{ m}$ のトレンチである。耕作土下（標高244.9m）で黄褐色シルト層が堆積しているが、平成4年度1次調査の時に確認されているVIa、VIb層に対応するものと思われる。分銅形の石製品363、365の块状耳飾りはVIa層、364の石器はVIb層からの出土である。

TR 10（第54図）

平成2年度調査区の「土器捨て場」の南西部に設定した $2 \times 6\text{ m}$ のトレンチである。トレンチの北端部で「土器捨て場」の一部分を検出した。遺構確認面は標高244.9mで、平成2年度調査で検出された溝状の「土器捨て場」の南西部の肩部分に相当するものと思われる。トレンチ北東部から南西方向に向かって広がっている。遺構埋土は暗褐色シルトで356、357等の松ノ木式に相当する土器が多く出土している。暗褐色シルトは北西の方向に落ち込んでいる。下層にVIa層が続く。

TR 11（第54図）

B区の南西部に設定した $2 \times 2\text{ m}$ （拡張部 $1 \times 5\text{ m}$ ）のトレンチである。耕作土直下で、トレンチ中央部から南に向かって斜面堆積の部分があり、360～362は黒灰色土（黄色シルトのブロック混入）の中から一括して出土した。黒灰色土の状況及び下層の堆積層が擾乱層であることから旧整地層と思われる。

TR 12（第55図）

B区の南西部に東西方向に設定した $2 \times 18\text{ m}$ のトレンチで、地表面下3.4m（標高240.7m）まで下層の確認を行った。現耕作土下に旧耕作土があり、開墾時に整地している。旧耕作土下はV層に当たる緑灰褐色シルト層でトレンチ西端部で層厚10cm、中央部で層厚30cmとやや西方から中央部にかけて層厚が厚くなっている。西端部より東側に14mの所でセクションが切れる。VI層は緑灰色シルト層で西端部から1mの所で中央部に向かって落ち込みが始まり、トレンチ中央部から東に向かって上がっている。VII層は緑灰色砂層で、VI層と同様にトレンチ中央部で落ち込む。VIII層は暗黄色シルト層でやや粘性があり、炭化物を少量含んでいる。IX層とX層の間で弥生時代後期の土器が出土している。XI層は暗黄色砂層でありX層は淡茶色シルト層でやや粘性がある。X層より下層はシルト層と砂層がほぼフラットに互層で堆積しており、標高241.97mで褐色シルト層と砂層の間から刷毛目が見られる上飾器が出土し、さらに標高240.91mのシルト層からも土師器と思われる土器の細片が出土している。

TR 13（第55図）

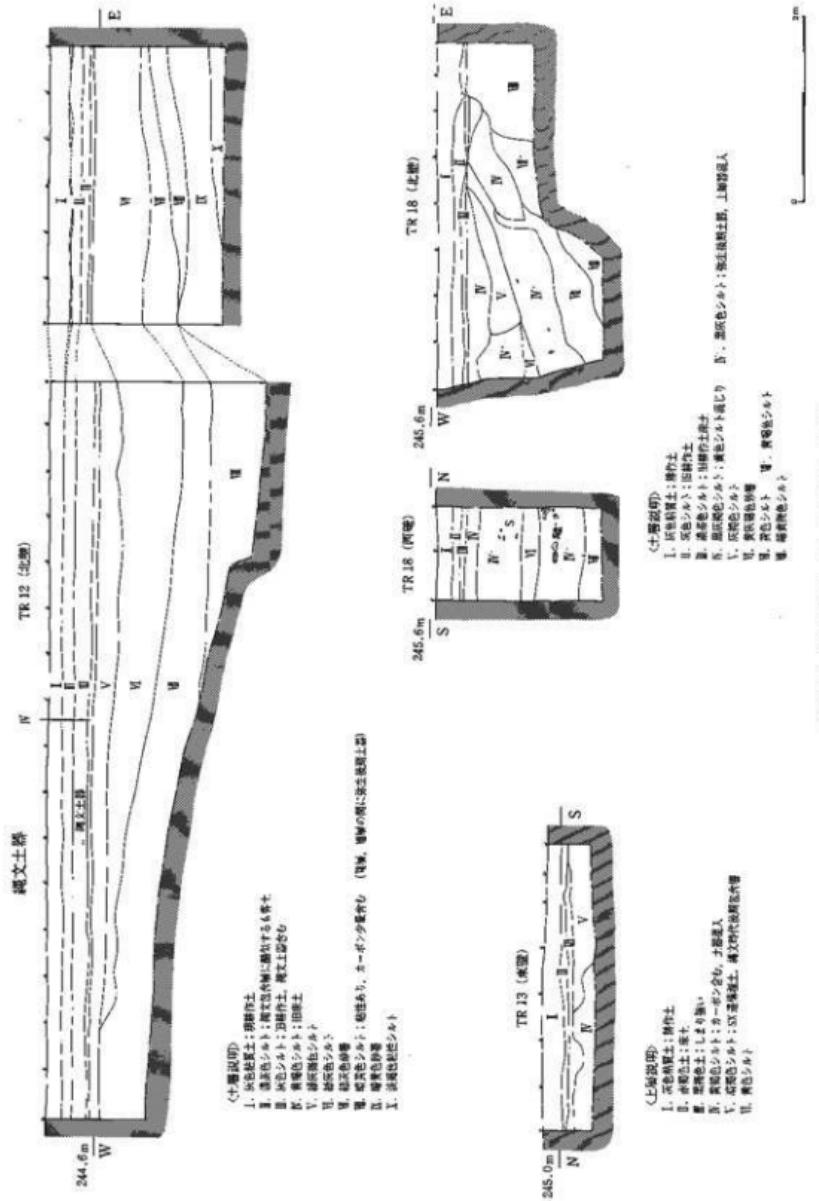


図55 図 2次調査トレーンセクション(2)

TR 11の東側に設定した 2×3 mのトレンチである。堆積の様相はTR 11とはほぼ同様で、縄文時代後期の土器を含む黒灰色土が南方に向かって斜面堆積している。出土遺物はTR 11程は多く出土していない。下層は擾乱層であり旧整地層と思われる。

TR 14 (第56図)

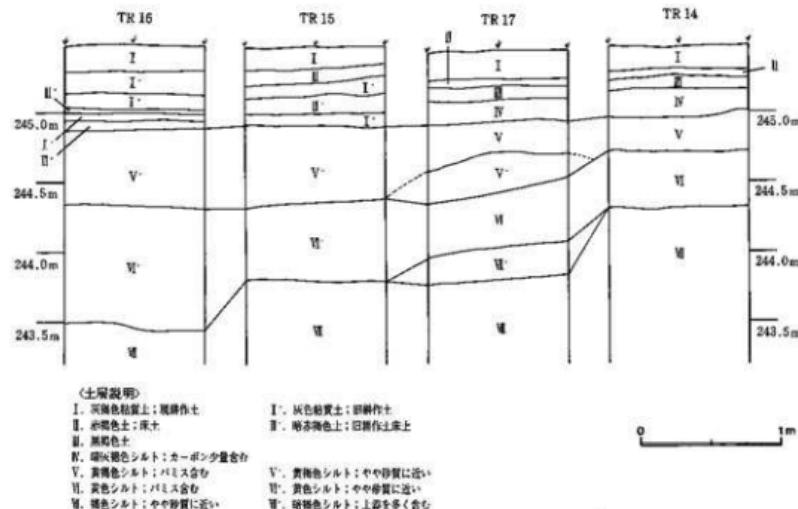
平成3年度調査区の南部西側に設定した 2×2 mのトレンチである。V層である黄褐色シルト層上面でピット2個を検出した。遺構埋土はIV層である暗灰褐色シルト層である。VI層は黄色シルト層でやや粘性がある。遺物はVI層まで縄文土器を含んでいる。V層、VI層は1次調査時のIVa層、IVb層に対応するものと思われる。

TR 15 (第56図)

TR 14より12m西側に設定した 2×2 mのトレンチである。現耕作土下に旧耕作土があり整地をしている。旧耕作土下は標高244.8mよりシルト層が堆積しており、TR 12のV、VI層に対応するものと思われる。遺物は耕作土及び底土に混入している。

TR 16 (第56図)

TR 15の西側に設定した 2×2 mのトレンチである。TR 15と同様に旧耕作土があり整地をしている。旧耕作土下の堆積状況も同様で、TR 12のV、VI、VII層に対応するシルト層が堆積している。標高243.31mのVII層中で縄文土器が混入している。細片でローリングを受けており、時期等は詳細不明である。



第56図 2次調査トレンチセクション(3)

TR17 (第56図)

TR14の2m西側に設定した2×2mのトレンチである。Ⅶ層である黄色シルト層の上面に黒黄灰色シルト層が堆積しており、弥生時代後期の土器片が混入している。Ⅷ層は1次調査のIVa層に対応し、Ⅸ層はIVb層にそれぞれ対応すると思われる。Ⅹ層はトレンチの北側のサブトレンチで確認し、層中に縄文時代後期の土器片を多く含む。Ⅺ層下、サブトレンチ東端部でSXを検出した。

TR18 (第55図)

B区北部、TR14の北側に設定した2×4mのトレンチである。Ⅶ、Ⅷ層はそれぞれ1次調査のIVa、IVb層に対応するものと思われる。Ⅸ層はトレンチの東端部から1mの所から西側に向けて落ち込んでいる。上層はⅨ層の堆積と同様に斜面堆積を呈している。Ⅹ層の黒灰褐色シルト層に弥生土器、土師器が多量に混入している。平成3年度調査区からの流れ込みの可能性が強い。

TR19~23

TR19~23については、TR12及びTR15、16とはほぼ同じ堆積状況であることから、河川の氾濫原であった可能性が強い。遺物は細片で大部分がローリングを受けており、詳細は不明であるが、下層に至るまで少量であるが混入している。
(吉成承三)

(3) 出土遺物 (第57、58図No.352~362)

縄文土器 (No.352~362)

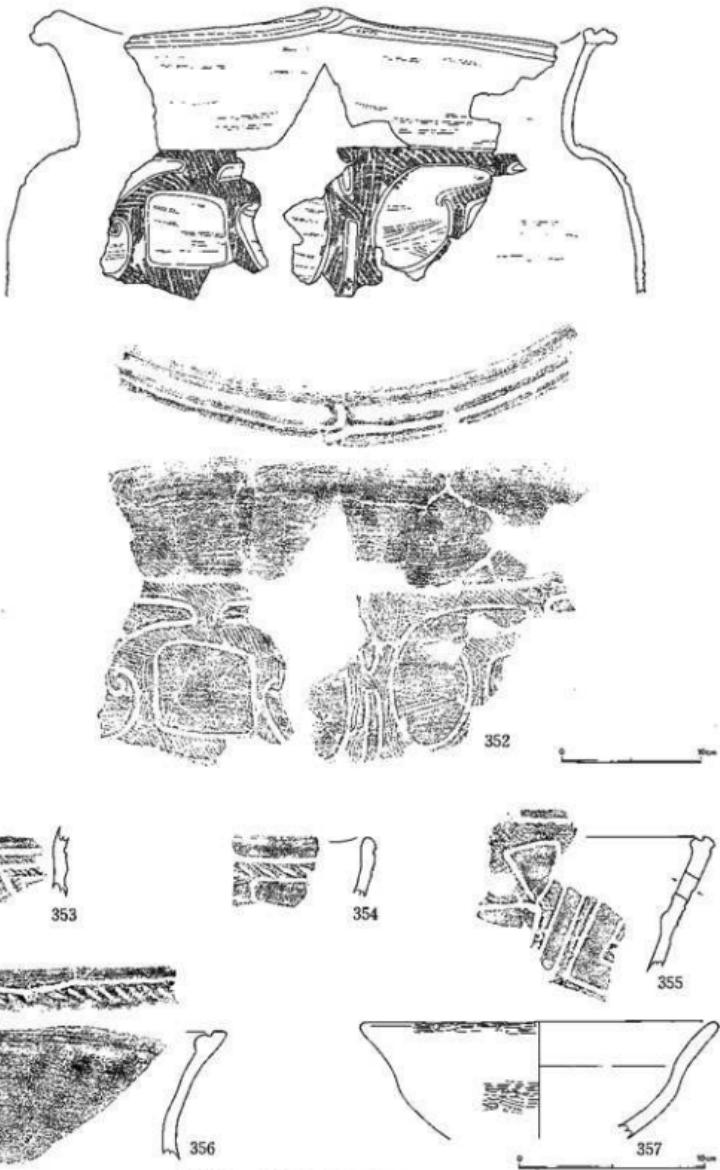
TR4 (No.352, 353)

352は胴部に丸味を持ち、沈線による入組文及び方形区画文を交互に展開させる。区画内は条痕かナデによる磨消縄文で縄文原体はやや粗いRLである。頭部が大きく無文帯を形成し、口縁部を拡張させ、波状となる。口縁部上端には2条の沈線を巡らせ、1条が波頂部分に結みつく。IV群D類に含まれ松ノ木式に相当する。

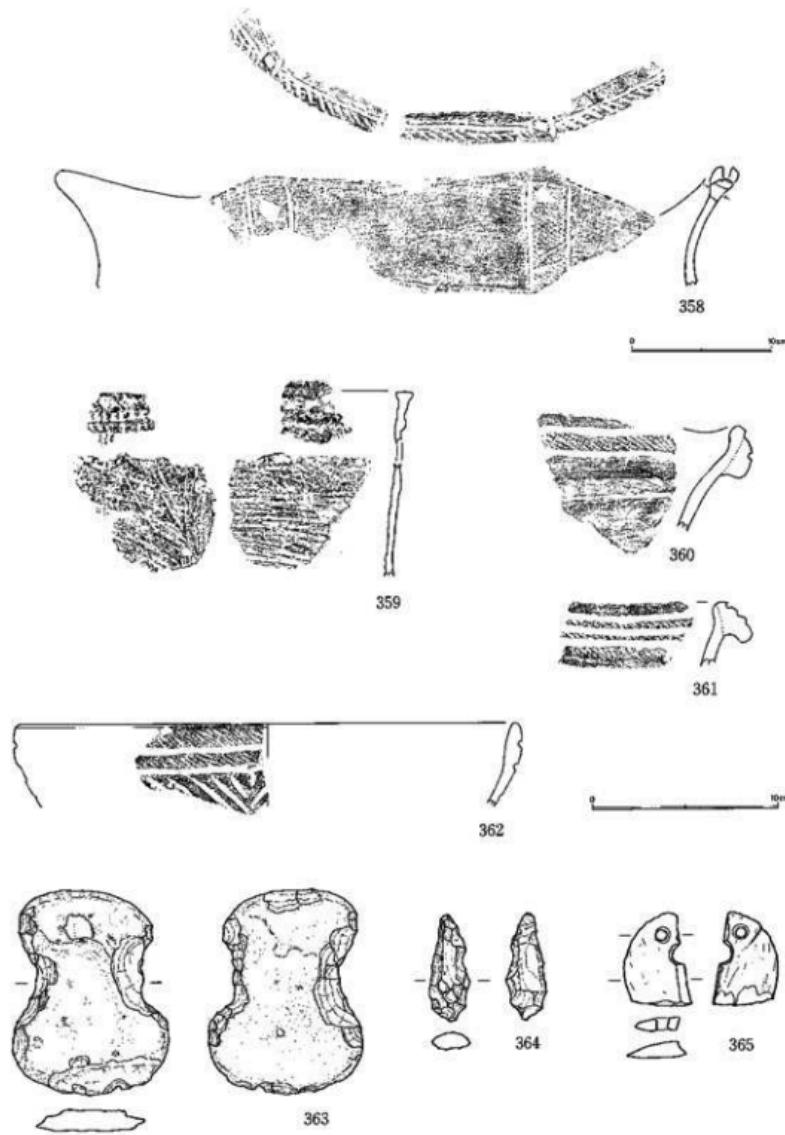
353は縄文地に沈線を直接施すもので、数本の沈線により三角形状の文様描写となるものと思われる。縄文原体はRLである。IV群E2類に含まれる可能性が高く、平城II式か津雲A式の範疇で捉えられよう。

TR10 (No.354~358)

354は磨消縄文で胴部上端には横位の縄文施文部に刻みを連続的に施すもので、宿毛式に通常に見られるものである。口唇は丸味を持ち、肥厚させず沈線・縄文等を施さない。縄文原体はRLである。IV群C1類に含まれる。355は鉢状の器形で直線的に開くもので、胴部文様は2本沈線による丁寧な磨消縄文である。口唇は肥厚させず沈線1条と縄文を施す。縄文原体はやや細く、ばらけたようなものでRLである。器面には赤彩を施し、上部に焼成前の径1cm程度の円孔を有する。内面は段状となる。IV群C1類の宿毛式に含まれる。356は口縁を僅かに肥



第57図 2次調査出土遺物(1)



第58図 2次調査出土遺物(2)

厚させ、沈線1条と短沈線の刺みを連続的に施すものである。頸部は無文となっており、胴部との境に沈線が1条僅かに観察できることから、胴部にも文様を有するものと考えられる。IV群D類に含まれ松ノ木式に相当する。357は碗状の器形で底部は丸味を持ち、頸部で僅かにくびれ、口縁は若干開く。類例は認められないものの、IV群に含まれ宿毛式か松ノ木式に伴うものと考えられる。358は頸部は発達し、口縁は4単位の波状になるものと考えられ、波頂部に円形の刺突と刺突の両脇に弧線文を施す。また口縁には沈線を1条巡らせ、短沈線の刺みを連続的に施す。波頂部下には2本の垂下沈線と沈線間に繩文原体LRを施し、更に径1cm程の円孔を有する。IV群D類の松ノ木式に含まれる。

TR11 (No.359~362)

359は口縁部に直線的な2条の連続押し引き爪形文、胴部には波状の曲線的な連続押し引き爪形文が見られる。地文は表裏面共に2枚貝による条痕である。口唇は上端が平坦で内面に僅かに突出させる。II群A類に含まれ、羽島下層式に相当しよう。360、361は共に口縁を外面に大きく拡張し、沈線及び繩文を施すもので、頸部は発達し無文帯を形成するものと思われる。360は2本沈線で沈線内に繩文原体RLを施し、361は3本沈線となり、口唇以外に繩文原体RLを施す。IV群E2類に含まれ、津雲A式相当しよう。362は体状の器形で直線的に立ち上がり、口縁は肥厚させず、沈線2条及び原体RLの繩文を施し、胴部には複数の沈線による三角形状の文様を施す。IV群E2類に含まれ、津雲A式及び平城II式には類例は認められないものの、所謂縦帶文の範疇に含まれよう。

石器・石製品 (No.363~365)

TR9 (No.363~365)

363は分銅形の石製品と考えられる。打製石斧の分銅形と同様に両側縁を敲打し抉入部を作出するものの、全長5.6cmと小型であることから打製石斧としての実用的な機能は認め難い。石質は緑色片岩である。364は1次調査の土器捨て場から出土の47と同様の尖頭状の石鎌と考えられる。石質は風化が著しく、判然としないもののサヌカイトの可能性がある。石鎌VC類に含まれる。365は滑石製块状耳飾りである。中央部で折損しており、表裏から補修孔を穿つ。頭に丸味を持つ三角形を呈し、中央孔は上部に穿たれている。抉入部及び中央孔は僅かに残存する。全体を研磨し擦痕が見られ、側辺は尖る。表面の色調は艶のある黒褐色を呈する。

(3) 2次調査の成果

2次調査では平成2、3年度、及び4年度1次調査では主として段丘中位面での調査を行ってきたものであるが、しかし松ノ木遺跡の範囲はこれらの調査により全て把握したとは言い切れるものではなかった。南四国中央山間部において松ノ木遺跡の立地する寺家は、山間部では珍しく、吉野川と汗見川の合流地点に広範囲の平坦な段丘を形成しており、遺跡としての好立地場所であることから、松ノ木遺跡の展開は予想以上のものと考えられた。

そのため、2次調査では下段の低位段丘の汗見川よりの水田・畑地を調査対象区とし、B区内に17箇所のトレンチを設定し、下段での遺跡の展開の把握に努めている。調査の結果、微地形はTR18, 17, 9を結ぶラインが中位段丘と低位段丘の変換点であることを確認している。そして、TR10においては「土器捨て場」が低位段丘までにも及ぶことが判明し、TR9では玦状耳飾り等も出土し、緩傾斜面にもまた他の遺構の存在も確認された。しかし、大部分が既に旧耕作地構築の際に削平され、現状では段畝となっており、遺物包含層が削平され、低位段丘の南西部では傾斜面に整地層として移動している。その整地層が確認されたTR11には遺物の混入が認められ、松ノ木遺跡では初めての津雲A式タイプの土器が少量であるが纏まって出土しており、近辺に津雲A式タイプの時期の存在があったことが予想される。なお、変換点より西側部分のトレンチでは遺物の出土が認められるものの、遺物の大半がローリングを受けており、また土層は旧地形が氾濫原であったと考えられる砂層の堆積を確認している。

A区は平成3年度及び4年度1次調査と同様の中位段丘面の北東部を調査対象とし、更に松ノ木式期の遺構等を確認している。しかし、2次調査においても「土器捨て場」で多量に出土した松ノ木式に該当する住居跡の確認はできなかった。

第19表 2次調査出土器観察表 (No.352~362)

| 遺物番号 | トレンチ名 | 器種 | 口径 法量 (cm) | 分類 | 胎土・色調 | 特徴 | | | 備考 |
|------|-------|----|------------------|--------|-----------------------|----------|-----------|---|---------|
| | | | | | | 調文 模様 | 器面彫刻 | 文様 | |
| 352 | TR 4 | 深鉢 | 11.8 (38) | IV D | 長石・石英少量。内外面暗褐色。 | R.L. | 内外面彫刻 | 2本並列による帶状模様。入瓶文・方格状文を展開。 | S X 内出土 |
| 353 | TR 4 | 深鉢 | | V E 2 | 長石・石英少量。内面暗褐色。 | R.L. | 内面彫刻 | 調文地に直線模様の浅縁。 | S X 内出土 |
| 354 | TR 10 | 深鉢 | | IV C 1 | 砂粒微量。内外面赤褐色。 | R.L. | 内外面ナデ | 2本並列による帶状模様。横位の花綿地に調文及び網目。 | |
| 355 | TR 10 | 鉢 | | IV D | 長石・石英少量。内面暗褐色。内面暗褐色。 | R.L. | 内外面ナデ | 2本並列による丁字状の直線模様。 | 成層岩付し赤色 |
| 356 | TR 10 | 深鉢 | | IV D | 長石・石英少量。内面暗褐色。 | R.L. | 内面ナデ、外面彫刻 | 口縁を延長し、沈縁及び追削縁の割込み。 | S X 内出土 |
| 357 | TR 10 | 鉢 | 口径 (19) | V | 長石・石英少量。外面暗褐色。内面暗褐色。 | 内外面ナデ | | 直線の斜縫。 | S X 内出土 |
| 358 | TR 10 | 深鉢 | | IV D | 長石・石英多量。外面暗褐色。内外面赤褐色。 | R.L. | 内外面ナデ | 4段位の連続模様。直線地に円形刺突。口縁に沈縁1巻と追削縁の割込み。底折部に中央沈縫及び円孔。 | |
| 359 | TR 11 | 深鉢 | | II A | 砂粒多量。内外面暗褐色。 | 内外面彫刻 | | 上部に3段の連続模様。引き爪形文及び波状の連続模様。引き爪形文。 | |
| 360 | TR 11 | | | V E 2 | 長石・石英少量。内面暗褐色。 | R.L. | 内外面ナデ | 口縁を外に延長し、3条の沈縫間に網目。 | |
| 361 | TR 11 | 深鉢 | | V E 2 | 砂粒少量。外面暗褐色。内面暗褐色。 | R.L. | 内外面ナデ | 口縁を外に延長し、3条の沈縫間に網目。 | |
| 362 | TR 11 | 鉢 | | IV D | 砂粒微量。外面赤褐色。内面暗褐色。 | R.L. | 内外面ナデ | 1巻を除きさす模文及び波状。断縫は複数の波状による三角形状模様。 | |

第20表 2次調査出土石器・石製品観察表 (No.363~365)

| 遺物番号 | トレンチ名 | 器種 | 法量 | | | | 分類 | 石質 | 測定・特徴 |
|------|-------|------------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|---|
| | | | mm | 幅mm | 厚mm | 重g | | | |
| 363 | TR 9 | 分離形 石製品 | 5.6 | 4.2 | 0.8 | 23.6 | | 綠色片岩 | 分離形を呈し、調文縫を打ち欠く。 |
| 364 | TR 9 | 石盤 | 2.9 | 1.0 | 0.4 | 1.4 | V C | サヌカイト | 縦長で右側縫の背脂を直角斜め調査し、左側縫には調査痕が認められない。 |
| 365 | TR 9 | 块状片 岩 | 2.5 | (1.7) | 0.4 | (2.3) | | 漂石 | 表面部分に丸地を持つ三角形で、半分に切接する。中央孔は上方に穿つ。複数孔を有する。 |

第三章 まとめ

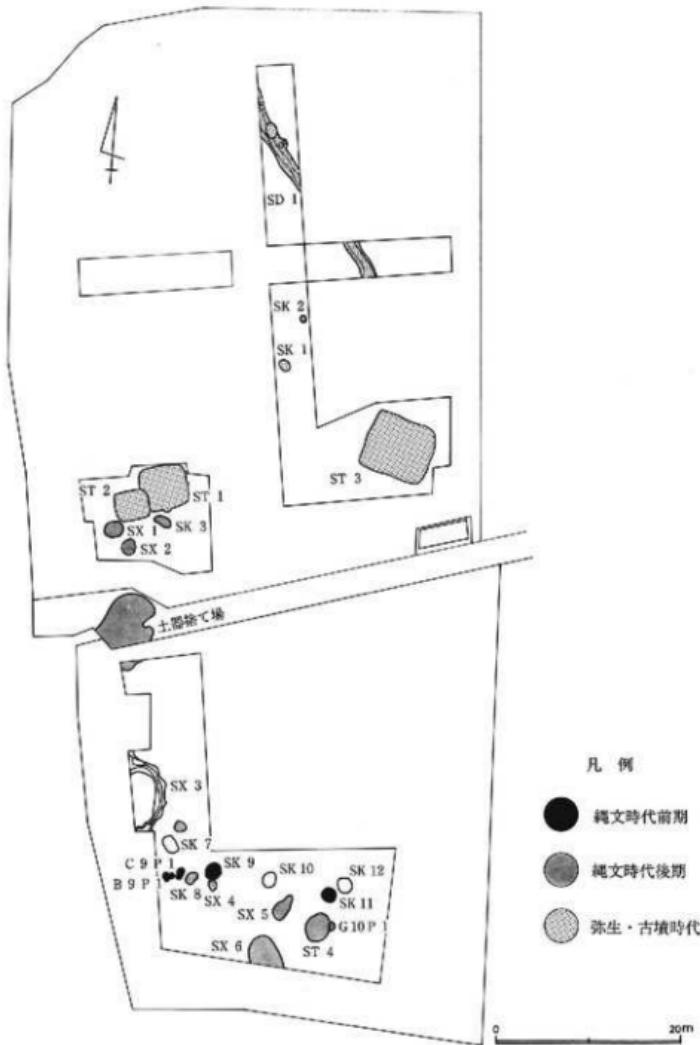
今回の調査で確認した遺構はC 4 グリッドの遺物集中地点、整穴住居跡1棟、平成2年度の土器捨て場の一部、性格不明遺構（S X）4基、土坑（S K）7基、ピット約50基、他に近世の水田跡、溝跡、わ跡、近世墓等である。この中で縄文時代以外のものとしてはS X 4をあげることができる（第59図）。遺物としては縄文時代早期から晩期、弥生時代に含まれるものが出土地している。遺構及び遺物について本遺跡に於けるあり方、問題点等を簡単に振り返っておきたい。

遺構を時期的に見ていくと、縄文時代前期に含まれると考えられるものはS K 9, 11, B 9 P 1, C 9 P 1である。B 9 P 1以外のものからは彦崎Z II式が出土しており、ほぼ同時期のものと考えられる。S K 9, 11は円形土坑で、規模もほぼ同様である。サヌカイト製石歿がS K 9から6点、S K 11からは1点出土しており、更にS K 9からはシカカイノシシと考えられる歯骨及びマダイも出土し、S K 11からも鹿角片も出土していることから、同様の機能を考えられる。S K 12からは時期を判断できる遺物は出土していないものの、規模等からするとS K 9, 11と同時期の可能性がある。平成3年度調査のS X 1, 2と比較的似ているものの、相違点としてはS X 1, 2の土坑上層には大型礫による配石が組まれており、機能としては「祭祀土坑か墓の可能性が考えられる」（出原恵三 1992）としており、また出土土器は縄文時代後期前半の宿毛式であることから、時期的な相違も上げることができる。しかし、前期のこれら円形土坑には比較的規格性があり、貯蔵穴、墓壙が想定されるものの、確定的な性格付は困難である。前期の遺構は南側の段丘縁辺部に集中する傾向を読み取れる。また中期についても遺構は検出されていないものの、遺物分布状況からすると前期と同様の立地条件を有するようである。

縄文時代後期に含まれるものとしては、土器捨て場、S T 4, S X 5, 6, S K 6, G 10 P 1である。土器捨て場は平成3年

第21表 縄文時代遺構時期別一覧表

| 時代 遺構 | 縄文時代 | | | | | 出土土器型式名 |
|----------|------|----|----|----|----|----------|
| | 早期 | 前期 | 中期 | 後期 | 晩期 | |
| C 4 グリッド | 後半？ | | | | | |
| S K 9 | | 後半 | | | | 彦崎Z II式 |
| S K 11 | | 後半 | | | | 彦崎Z II式 |
| B 9 P 1 | | ？ | | | | |
| C 9 P 1 | | 後半 | | | | 彦崎Z II式 |
| S T 4 | | | 前半 | | | 宿毛式 |
| 土器捨て場 | | | 前半 | | | 宿毛式、松ノ木式 |
| S X 5 | | | 前半 | | | 宿毛式、松ノ木式 |
| S X 6 | | | 前半 | | | 中津式、網毛式 |
| G 9 P 10 | | | | 中津 | | |
| S K 8 | | | | 後半 | | |
| S K 6 | | | | | ？ | |



第59図 松ノ木遺跡時期別構成配置図

度と本年度の調査区の境に位置し、微地形的には小枝谷状に落ち込みが見られ、また本年度の2次調査のT R 10でも一部分を確認しており。西の下段の水田方向にまでなだらかに傾斜を見せ、広範囲に土器捨て場が展開することが判明している。本年度1次調査では南側の肩の部分を検出し、平成2年度と同様に多量の土器が出土している。縄文土器は後期前半の松ノ木式を主体とし、僅かに宿毛式が認められる。「土器捨て場」と遺構名を付したもの、土器以外に礫、石器、動物遺存体も出土しており、中でも礫は土器と同等数以上出土していることから、単純に「土器捨て場」と規定はできないものの、後期前半の所謂「土器捨て場」としての廃棄場と考えられる。土器捨て場からは松ノ木式の器種組成を知り得るだけの多量土器群が出土しているものの、松ノ木式期の遺構は本遺構以外に皆無に近く、立地的に居住空間とは隔たりがあつたものと考えられる。

本遺跡で縄文時代の唯一の住居跡S T 4は宿毛式期に属するもので、宿毛式の展開する地域に於いて初めての検出例となる。土器捨て場からは宿毛式が松ノ木式に僅かに伴っているものの、S T 4では宿毛式のみが出土していることから、宿毛式と松ノ木式が型式的に分離できる証左となろう。S X 5は集石土坑で上部には礫及び礫間中には土器、乳棒状石斧、チャート製石鏃、石錐が混在して出土している。平成3年度のS X 1、2とは形態的に相違が認められるものの、機能としてはS X 1、2と同様のものと考えられる。S X 6については更に調査区外に展開する為、全貌は把握できなかったものの、広範囲に礫が平面的に広がり、下部には土坑等は確認できなかった。遺物は礫間中より石錐が9点出土しており、また土器は少なく中津式と宿毛式の破片が出土しており、また近くからは第42回172も出土している状況から判断して、時期的には後期でも初頭に含まれる可能性が高い。四国内で愛媛県岩谷遺跡に大規模な配石遺構が検出されているものの、本遺跡のS X 6は礫の大部分が小礫であり、岩谷遺跡のものは大礫で配石になっており比較検討は困難である。

遺物は縄文時代早期から弥生時代に含まれるものが出でておらず、中でも縄文時代は量的に多くはないものの各時期に亘っている。高知県下に於いても、各時期の土器が出土する遺跡は稀である。

縄文時代早期に含まれるものとしては、C 4グリッド遺物集中地点の石錐は短軸側縁に敲打により抉入部を作り出し、縄文時代後期の石錐は通常長軸両端に抉入部を設け、重量も30~60gのもので大半が占められ、早期の10~20gと軽量であるなど特徴的である。本山町長徳寺遺跡では押型文に伴い同様の石錐が出土していることから早期に伴うことはほぼ確実であろう。また重量、形態の違いから早期に伴う石錐は、網漁とは違った使用目途を考える必要があつる。早期に含まれる土器としては第39回98の無文土器で口縁部内側に刻みのみ見られるものを上げることができる。類例を求ることは困難であるが、県下の不動岩屋洞窟遺跡の厚手無文土器の1つにやや似るもの、細部に相違が認められることから早期でも同一時期とするには少し

問題がありそうである。

前期としては羽島下唇式、磯の森式、彦崎ZⅠ式、彦崎ZⅡ式、大歳山式、田井式にそれれ含まれるものが出土している。前期に関しては瀬戸内地域に含まれるものであり、南四国独自の展開は見られないようである。近隣の田井玉唇遺跡からは前期の遺物出土例が僅かに知られるのみで、南四国の中でも特に県中央部の前期については空白地帯とでも言える程資料は極端に少ない。その様な中で本遺跡には前期全般を通じての土器群、また大歳山式が認められることは注目に値しよう。中期についても前期と全く同様のことが言え、南四国の前期・中期の研究は緒についたばかりと言えよう。

後期は大きく分けて中津式に含まれる後期初頭の一派と、宿毛式・松ノ木式の後期前半に大きく括ることができる。初頭には中津式以外に、第41図166~168、第42図169~172は中津式の範疇で捉えられない中期的な様相を帯びたものが比較的多く認められる。特に166~168、172は中津式の範疇外のもので胴部には磨消繩文による鉢錐文が見られ、口縁部を特徴的に肥厚させるなど瀬戸内、南四国にはかつて知られなかったタイプのものである。中期の船元・里木式等の中に系統を追えるものではなく、また後続の宿毛式には直接繋がらないなど南四国中央山間部独自の中津式とは違った在地的な要素の強いものと考えられる。前期・中期では瀬戸内の影響が色濃く出ているものの、後期初頭の段階については瀬戸内の影響を拭拭する傾向にあると言える。しかし、今のところ一型式が成立すると言う程の資料の纏まりはないようである。

土器捨て場からは松ノ木式が纏まって出土しており、器種もバラエティーに富むものである。松ノ木式は宿毛式に後続するものとして、所謂「縁帶文成立期」の一群の土器に包括されるものであるが、しかし、文様系統としては単純に宿毛式の流れに含まれるものではなく、宿毛式には横位の文様構成を取るものが比較的多く、それに比べて松ノ木式は縦位文様を主体とするなど宿毛式をダイレクトに継承したとするには、文様系統からして宿毛式とは若干の隔たりがあるようである。宿毛式の分布する地域に於ける縁帶文成立期の土器群であることには違いないものの、福田KⅡ式の影響も多分に見逃せない。松ノ木式に伴う雷文状の沈線文鉢（第34図33等）の文様系統の出自も目下のところ不明であり、また第34図35の沈線文系の鉢で沈線の起点を円形に刺突するものは西南四国の中津式との関連を想起させるなど、松ノ木式の成立過程には若干の検討の余地が残されているようである。

松ノ木式に後続するものとして本年度2次調査では津雲A式タイプのものが僅かながらも纏まって出土している。宿毛式・松ノ木式との本遺跡内における出土状況は違え、宿毛式・松ノ木式の出土する河岸段丘より一段下の段丘であるなどの立地的な相違がある。松ノ木式と津雲A式タイプとは口縁形態からして全く系統を違えているようであり、津雲A式タイプが出土しているとは言え、南四国中央部に於ける縁帶文の成立は松ノ木式→津雲A式と言うような簡単な系譜式とはならないようである。

今回の調査に於いて、縁帶文時代に関しては種々の遺構・遺物を検出し、また2次調査では松

ノ木遺跡は更に広がりが予想されるなどの成果を得ることができた。しかし、それ以上に今後多くの問題点・課題が新たに残され、南四国の中綱研究は松ノ木遺跡の調査により新たな展開を迎えたと言えよう。特に縄文時代の空白地帯とでも言える南四国中央部にとって、基礎資料の蓄積はこれからであり、そのような状況下で松ノ木遺跡は縄文研究の第一歩を踏み出したと言い得る遺跡である。

【参考文献】

- 安岡源一・酒井伸男・岡本健児 1951 「宿毛貝塚」高知県教育委員会
- 鎌木義昌・西田 栄 1957 「伊豫平城貝塚—縄文土器を中心として」愛媛県御荘町教育委員会
- 岡本健児 1966 「宿毛貝塚出土縄文式土器の再検討」『研究誌』5号 高知小津高校
- 間壁蔵子・間壁忠彦 1971 「黒木貝塚」『倉敷考古館研究集報』第7号 (財)倉敷考古館
- 藤田憲司・間壁蔵子・間壁忠彦 1975 「羽島貝塚の資料」『倉敷考古館研究集報』第11号 (財)倉敷考古館
- 小都 隆 1976 「洗谷貝塚」福山市教育委員会
- 犬飼徹夫 1978 「岩谷遺跡」愛媛県広見町
- 中越利夫 1982 「岡山県の森貝塚出土の遺物について」『帝釈岐遺跡群発掘調査室年報V』広島大学
文学部帝釈岐遺跡群発掘調査室
- 木村剛朗 1983 「土佐における後期縄文文化について」『高知の研究』13 清文堂
- 泉拓良 1984 「栗津貝塚湖底遺跡」滋賀県教育委員会
- 藤田憲司・間壁忠彦 1984 「船元貝塚の資料」『倉敷考古館研究集報』第18号 (財)倉敷考古館
- 中越利夫 1985 「帝釈岐遺跡群出土の縄文前期土器の研究(1)」『帝釈岐遺跡群発掘調査室年報VI』広
島大学文学部帝釈岐遺跡群発掘調査室
- 鎌木義昌 1986 「中津貝塚」『岡山県史』第18巻 考古資料:岡山県
- 犬飼徹夫 1986 「愛媛県史資料編」
- 直良信夫 1987 「大蔵山遺跡の研究」真陽社
- 木村剛朗 1987 「四万十川流域の縄文文化研究」
- 大山真充・真鍋昌宏 1988 「大浦浜遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 V』香川
県教育委員会
- 谷岡陽一・中原 齊 1989 「栗谷遺跡発掘調査報告書 I」福部村教育委員会
- 玉田芳英 1989 「中津・福田K II式土器様式」『縄文土器大観』4 小学館
- 千葉 豊 1989 「縄文系土器群の成立と展開」『史林』72巻6号
- 泉 拓良・松井 章 1989 「福田貝塚資料」『山内清男考古資料』2 奈良国立文化財研究所

- 谷岡陽一・中原 齊 1990 「栗谷遺跡発掘調査報告書 Ⅲ」福部村教育委員会
- 植田文雄 1990 「今安塚寺遺跡」能登川町教育委員会
- 出原恵三 1991 「松ノ木遺跡Ⅰ」高知県本山町教育委員会
- 山本悦貴 1992 「津島岡大遺跡 3」岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 千葉 直 1992 「西日本縄文後期土器の二三の問題」『古代吉備 第14集』古代吉備研究会
- 出原恵三 1992 「松ノ木遺跡Ⅱ」高知県本山町教育委員会

写 真 図 版

写真 1



遺跡遠景（対岸より）

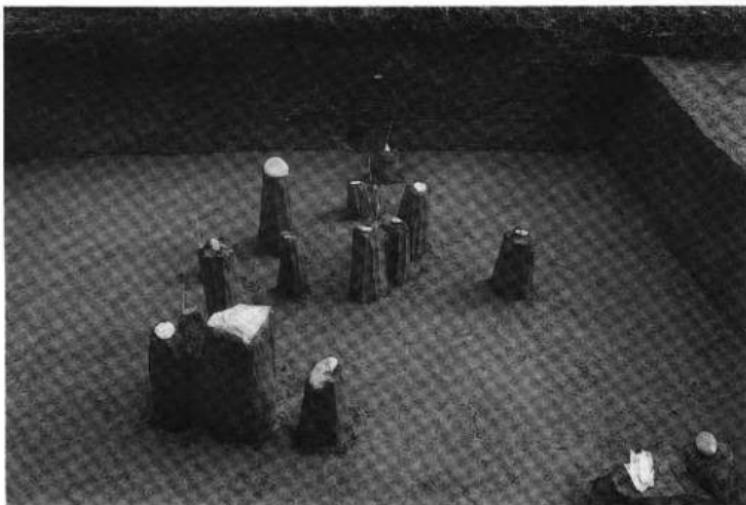


遺跡全景（東より）

写真 2

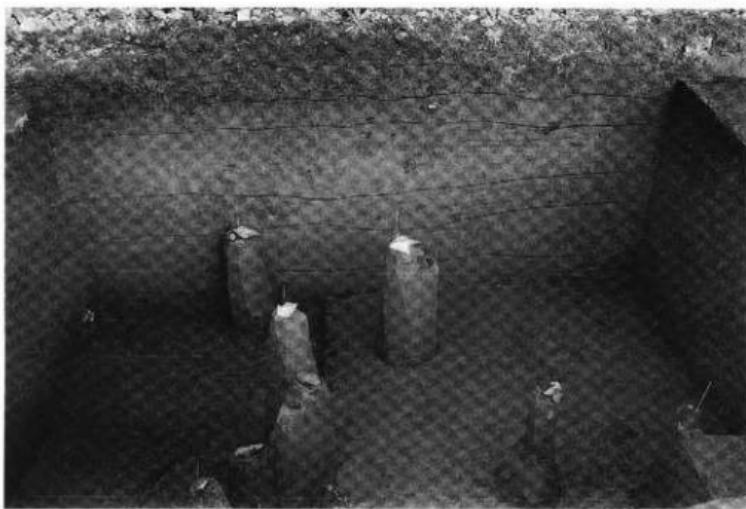


遺跡近景 TR 1 (西より)



C 4 グリッド遺物集中地点 (1)

写真 3



C 4 グリッド遺物集中地点 (2)

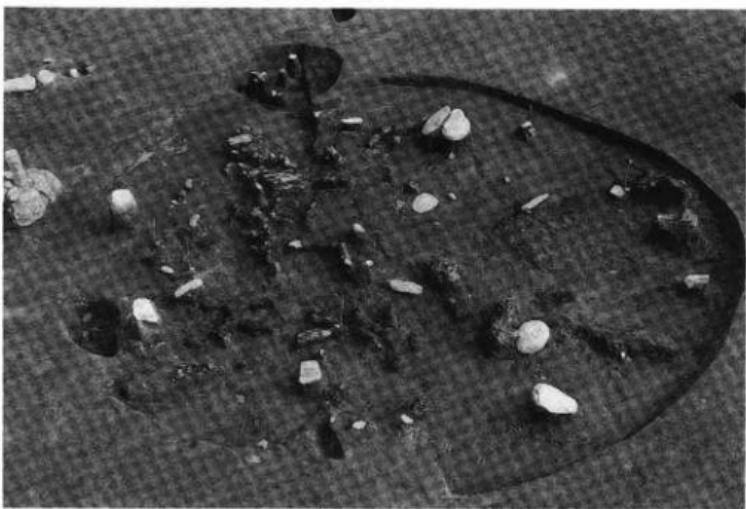


土器捨て場 (1)

写真 4



土器捨て場（2）



ST 4 (1) 西より

写真5



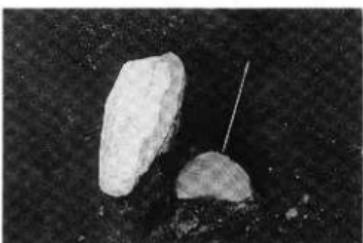
ST 4 (2) 北東より



ST 4・確認状況



ST 4・セクション（南西より）

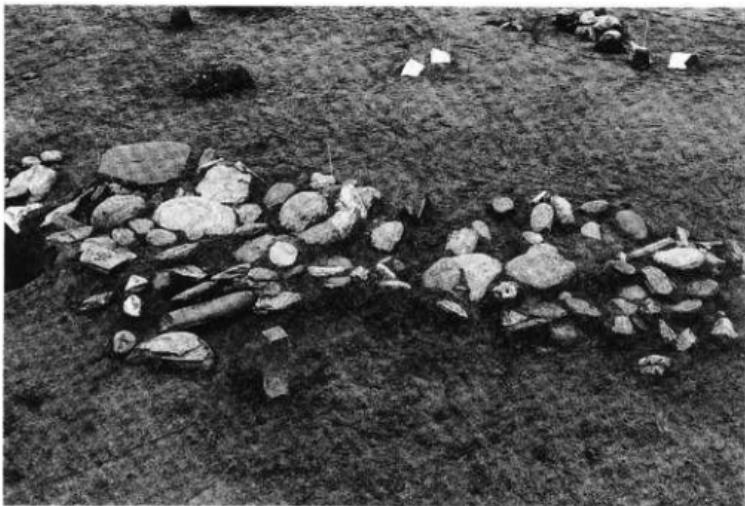


ST 4・遺物出土状況 (No. 9)

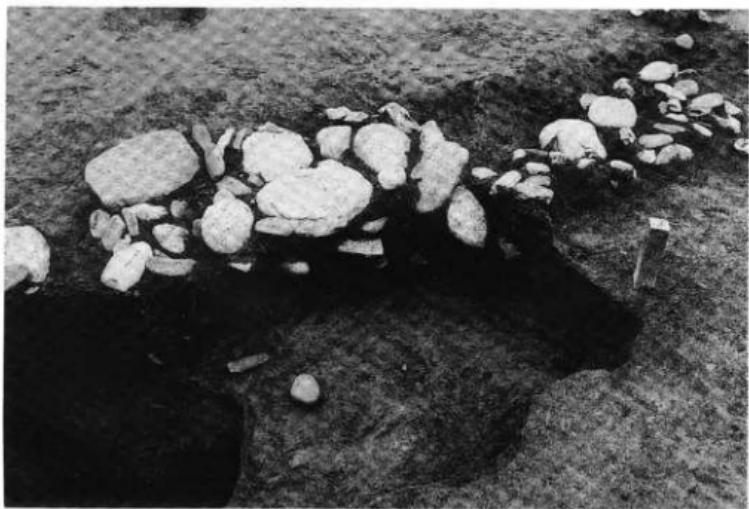


ST 4・中央部炭化材

写真 6

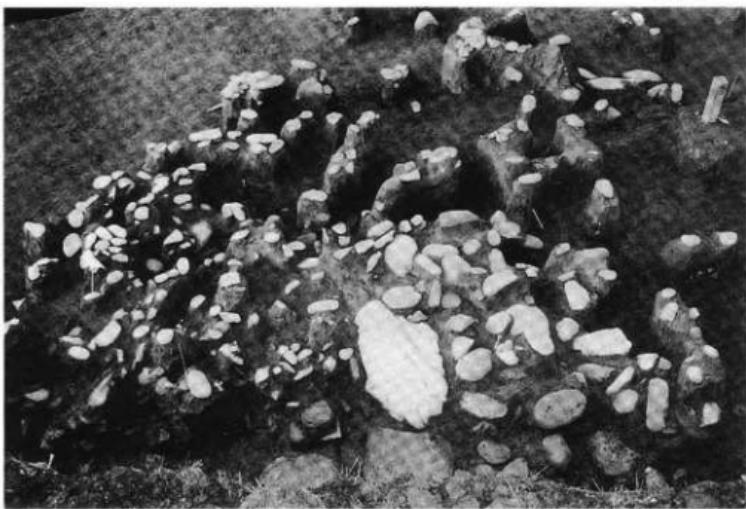


SX 5 (東より)



SX 5・セクション (南東より)

写真 7

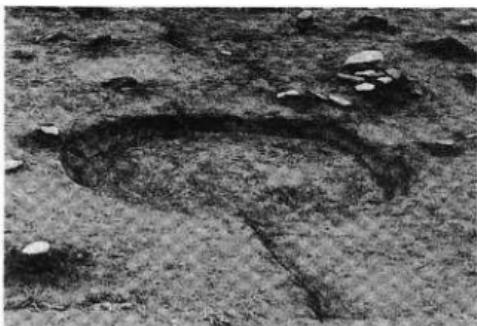


SX 6 (南より)



SX 6 (西より)

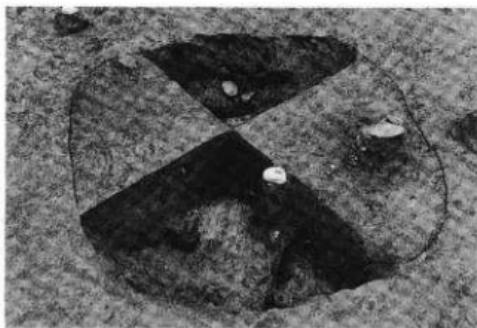
写真 8



SK 9

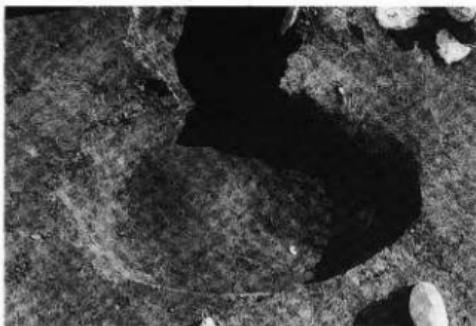


SK 11



SK 11・セクション（北西より）

写真 9



B 9 P 1



SX 4



G10 P 1

写真10



SX 3 (東より)

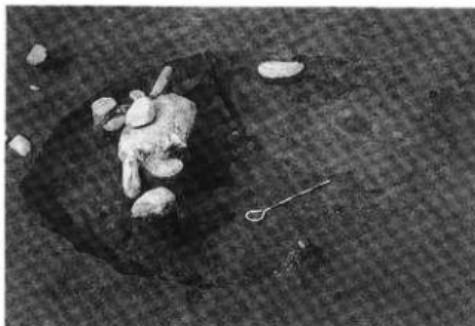


SX 3 (南より)

写真11



SK 7 (西より)



SK 10



SK 12 (東より)

写真12



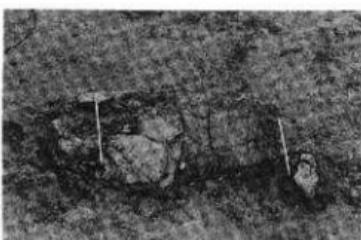
SX 6・水田・SG 1・SG 2



B 9～10グリッド遺物出土状況



No. 172出土状況



No. 98出土状況



ミニチュア土器（No. 351）出土状況



SX 3周辺調査風景

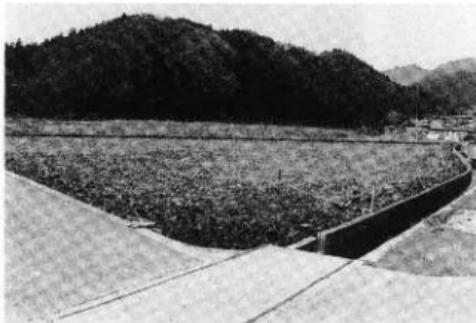


ST 4周辺調査風景



土壤ふるい掛け

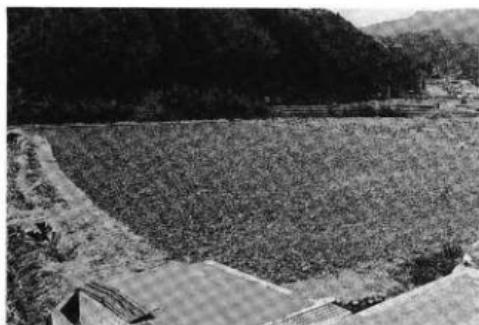
写真13



2次調査 A区



2次調査 B区（南）

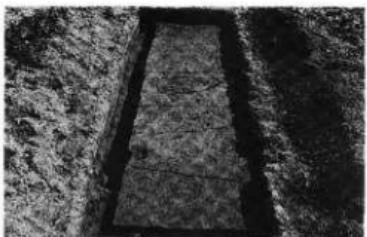


2次調査 B区（北）

写真14



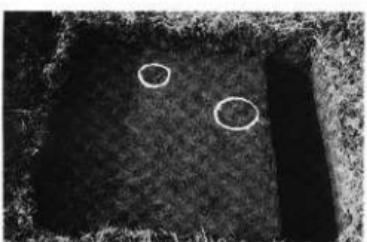
2次調査 TR 3 (南より)



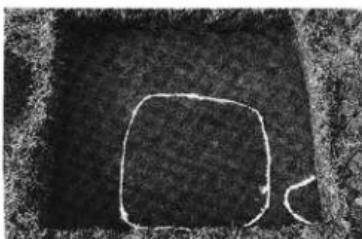
2次調査 TR 4 (北より)



2次調査 TR 4 遺物出土状況



2次調査 TR 5 (南より)



2次調査 TR 6 (南より)



2次調査 TR 9 (南より)



2次調査 TR 10 (北より)



2次調査 TR 10サブトレ (南東より)

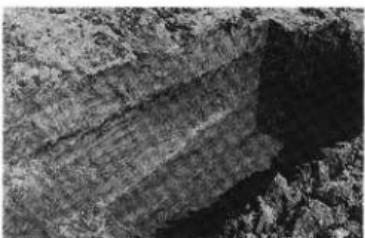
写真15



2次調査 TR 11 (北西より)



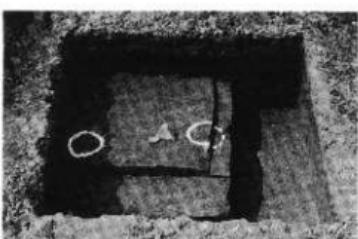
2次調査 TR 12西側部 (南東より)



2次調査 TR 12東側部 (南より)



2次調査 TR 17 (南より)



2次調査 TR 17 (東より)



2次調査 TR 18 (東より)